

八 織田豊臣氏の時代

京都關東の交渉開く

天正の初年、武田信玄上杉謙信相次で卒し、復東國の覇を争ふものなく、氏政獨り東國に主たり。此の頃中央部に在りては、織田信長尾張の小城より起りて京師に入り、四境に號令して威權京畿に盛なり。天正八年二月、氏政使を京師に送り款を信長に納る。是れより初めて關東と中央部との交渉の途開く。次て天正十年信長大兵を以て甲斐の武田勝頼を討するや、氏政之れを援けて兵を駿河に出し、又使を陣中に送りて信長を勞ふ。茲に至つて北條氏事實に於て已に信長に屈せりといふべし。

瀧川一益關東管領

聽て信長勝頼を滅して武田氏の領地を沒收し、其の臣瀧川一益を上野箕輪に置き、關東管領として東國を支配せしむ。幾くならずして一益厩橋に移る。厩橋は今の前橋市なり。

上野全圓北條氏に歸す

此の歳六月、信長京都に在りて其の臣明智光秀の弑する所となり、大業中道にして敗る。此に於て氏政其の子氏直をして小田原を出て、上野に入りて

秀吉の勢力東國に及ぶ

一益を厩橋に討たしむ。一益已に其の主を失ふて軍氣沮喪し、忽ち敗れて畿内に走る。上野全圓遂に北條氏に歸す。

北條氏の屬城

豊臣秀吉は初め織田氏の臣なり。光秀を誅して信長の爲めに讐を報し、漸々織田氏の宿老を除きて勃興し、四國中九州を平け天下に號令す。關東に在りては常陸の佐竹義重を始め、安房の里見氏、下總の結城氏、下野の那須黨、皆款を通す。秀吉關東を治めんとし、屢々氏政父子を招く。然れとも氏政氏直驕慢深く自ら恃みて命に應せず。此に於て天正十七年十月、秀吉東征を決して軍令を諸將に頒ち、翌十八年三月を以て大軍を率ゐて京都を發す。是れより先き、氏政父子、亦大に城郭を修めて戰備を嚴にす。關東諸國に於て北條氏直轄の屬城の重なるものには、伊豆韭山城に北條氏親あり、全下田城に清水上野守あり、上野松井田に大尊寺駿河守あり、武藏鉢形城に北條氏邦あり、全國忍城に成田氏長あり、全國八王子城に北條氏興あり、相模甘繩城に北條氏勝あり、武藏岩付城に太田氏房あり、其の他北條氏に隸屬せるものは、相模には新井三崎武藏には深谷河越松山木栖菖蒲羽丹生江戸津久井上

秀吉東征

小田原陣中

野には大胡・小幡・伊勢崎・新田・倉賀野・那和・前橋・安中・小泉・箕輪・木部・白井・飯野・館林・藤岡・八幡山下野には免取・足利・主生・皆川・藤岡・加沼・小山・榎本・上總には米本・椎津・窪田・萬騎・長南池和田・東金・岩崎・上氣・成戸・下總には國府・臺取・手關・宿小・金助・崎印・西木・滿佐・倉白・井大・須賀・我孫子・東野・小久保・古河・山室・守谷・栗橋・寛水・布川・常陸には守山・土浦・江戸崎等の諸城あり。何れも北條氏の爲めに軍備を整ふ。四月秀吉の軍、箱根を踰へ、西の高山に陣し、已にして又之れを笠懸山に移し、重圍持久を決して始めより本城に激烈なる攻撃を加へず、陣中宴を張り連歌を催し、優遊日を送りて以て敵の疲勞を待つ。世に急速事を決せざるを稱して、小田原評定といふの語は實に此陣に起因す、當時の陣中の狀を記するものを見るに、是故に陣中ゆたかなり、東西南北に小路をわり、大名衆陣かまへには廣大なる屋形作りし書院、數寄屋を立、庭には松竹草花を植、さて又陣屋毎の四壁には野菜の爲めとて瓜茄子、大角豆など植をき、町人は小屋をかけ諸國の津々浦々の名物を持來て賣買市を爲す、或は見せ棚をかまへ唐工高麗の珍物京堺の絹布をうるもあり、或は五穀鹽香干物をつみかさねをき何

北條氏屬城頼りに陥る

小田原滅ぶ

にても賣買せすといふことなし、京田舎の遊女は小屋をかけをき色めきあへり、其の外海道のかたはらに茶屋はたこや有て陣中まつしき事なしといふ。(北條五代記)

閑悠久しきを持するの要意を見るべし。

斯くの如く小田原城に對しては秀吉最も持久の策を爲せしと雖も、之れに反して關東内の北條氏屬城に對しては部將を遣り精英の兵を以て頗る猛烈なる攻撃を加へたり。三月織田信雄等が韭山城を圍みたるを始めとし、五月、淺野長吉・木村重茲は家康の武將と共に岩付城を抜き、進て下總に入り、石田三成等は館林及び忍城を降し、前田利家・上杉景勝等は松井田・鉢形及八王子を陥れ、忽ちにして八國を平定す。此に於て羽翼已に斷たれて小田原孤立す。陸奥の豪族伊達政宗、亦此の時を以て來降す。七月五日氏政遂に城中に自殺し、氏直出て、秀吉に降る。此に至るまで包圍實に四ヶ月に亘れり。秀吉氏直を高野山に放つ。

延徳三年、北條早雲伊豆に入りてより此に至て五代、百餘年にして北條氏

秀吉の東國處分

亡ぶ。此の間關東の地は全く中央京畿との關係を離れて殆ど交渉なく、一獨立區域の觀あり。此に及びて復京都の威令に服す。
秀吉北條氏の領を沒收し、其の故地を擧げて之れを徳川家康に與ふ。常陸の佐竹義重多賀谷重經下野の宇都宮國綱佐野房綱及び那須七黨の輩は曾て款を秀吉に納れたるの故を以て、何れも其の領土を全ふす。千葉國胤以下北條氏に黨せしもの皆其の領を沒收せらる。

役後、秀吉淺野長政木村重茲及び石田三成等をして關東の檢地を司らしめ、自ら亦馬を鎌倉に進めて東國を威壓し、尋て京都に凱旋す。

徳川家康江戸城に入る

徳川家康は茲歲八月朔日を以て武藏江戸に入りて之を居城と定め、板倉勝重を町奉行に任して城下の政を執らしめ、伊東忠次をして管内諸國の租税を司らしむ。繼て家臣を領内に封す。封を受くるもの十萬石以上のもの三人、一萬石以上のもの三十一人、已に宛然一個の覇府を爲せるものといふべし。左に豊臣東征後に於ける關東諸國の封邑領主を擧ぐべし。
武藏江戸貳百五拾五萬七千石。 徳川家康。

(伊豆相模上野下野武藏上總下總)

徳川領の内(壹萬石以上の分)

上野高崎拾貳萬石。	井伊直政。	上野館林拾萬石。	榊原康政。
上野小幡三萬石。	奥平信高。	上野厩橋三萬石。	平岩親吉。
上野白井二萬石。	本多康重。	上野鳴渡二萬石。	石川康通。
上野吉井二萬石。	菅沼忠政。	上野大胡二萬石。	牧野康成。
上野那波一萬石。	松平家乘。	上野阿保一萬石。	菅沼定盈。
上野八幡一萬石。	本多正信。	下總矢作四萬石。	烏居元忠。
下總白井三萬石。	酒井家次。	下總關宿二萬石。	松平康之。
下總生實二萬石。	西郷清員。	下總古河二萬石。	小笠原秀政。
下總守谷一萬石。	土岐定義。	下總小見川一萬石。	松平忠利。
下總佐倉一萬石。	三浦重成。	上總大多喜拾萬石。	本多忠勝。
下總岩田一萬石。	北條氏勝。	上總久留里三萬石。	大須賀忠政。
上總佐貫二萬石。	内藤家長。	上總山崎一萬石。	岡部長盛。

相横小田原四万石。 大久保忠世。 伊豆韭山一万石。 内藤信成。
 武藏忍拾万石。 松平忠吉。 武藏利市二万石。 松平康重。
 武藏岩槻二万石。 高力清長。 武藏八幡山一万石。 松平忠頼。
 武藏川越一万石。 酒井重忠。 武藏小室一万石。 伊奈忠次。
 武藏深谷内一万石。 松平康長。 武藏深谷内一万石。 松平忠輝。
 武藏奈良利蛭川一万石。 諏訪頼忠。 武藏本庄一万石。 小笠原信之。
 常陸水戸八十万石。 佐竹義宣。 下總結城拾万千石。 結城秀康。
 常陸下妻六万石。 多賀谷重綱。 下野佐野三万九千石。 佐野政綱。
 下野皆川三万石。 皆川廣照。 上野沼田二万七千石。 真田信幸。
 常陸下館二万五千石。 水谷勝俊。 下野烏山二万石。 成田泰親。
 下野山川二万石。 山川朝信。
 下野那須六万五千五百石那須衆
 此後蒲生秀行、陸奥會津より宇都宮へ移され拾八万石を得たり。其の他徳川氏領内の封邑にも多少の變更あり。

國郡の稱を正す

江戸中央政府となる

關所の設置

是れより先き戰國の世、豪族の諸國に割據するや、その領地の伸縮に従て悉に國郡の境界を亂し或は私に郡名を設くるあり、公稱を廢するありて地方郡里漸く濫稱多し。秀吉戰亂を戡定するに當りて親しく地を檢せしめまた古記に徴し、悉く根據なき私稱を停め、境界を正し、古の正稱に復せしめたり。

九 江戸幕府時代

徳川家康已に江戸に居城して他日の基礎を關東に立て、秀吉薨ずるに及びて威望を以て諸侯を服し、繼て關ヶ原の一戦を経て豊臣氏の臂腋を断ちて以て天下の權を自家の掌中に收めたり。事實上に於て徳川氏の幕府は實に此の時を以て成れりといふべし。超て慶長八年二月、家康右大臣を拜し征夷大將軍淳和并學兩院別當源氏長者に補せられて、名實共に備つて國に臨み、大小名の邸宅を江戸に給し、其の妻子を移住せしむ。江戸の地是れより武家の大政府なり。

江戸已に大政府所在の地となりて、關東の地は即ちその藩屏なり。根府川

徳川氏の關八州に對する注意

箱根・小岩もくの橋・市川・四郷・五科・川俣・芝金町・關宿・松戸・小佛・大戸・碓氷・房川・中田等に新に關所を置きて江戸を圍み、守備を嚴にし出入を匡す。後年泰平の續くに從て其の制或は弛び、或は之れを廢せるものありと雖も、獨り箱根と碓氷とは東西交通の要衝に當るの故を以て、特に之れに注意し、幕府の末路に至るまで依然として嚴規を改むることなかりき。此の他行政司法等の法規に於ても幕府は特に意を用ゐて關八州に對しては特殊の取扱を爲さしめたるもの多し。その諸侯封邑の配置の如きも亦實に最も意を致したるもの、一なり。

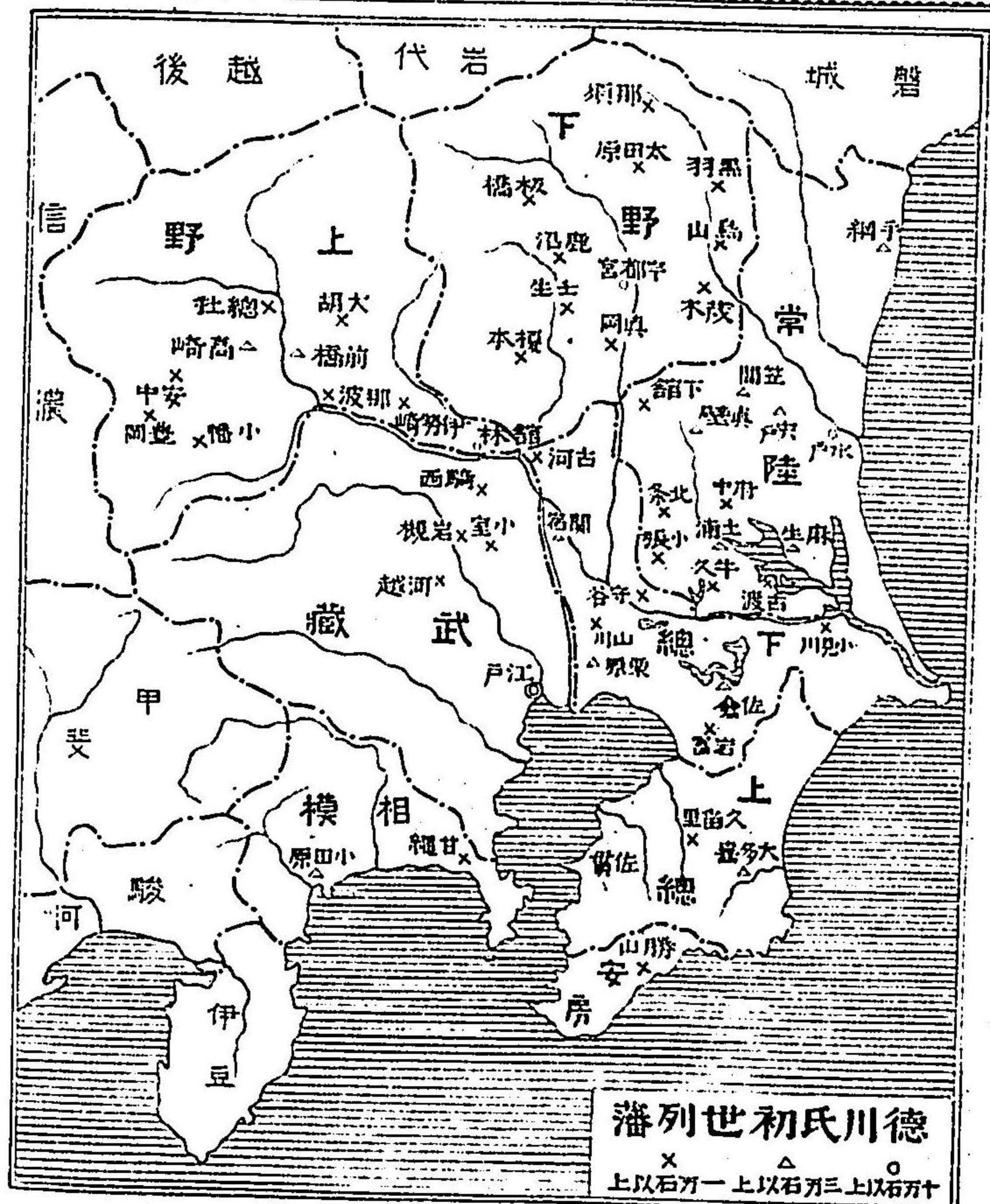
蓋し、徳川氏三百年の天下を泰平の下に持續し得たりしものは、其の原因策略種々ありと雖も、各地諸侯の配置の上に施したる策略の巧妙なりしとは實に是れが重要な一因たると言を待たず。而して關東は特に幕府所在の地たるを以て幕府の注意深く、其の要地は取て直領と爲し郡代をして之れを管せしめて諸侯を入れず。其の他の地と雖も之れに對したるものは參河以來譜第の家臣にあらざれば、即ち准譜第の大名を以てし、若しくは旗下の士の知行所に宛て、絶て外様疎遠の大名を置く事なし。就中小田原・水戸・宇都宮等の

地は自ら要衝の地たるの故を以て、更に一層の留意を以て處したるが如し。



徳川家康の像 (東京上野野龍院藏)

實に小田原の地は關東の咽喉にして箱根の嶮を要するものなり。故に家康江戸に入るの時に於て腹臣大久保忠世を封して以て代々之に守たらしめたり。水戸と宇都宮とは東北交通の要樞にして江戸城の搦手に當るの地と稱す。即ち一は近親を封して親藩を爲し、一は奥平、阿部等の重臣を封す。以て東北の諸侯を制し以て江戸城を守らしむべきなり。



其の地前橋・古河・關宿・佐倉等の諸邑皆封ずるに股肱の臣を以てし、自ら鞏固なる江戸城の外郭たらしめたり。以上の諸城及び土浦、結城、壬生、川越、忍等江戸近邊十八城、世に之れを關東十八城と稱す。蓋し規を立て譜第を限りて

城主とせし所のものなり。

斯くの如く關東の中、要地には悉く譜第を封して外様を置かすと雖も、尙ほ治世三百年間時宜に應じて或は之れを移し或は之れを轉して、領地の増減封土の轉換殊に繁く、永きも數代に亘るは少く、短きは僅に一兩年にして他に換り、一領主をして一所に固定してその地方と親密なる干係を生せしむることを爲さしめず。亦幕府意の在る所なり。中葉以後稍々轉封の繁を寬ふせしも、尙ほ他の國主大名の如く一地に固定するが如き態なし。従て三百年間に於ける領主の變換を悉く擧ぐるはその煩に堪えざる所なり。又縦令強てこれを擧ぐるも要するに譜第たるの實は一にして深き變化あるにあらず。故に茲には幕府創立の際の領主封土とその末路の各地領主封土とを掲ぐるに止むべし。また以て地方に中心地の轉移を下するの料となるべし。

關東各地方領主一覽表

地名	幕府創立當時の領主	幕府末路の領主
常陸水戸	貳拾五万石 德川頼房	三十五万石 德川慶篤

常陸安戶	五万石	秋田實季	一万石	松平頼徳
常陸眞壁	五万石	淺野長重		
常陸手網	四万石	戸澤政盛		
常陸土浦	四万石	松平信吉		
常陸麻生	三万三百石	新莊直定	九万五千石	土屋寅直
常陸笠間	三万石	松平康長	一万石	新庄直虎
全下館	貳万五千石	水谷勝俊	八万石	牧野貞明
常陸小張	一万六千石	松平重綱	二万石	石川總管
常陸府中	一万石	六郷政乗	二万石	松平頼繩
全古渡	一万石	丹波長重		
全北條	一万石	佐久間勝之		
全牛久	一万石	山良直繁	一万十七石	山口弘敞
全下妻			一万石	井上正兼
全谷田部			一万六千石	細川興貫

下總佐倉	六万五千石	土居利勝	拾一万石	堀田正倫
全關宿	四万石	松平忠良	五万八千石	久世廣周
全栗原	三万四千石	成瀬正成		
全山川	貳万五千石	松平定綱		
全古河	貳万石	小笠原政信	八万石	土井利則
全小見川	貳万石	安藤重信	一万石	内田正徳
全岩富	一万石	北條氏重		
全守谷	一万石	土岐定義		
全多古			一万二千石	松平勝行
全結城			一万八千石	水野勝任
全生實			一万石	森川俊徳
全高岡			一万石	井上正和
上總大多喜	五万石	本多忠朝	二万石	松平正和
全佐貫	三万石	内藤政長	一万六千石	阿部正恒

全 伊勢崎	全 安中	全 那波	全 厩橋	全 大胡	全 高崎	全 上野館林	全 館山	安房勝山	全 一ノ宮	全 鶴牧	全 請西	全 飯野	上總久留里
一萬石	一萬石	二萬石	三萬三千石	二萬石	五萬石	拾萬五千石	二萬石	貳萬千石					貳萬石
稻垣重綱	井伊直孝	酒井忠世	酒井重忠	牧野忠成	酒井家次	榊原康勝	內藤清次						
二萬石	三萬石		十七萬石		八萬二千石	六萬石	一萬石	一萬二千石	一萬三千石	一萬五千石	一萬石	二萬石	三萬石
酒井忠強	板倉勝殷		松平直克		松平輝聰	秋元志朝	稻葉正巳	酒井忠一	加納久徵	水野忠順	林忠交	保科正益	黑田直和

全 豐岡	全 物社	全 小幡	全 沼田	下野宇都宮	全 黑羽	全 鳥山	全 那須	全 壬生	全 西方	全 鹿沼	全 大田原	全 真岡	全 茂木
一萬石	一萬石	一萬石	拾萬石	二萬石	二萬石	二萬石	一萬七千石	一萬五千石	一萬五千石	一萬五千石	一萬二千石餘	一萬二千石	一萬石
根津信成	秋元長朝	水野忠清	奧平家昌	大關政増	成田氏範	那須資景	日根野吉明	藤田重信	阿部正次	大田原晴清	堀親良	細川興元	
			七萬七千石餘	二萬三千石	三萬石	三萬石	三萬石			一萬千四百石			
			戶田忠恕	太關増徳	大久保忠美	鳥居忠寶				大田原富清			

に規模を擴張し、天下の費を傾けて大に廟宇を經營す。十三年工成り家光參拜して大供養を爲す。社殿門廡、彩飾を極め彫刻を盡し、金銀五彩の燦然たる、結構の壯麗なる、誠に關東の壯觀にして又天下の美觀なり。天皇勅額を賜ひ、幕府二万千石を献して神領と爲す。特に日光奉行を置きて之れを管せしめ、法親王を乞ふて門主と爲し、輪王寺宮と稱して上野寛永寺と共に兼攝せしむ。此他に在りては芝靈廟の建築、寛永寺護持院の經營等あるも、事江戸に屬するの故を以て、江戸城の修築と共に皆之れを茲に省くべし。

要するに徳川氏の三百年間、上下唯幕府に謳歌し、蕩然して泰平に酔ふて復他事なく、子々孫々安靜に相傳せし時代なり。従て文化史上に於ては、特殊の發達開展あり、文藝美術には非常の進歩ありたりと雖も、歴史地理の上には於ては、特に多く記すべきものを見ず。

徳川氏世を傳ふる十二代、家慶將軍の時に當り、泰平の夢を驚かしたる者は外國艦の來航なり。嘉永六年アメリカ軍艦初めて浦賀に來り、幕府に開港を強請す。續てイギリス・ロシア・フランス亦來り、世局漸く困難なり。幕府新

神奈川開港

に下田奉行を置き外船の事を司らしめ、品川灣に砲臺を築きて江戸の守備と爲す。安政五年、井伊直弼大老たり。遂に各國と條約を結ひ、他の四港と共に神奈川を開きて貿易港と爲す。已にして之れを横濱に移す。外國交易の途是より開く。

是より先き水戸藩明君賢補出て、率先して勤王の説を唱導し、諸藩の志士水戸に遊ふもの多し。此に於て勤王の論全國を風靡し、遂に攘夷の説と結び討幕の議を和し、天 愈沸亂して遂に幕府を倒すに至れり。慶長八年家康征夷大將軍に任せられてより慶應三年慶喜政權を奉還するまで、徳川氏總て十五代二百六十五年なり。

十 維新以後

慶應三年十月徳川慶喜京都に於て政權返上を奏請して許可せられ、源頼朝府を鎌倉に開て已來七百年の武家政治廢して大權復朝廷に歸す。稱して王政維新と云ふ。是と共に江戸の地亦三百年の日本中央政府たりし地位を去りたり。

江戸擾乱

然れとも關東八州は徳川氏根據の地にして、封を此地に受けし譜第大名と、邸宅を江戸に有する八万旗下の士とは、亦參河已來徳川家恩顧の輩なり。政權奉還の報を得て素より喜はず、江戸城を支へて錦旗に抗し、永く徳川氏の幕府を保たんと期す。翌明治元年正月、慶喜の大阪より海路江戸に歸るや、即ち之れを奉し、函嶺の嶮を擁して關八州を守らんと主張する者多し。慶喜忠誠飽くまで恭順を持し、固く執て應せず。城を出て、上野大慈院に退きて恭順罪を待つ。勝安房亦慶喜を補け斷して衆議を排して和親説を取る。旗下の將士之れに服せざるもの隊を組て彰義誠忠純義會義草風等と名つけ主戰を稱へて市中に跋扈す。市民逃散して江戸の紀綱大に崩る。

是より先き朝廷東征の令を發し、有栖川宮熾仁親王を以て征討總督となし、西郷隆盛を以て總督府參謀となし、二月京都を發し、東海東山兩道より江戸に向ふ。橋本實梁、東海道先鋒兼鎮撫使たり、岩倉具視、東山道の先鋒兼鎮撫使たり。三月八日大總督駿府に着し、先鋒品川に入る。此の時東山道の先鋒亦板橋に達し、腹背より江戸の境を壓し、江戸の命運旦夕に逼る。而して

官軍江戸城を
收む

遂に無事に其の局を結ひて、八百八街を焦土に化するに至らしめざりしものは、實に勝安房西郷隆盛の効なり。

此時幕府の主戰黨彰義隊以下の徒は上野に據て滅び、板本鎌次郎等は船舶八隻を以て海上箱館に遁れ、大島圭介等は兩總の地に走る。此に於て關東八州人心恟々として物情騒然たり。官軍慶喜を常陸水戸に移し、江戸城を收めて大總督府を城内に開き、以て東北の戡定に従事す。四月大島等下野日光に戰て敗れ會津に走る、關東畧定す。

官軍即ち舊幕府の封土を收め江戸に江戸府を置き、横濱に神奈川府を置き、常陸安房上總に知事判事を任命し、舊幕府直領の地を管せしむ。七月十二日江戸を收めて東京と稱し、鎮臺府を廢して新に鎮將府を江戸に置き、輔相三條實美をして鎮將を兼ねしめ、以て駿河以東十三國を管せしむ。尋て十月之れを廢す。此時車駕東京に幸し十月十三日舊江戸城に入り之れを皇居と定めて東京城と改稱す。東京之れより帝國の首府となる。(東京市沿革参照)

地方の政治は、此後明治二年を以て下總に葛飾縣、武藏に小菅縣、大宮縣品

江戸を東京と
改む
東京帝國首府
となる

廢藩置縣

川縣、上總に宮谷縣、常陸に若森縣を置き、舊藩領を管せしめ、列藩は尙ほ舊に因て其の稱を保たしめしが、四年七月遂に悉く藩を廢して縣となし、舊藩主をして縣知事たらしめ、十一月に至り更に各藩主をして其の版籍を奉還せしめ、改めて關東七國及び伊豆に左の一府十縣を置き、縣令を任して其の地の行政事務を司らしむ。

東京府及び神奈川縣入間縣埼玉縣武藏 足柄縣相模及び伊豆 木更津縣
(上總及び安房) 印幡縣(下總) 新治縣及び茨城縣(常陸) 椽木縣及び宇都宮縣
(下野) (上野に群馬縣ある事舊に依る)

其の地の司法事務は足柄木更津新治椽木茨城印幡群馬宇都宮八縣に裁判所を置きて之れを管す。其後行政區畫の變遷と共にまた變遷あり。

尋て六年六月、印幡木更津二縣を廢して其の地に千葉縣を置き、入間群馬二縣を廢して其の地に熊谷縣を置き、又宇都宮縣を廢して之れを椽木縣に併す。八年五月に至り又新治縣を廢して其の地を千葉及び茨城二縣に併せて利根川を以て二縣の境界と定め、七月千葉縣の一部を裂きて之れを埼玉縣に併

其後の縣の廢合

伊豆七島小笠原島

す。九年四月更に政府諸縣の廢合を行ふに當り足柄縣を廢し、其の地を神奈川縣及び靜岡縣に併合す。全年八月熊谷縣廳を高崎に移し、之れを群馬縣と改稱せしむ。已にして十四年二月復群馬縣廳を前橋に移す。
伊豆七島は初め靜岡縣の管轄なりしを、十一年一月、靜岡縣を廢するに當りて改めて東京府に隸す。小笠原島は初め内務省の直轄なりしが、十三年十月、東京府に換屬す。

軍政

軍政は初め鎮臺府を東京に置きしか、明治六年正月、之れを改め全國を六管鎮臺に改めて關東に東京鎮臺を置き、其の後更に之れを師團制に改めて東京に第一師團を置き、第一旅團を東京に、第二旅團を佐倉に置く。海軍は是より先き十七年十二月横須賀に鎮守府あり。已にして日清戰爭後更に大に又軍備の擴張あり。陸軍に於ては東京に東部都督を置き、近衛師團及び第一第二兩師團を東京に設け、佐倉及び高崎に聯隊を置き、海軍に於ては大に軍港の擴張軍艦の設備を増す。

第二章 政治宗教

一 行政

行政の組織に地方制度と中央制度との區別あり。前者は主權者が一地方を區劃して、行政の機關に其の支配權を委託するもの、後者は主權者が行政事務を分劃して之れを委託するものなり。古代にては地方制度行はれ、現今の如く主權の統一を主とする時にありては、中央制度によりて組織せらる。然れとも猶例外として地方制度を採用せり。即ち知事が行政官たるは前者に於ける組織なれども、亦た地方の自治團體に行政を委託するが如きは、後者の制度によれるものなり。此行政の原則によりて、吾邦の行政制度を分ちて、中央官制及び地方自治體とす。前者の制度に屬するものは、内閣及び各省樞密院、會計検査院等にして、後者の制度に屬するものは、府縣市町村なりとす。東京市は帝國の首府の在る地なり。宮城は麴町區の中心にありて、中央行

中央官府

政官府皆其の周圍に設置せらる。即ち内閣外務内務大藏陸軍海軍司法文部の各省及び樞密院、會計検査院皆此の區内にあり。只遞信農商務の二省は京橋區にあり。

内閣

内閣は(第三十三圖の甲)國務大臣を以て組織す。内閣總理大臣は各大臣の首班として、機務を奏宣し、旨を承け、行政各部を監督して、其の統一を保持する所にして、國務大臣の會議體の官府なり。宮城内に在り。

行政事務は其の性質によりて區別し、各省大臣に分擔せしむ。之れ各省制度の存する所以なり。

外務省

外務大臣は外國に關する政務の施行、及び外國に於ける帝國商事の保護、外國在留帝國臣民に關する事務を管理し、外交官及び領事官を指揮監督す。外務省(第三十四圖の乙)は麴町區霞關一丁目に在り。

内務省

内務大臣は神社、地方行政議員、撰舉警察、土木衛生、地理、宗教、出版、著作權、賑恤及び救済に關する事務を管理し、臺灣總督、警視總監、北海道長官及び府縣知事を監督す。内務省(第三十四圖の甲)は麴町區大手町一丁目に在り。

大藏省

大藏大臣は政府の財務を監督し、會計出納租稅國債貨幣預金保管物及び銀行に關する事務を管理し、府縣郡市町村及び公共組合の財務を監督す。大藏省は(第三十六圖の甲)麴町區大手町一丁目に在り。

陸軍省

陸軍大臣は陸軍々政を管理し、陸軍々人軍屬を統督し、所轄諸部を監督す。陸軍省(第三十五圖の甲)は麴町區永田町一丁目に在り。

海軍省

海軍大臣は海軍々政を管理し、海軍々人軍屬を統督し、所轄諸部を監督す。海軍省(第三十五圖の乙)は麴町區霞ヶ關二丁目に在り。

司法省

司法大臣は裁判所及び検事局を監督し、檢察事務を指揮し、民事刑事訴訟事件戸籍監獄及び出獄人保護に關する事務、其他諸般の司法行政事務を管理す。司法省(第三十六圖の乙)は麴町區西日比谷町に在り。

文部省

文部大臣は教育學藝に關する事務を管理す。文部省(第三十八圖の甲)は麴町區竹平町に在り。

農商務省

農商務大臣は農商工水産林野礦山發明意匠商標及び地質に關する事務を管理す。農商務省(第三十七圖の甲)は京橋區木挽町十丁目に在り。

逓信省

逓信大臣は官設鐵道郵便小包郵便郵便爲替郵便貯金電信電話及び航路標識を管理し、北海道官設鐵道私設鐵道電氣造船水陸運輸に關する事務及び航路船舶海員を監督す。逓信省(第三十七圖の乙)は京橋區木挽町八丁目に在り。

樞密院

樞密院は天皇親臨して、國家樞要の政務を諮詢する所の最高顧問府なり。宮城内に在り。

會計検査院

會計検査院は帝國の會計を監査し、天皇に直隸し、國務大臣に對し獨立の地位を有するものなり。麴町區大手町二丁目に在り。

自治縣

自治縣は政府が地方團體を法人なりと認め、其自治の事務を法人自ら機關を設けて、行ふことを得る權利を與へたるものにして、其の團體は府縣郡市町村なり。此等の團體は行政法に於て、一の法人たる資格を有すると共に、裁判所の管轄或は軍事行政教育等の爲め一の行政區劃たり。

自治團體は其の自治權を行ふ爲め、一定の機關を備へ、一方には條例を發布し、他方には行政事務を行ふ。是れ恰も國家の政務に立法と行政との區別あるが如し、其の團體に於ける事務の區別に従ひて、自ら機關を同ふせず、

故に通常團體の立法機關及び行政機關なる名稱あり。

立法機關	行政機關	立法機關	行政機關
市 市參事會	市會	町村 町村會	町村長
郡 郡參事會	郡會	府縣 府縣參事會	府縣會

自治制を敷けるもの、顯著なるは市なり。今關東にて市を有する府縣には、神奈川縣に横濱市あり、東京府に東京市あり、群馬縣に高崎・前橋の兩市あり、茨城縣に水戸市あり、栃木縣に宇都宮市あり、市を有せざるは埼玉・千葉の二縣なり。之れを國によりて云へば、武藏國に東京・横濱の二市あり、上野國に高崎・前橋の二市あり、常陸國に水戸市、下野國に宇都宮市あり、市を有せざるは相模・上總・下總・安房の四國なり。左に各府縣に於ける郡市町名及び村數、府縣廳郡役所警察署の所在地を挙げ、府縣郡の人口を示さんとす。

府縣廳郡役所
所在地町名
人口

管轄郡市島	郡市役所	警察署(水上)は水上警察	町名	村數	人口(明治三十四年三月廿日現在)
東京市(武藏)	郡廳所在地	所在地(分)は分署	町		
荏原(全)	品川町	品川町、大井村(水上、分)	品川、大森	一七	一〇〇、三三二
豊多摩(全)	澁橋町	内藤新宿町	中野、澁橋、内藤新宿	一一	六二、二七五

東京府

府 京 東

(目丁二町樂有區町廳・廳府)

北豐島(全)	板橋町	板橋町、南千住町	板橋、岩淵、巢鴨	一六	九三、二四六
南足立(全)	千住町	千住		九	四三、一六〇
南葛飾(全)	小松川村	小松川村	新宿、龜戸、大島	一九	七七、〇七四
西多摩(全)	青梅町	青梅町、五日市町(分)	青梅、五日市	一九	七二、〇七二
南多摩(全)	八王子町	八王子町、原町田村(分)	八王子、日野	一四	九三、三三七
北多摩(全)	府中町	府中町、田無町(分)	調布、府中、田無	三二	九〇、三五二
小笠原島	小笠原島				四、五一九
大島(伊豆)	大島新島村				五、七九二
八丈島(全)	八丈島大賀郷				二四、六二五
計				二〇	一三七、二一〇、一〇二

(東京府の内、伊豆七島及び小笠原島は郡村の制度を異にするを以て其數を掲載せず)

東京市

東 市

(所役市)

赤坂	表町三丁目	表町三丁目			四七、九一一
麻布	市兵衛町二丁目	永坂町			五四、五三八
芝橋	愛宕下町三丁目	愛宕町三丁目、高輪車町(分)			一二八、六六五
京橋	築地一丁目	築地一丁目、川口町(分)、明石町(水上)			一三八、七九三
日本橋	蛸沼町二丁目	久松町、坂本町(分)			一三七、四二四
神田	錦町二丁目	錦町二丁目、佐久間町二丁目(分)			一二六、二八二
麹町	麹町一丁目	麹町一丁目			八一、九六六

京市

四谷	荒木町	左門町	四三、四二七
牛込	粟荷町	神樂河岸	五四、三二九
小石川	金富町	表町	五六、〇三七
本郷	龍岡町	元富士町	八四、二二〇
下谷	御徒町四丁目	上野西黒門町	一一、一九五
淺草	馬道町一丁目	象潟町、猿屋町(分)	一三九、九五五
本所	相生町四丁目	相生町三丁目、中ノ郷八軒町	一三三、二五一
深川	靈岸町	平野町	一〇二、一二七
計區、一五			一、四四〇、一二一

神奈川縣

神奈川
(町本市濱横・臨縣)

管轄郡、市	郡、市役所所在地	管轄郡、市	郡、市役所所在地	町名	村數	人口
横濱市	日本町	横濱市	伊勢佐木町、戸部町、山下町、壽町、山手町、青木町、西波止場(水上)	町	五	二六一、三七一
久良岐(武藏)	日下村	日下村	日下村(分)	川崎、程ヶ谷	一八	八〇、七六八
橋本(全)	横濱市神奈川町	川崎町(分)、高津村(分)		川崎、程ヶ谷	一八	二〇、〇五八
都築(全)	都田村	都田村		横須賀、浦賀、三崎	一二	三七、九四八
三浦(相模)	横須賀町	横須賀町(分)、浦賀町(分)、三崎町(分)		横須賀、浦賀、三崎	一二	一一三、一七三
鎌倉(全)	戸塚町	戸塚町、鎌倉町(分)		藤澤、鎌倉、戸塚	一六	四九、七二四
高座(全)	藤澤大坂町	藤澤大坂町、溝村(分)		藤澤大坂	二二	九三、七九三
中(全)	大磯町	大磯町、伊勢原町(分)		藤澤、平塚、大山、秦野	二二	九七、九〇〇
足柄上(全)	松田村	松田村		大磯、平塚、大山、秦野	一八	四三、六五五

埼玉縣

埼玉
(町和浦郡立足北・臨縣)

管轄郡、市	郡、市役所所在地	管轄郡、市	郡、市役所所在地	町名	村數	人口
足柄下(全)	小田原町	小田原町		小田原、箱根	三〇	六四、七三七
愛甲(全)	厚木町	厚木町		厚木	一〇	三五、七八一
津久井(全)	中野村	中野村		小原	二一	二七、九一一
計市、一一					二〇三	九二六、八八四
北足立(武藏)	浦和町	浦和町、鳩ヶ谷(分)、大宮(分)、浦和町(分)、加賀(分)、大宮(分)		浦和、蕨、川口、草加、鳩ヶ谷、志木、原市、奥野、大宮、上尾、浦和、大宮、和野、川越、所澤、鴻巣、入間川	六二	二二二、六五〇
入間(全)	川越町	川越町、坂戸町(分)、越生岡町(分)		坂戸、越生、飯能	五二	二〇〇、七五七
比企(全)	松山町	松山町、小川町(分)		松山、小川	二六	八八、一九七
秩父(全)	大宮町	大宮町、小鹿野町(分)、野上村(分)		大宮、小鹿野	三一	八五、二五四
児玉(全)	本庄町	本庄町、児玉町(分)、賀美町(分)		本庄、児玉	一七	六六、五三〇
大里(全)	熊谷町	熊谷町、栗沼村(分)、深谷町(分)、寄居町(分)		熊谷、深谷、寄居	三九	一三四、二四七
北埼玉(全)	忍町	忍町、羽生町(分)、加須町、吉浦町(分)、粕壁町(分)		忍、羽生、加須、騎西	五一	一四一、五四〇
南埼玉(全)	岩槻町	岩槻町、越ヶ谷町		岩槻、粕壁、吉浦、久喜、越ヶ谷、大澤	三六	一三八、一四一
北葛飾(全)	杉戸町	吉川村(分)、幸手町、杉戸町(分)、寶珠花村(分)		栗橋、幸手、杉戸	二八	九五、二八一
計郡、九					四二	三四二、一七五、六九七

群馬縣		群馬縣	
馬群		馬群	
(町輪曲市橋前・縣縣)		(町輪曲市橋前・縣縣)	
管轄	郡市役所所在地	管轄	郡市役所所在地
前橋市(上野)	曲輪町	前橋市(上野)	曲輪町
高崎市(全)	宮元町	高崎市(全)	宮元町
勢多(全)	前橋市勢多町	勢多(全)	前橋市勢多町
群馬(全)	連雀町	群馬(全)	連雀町
多野(全)	高崎町	多野(全)	高崎町
北甘樂(全)	藤岡町	北甘樂(全)	藤岡町
碓氷(全)	富岡町	碓氷(全)	富岡町
吾妻(全)	安中町	吾妻(全)	安中町
利根(全)	中之條町	利根(全)	中之條町
山田(全)	沼田町	山田(全)	沼田町
新田(全)	桐生町	新田(全)	桐生町
邑樂(全)	太田町	邑樂(全)	太田町
佐波(全)	館林町	佐波(全)	館林町
伊勢崎町	伊勢崎町	伊勢崎町	伊勢崎町
玉村町	玉村町	玉村町	玉村町
計市郡	二一	計市郡	二一
管轄	郡市役所所在地	管轄	郡市役所所在地
千葉(下總)	千葉町	千葉(下總)	千葉町
市原(上總)	八幡町	市原(上總)	八幡町
東葛飾(下總)	松戸町	東葛飾(下總)	松戸町
計市郡	二一	計市郡	二一
管轄	郡市役所所在地	管轄	郡市役所所在地
印幡(全)	佐倉町	印幡(全)	佐倉町
長生(上總)	茂原町	長生(上總)	茂原町
山武(全)	東金町	山武(全)	東金町
香取(下總)	佐原町	香取(下總)	佐原町
海上(全)	銚子町	海上(全)	銚子町
匝瑳(上總)	福岡町	匝瑳(上總)	福岡町
君津(全)	木更津町	君津(全)	木更津町
夷隅(全)	大多喜町	夷隅(全)	大多喜町
安房(安房)	北條町	安房(安房)	北條町
計市郡	二二	計市郡	二二
管轄	郡市役所所在地	管轄	郡市役所所在地
水戸市(管陸)	水戸市	水戸市(管陸)	水戸市
東茨城(全)	水戸市	東茨城(全)	水戸市
西茨城(全)	笠間町	西茨城(全)	笠間町
那珂(全)	菅谷村	那珂(全)	菅谷村
久慈(全)	太田町	久慈(全)	太田町
多賀(全)	松原町	多賀(全)	松原町
鹿島(全)	鉾田町	鹿島(全)	鉾田町
行方(全)	麻生町	行方(全)	麻生町
計市郡	二二	計市郡	二二
管轄	郡市役所所在地	管轄	郡市役所所在地
千葉(下總)	千葉町	千葉(下總)	千葉町
市原(上總)	八幡町	市原(上總)	八幡町
東葛飾(下總)	松戸町	東葛飾(下總)	松戸町
計市郡	二一	計市郡	二一
管轄	郡市役所所在地	管轄	郡市役所所在地
伊勢(全)	伊勢町	伊勢(全)	伊勢町
美濃(全)	美濃町	美濃(全)	美濃町
不破(全)	不破町	不破(全)	不破町
多摩(全)	多摩町	多摩(全)	多摩町
北濃(全)	北濃町	北濃(全)	北濃町
濃尾(全)	濃尾町	濃尾(全)	濃尾町
計市郡	二一	計市郡	二一

茨城縣		千葉縣	
茨城縣		千葉縣	
(市上市戸水・縣縣)		(町葉千・縣縣)	
管轄	郡市役所所在地	管轄	郡市役所所在地
水戸市(管陸)	水戸市	水戸市(管陸)	水戸市
東茨城(全)	水戸市	東茨城(全)	水戸市
西茨城(全)	笠間町	西茨城(全)	笠間町
那珂(全)	菅谷村	那珂(全)	菅谷村
久慈(全)	太田町	久慈(全)	太田町
多賀(全)	松原町	多賀(全)	松原町
鹿島(全)	鉾田町	鹿島(全)	鉾田町
行方(全)	麻生町	行方(全)	麻生町
計市郡	二二	計市郡	二二
管轄	郡市役所所在地	管轄	郡市役所所在地
水戸市(管陸)	水戸市	水戸市(管陸)	水戸市
東茨城(全)	水戸市	東茨城(全)	水戸市
西茨城(全)	笠間町	西茨城(全)	笠間町
那珂(全)	菅谷村	那珂(全)	菅谷村
久慈(全)	太田町	久慈(全)	太田町
多賀(全)	松原町	多賀(全)	松原町
鹿島(全)	鉾田町	鹿島(全)	鉾田町
行方(全)	麻生町	行方(全)	麻生町
計市郡	二二	計市郡	二二
管轄	郡市役所所在地	管轄	郡市役所所在地
千葉(下總)	千葉町	千葉(下總)	千葉町
市原(上總)	八幡町	市原(上總)	八幡町
東葛飾(下總)	松戸町	東葛飾(下總)	松戸町
計市郡	二一	計市郡	二一
管轄	郡市役所所在地	管轄	郡市役所所在地
伊勢(全)	伊勢町	伊勢(全)	伊勢町
美濃(全)	美濃町	美濃(全)	美濃町
不破(全)	不破町	不破(全)	不破町
多摩(全)	多摩町	多摩(全)	多摩町
北濃(全)	北濃町	北濃(全)	北濃町
濃尾(全)	濃尾町	濃尾(全)	濃尾町
計市郡	二一	計市郡	二一

木 柄		木 柄	
(市 宮 都 宇 認 縣)		(市 宮 都 宇 認 縣)	
管 轄	郡、市役所	管 轄	郡、市役所
市、町	所在地	市、町	所在地
警察署(水上、水上警署)	所在地(警察署(分)、分署)	警察署(水上、水上警署)	所在地(警察署(分)、分署)
町 名	町 名	町 名	町 名
村 数	村 数	村 数	村 数
人 口	人 口	人 口	人 口
計 市、一四		計 市、一八	
新 治(全) 江戸崎町	江戸崎町、龍ヶ崎町、牛久村(分)	足 利(全) 足 利町	足 利町、御厨村(分)
新 治(常陸) 土 浦 町	土 浦 町、石岡町、柿岡町(分)	安 蘇(全) 佐 野 町	佐 野 町、山崎町(分)
筑 波(全) 谷 田 部 町	谷 田 部 町、北條町(分)	那 須(全) 大 田 原 町	大 田 原 町、山崎町(分)
眞 壁(全) 下 館 町	下 妻 町、下 館 町、眞壁町(分)	鹽 谷(全) 矢 板 町	矢 板 町、喜連川町(分)
結 城(下 總) 宗 道 村	水海道町、結城町、岡田村(分)	下 部(全) 木 町	木 町、小山町(分)
猿 島(全) 境 町	古河町、境町、岩井町(分)	上 都 賀(全) 鹿 沼 町	鹿 沼 町、日光町、今市町(分)
北 相 馬(全) 取 手 町	取手町、布川町(分)、守谷町(分)	河 内(全) 宇 都 宮 市	宇 都 宮 市、上三川町
		宮 市(下 野) 中 河 原 町	中 河 原 町、江野町
		河 内(全) 一 條 町	一 條 町、上三川町
		上 都 賀(全) 鹿 沼 町	鹿 沼 町、日光町、今市町(分)
		上 都 賀(全) 眞 岡 町	眞 岡 町、久下田、益子、茂木
		下 部(全) 木 町	木 町、小山町(分)
		鹽 谷(全) 矢 板 町	矢 板 町、喜連川町(分)
		那 須(全) 大 田 原 町	大 田 原 町、山崎町(分)
		安 蘇(全) 佐 野 町	佐 野 町、山崎町(分)
		足 利(全) 足 利町	足 利町、御厨村(分)
計 市、一四	四 五	計 市、一八	三 〇
	三三三		一四五
	一、一四九、五九四		八二九、六三〇

二 司 法

裁判所の構成

明治二十二年紀元節の大佳辰を以て、我帝國の基礎たる憲法發布せらる。此時に於て裁判權の獨立明になれり。翌年二月裁判所構成法なるもの出づ。現行の構成法之れなり。裁判所の下級のものより擧れば、(一)區裁判所、(二)地方裁判所、(三)控訴院、(四)大審院なり。區裁判所は従前治安裁判所と云ひ、地方裁判所は始審裁判所と稱し、控訴院大審院は其の名稱に變化なきも其の權限に差異あり。區裁判所の權限狭少にして其の管轄する事件の輕微なるを以て、單獨裁判官にて裁判し、地方裁判所控訴院大審院は事實の覆審をなし、且つ重大なる事件を審理する事あるのみならず、控訴院大審院の如きに至ては、下級裁判所の終局判決に對する上告をも審判するとあるを以て、裁判官の員數も其の階級の上るに從て増加し、合議制を採用せり。大審院(第廿六圖の丙)は最高の裁判所にして我國に於て只一箇あるのみ。(東京市麹町區西日比谷町)關東は東京控訴院(麹町區西日比谷町)の管轄、地方裁判所は東京横濱千葉水戸宇都宮浦和前

地方裁判所
區裁判所
所在地

橋の七所にして、此七地方裁判所の管下に属する區裁判所は合計三十九あり。
今左に其の所在地を掲げん。

地方裁判所

區裁判所

- 東京 麴町區四日比谷町
 - 横濱 横濱市北仲通五丁目
 - 千葉 千葉郡千葉町
 - 水戸 水戸市
 - 宇都宮 宇都宮市
 - 浦和 武蔵北足立郡浦和町
 - 前橋 前橋市曲輪町
- 東京(芝區四久保巴町)八王子(支部)武蔵南多摩郡八王子町) 父島(伊豆父島) 八丈島(伊豆八丈島) 新島(伊豆新島)
- 横濱(北仲通五丁目) 横須賀(相模三浦郡鴨村深田) 小田原(相模足柄下郡小田原町幸一丁目)
- 千葉(下總國千葉郡千葉町) 松戸(下總東葛飾郡松戸町) 佐倉(下總印旛郡佐倉町) 一宮本郷(上總長生郡一宮町) 八日市(支部)下總匝根郡匝根町) 佐原(下總香取郡佐原町) 木更津(支部)上總君津郡木更津町) 北條(安房郡北條町)
- 水戸(水戸市) 大田(常陸久慈郡大田町) 土浦(支部)常陸新治郡土浦町) 麻生(常陸行方郡麻生町) 龍ヶ崎(常陸稻敷郡龍ヶ崎) 下妻(支部)常陸眞壁郡下妻町)
- 宇都宮(宇都宮市) 真岡(下野芳賀郡真岡町) 大田原(下野那須郡大田原町) 栃木(下野下都賀郡栃木町) 佐野(下野安蘇郡佐野町)
- 浦和(武蔵北足立郡浦和町) 越ヶ谷(武蔵南埼玉郡越ヶ谷町) 幸手(武蔵北葛飾郡幸手町) 川越(武蔵入間郡川越町) 熊谷(支部)武蔵大里郡熊谷町) 大宮(武蔵秩父郡大宮町)
- 前橋(前橋市曲輪町) 沼田(上野利根郡沼田町) 中之條(上野吾妻郡中之條町) 高崎(支部)高崎市宮元町) 富岡(上野北甘楽郡富岡町) 太田(上野新田郡太田町)

次に裁判所別重罪輕罪の罪狀を挙げ、人口に對する比例率を示したれば、各地方に於て如何なる犯罪人多きかを知り、從て其の地方人民の人情風俗を

犯罪の統計表

地方裁判所	兇徒ノ罪	文書私印ノ罪	偽造ノ罪	私印ノ罪	竊盜ノ罪	強盜ノ罪	放火ノ罪	人口十萬ニ付被告
東京	一四	二二	三〇	七	二	四七	三二	七八七
横濱	一	七	一八	六	一	三	一七	九八九
千葉	一	一	八	一	三	二	二	七四
水戸	一	一	九	七	八	二	一〇	六三

類推するに、幾分の參考となるを得んか。

裁判所別重罪被告人罪狀 (三十三年)

少数ナル他ノ罪ヲ省クテ以テ被告
人率ハ精密ノ數ニアラス

裁判所別輕罪被告人罪狀 (三十三年)

地方裁判所	竊盜ノ罪	強盜ノ罪	放火ノ罪	人口十萬ニ付被告
東京	一七	一五	三	二八八
横濱	三	七	一	二四〇
千葉	六	七	一	一七五
水戸	二	二	一	二〇九

少数ナル他ノ罪ヲ省クテ以テ被告
人率ハ精密ノ數ニアラス

三 軍事

兵制

我が帝國の陸海軍は 大元帥陛下の親しく統帥し給ふ所にして、全國皆兵の制なり。されば日本帝國の臣民は男子滿十七歳より四十歳まで、皆悉く兵役に服するの義務を有す。兵役は之れを分ちて常備(現役及豫備)後備及び國民兵役の三種と爲す。現役は陸軍三年、海軍四年、丁年に達したる男子之れに服し、豫備役は陸軍四年四月、海軍三年、現役を終りたるもの之れに服す。後備役は陸海軍共に五年、常備役を経たるもの之れに服す。常備後備以外の男子十七歳より四十歳までのものは皆國民役に服す。

陸軍省
參謀本部

陸軍 陸軍の軍事行政は陸軍省ありて之れを處理し陸軍大臣之れを管理す。

國防用兵作戰等一切の軍務は東京に參謀本部(第卅五團の西)ありて之れを掌る。總長は大中將より一人之を親補し、天皇に直隸して帷幄に參畫し、參謀本部を統轄す。

軍政區劃

陸軍々政上の區劃は全國を十三師管二十三旅管、及び五十二聯隊區に分つ。關東地方に屬する東京府外六縣の地は第一師管區に屬す。其區分左の如し、

師管旅管聯隊區	管 府 縣	旅管聯隊區	管 府 縣
第一師	東京府 神奈川縣 麻布 東京府 神奈川縣 麻布	第一旅	東京府 神奈川縣 麻布
第二師	東京府 神奈川縣 麻布 東京府 神奈川縣 麻布	第二旅	東京府 神奈川縣 麻布
第三師	東京府 神奈川縣 麻布 東京府 神奈川縣 麻布	第三旅	東京府 神奈川縣 麻布
第四師	東京府 神奈川縣 麻布 東京府 神奈川縣 麻布	第四旅	東京府 神奈川縣 麻布
第五師	東京府 神奈川縣 麻布 東京府 神奈川縣 麻布	第五旅	東京府 神奈川縣 麻布
第六師	東京府 神奈川縣 麻布 東京府 神奈川縣 麻布	第六旅	東京府 神奈川縣 麻布
第七師	東京府 神奈川縣 麻布 東京府 神奈川縣 麻布	第七旅	東京府 神奈川縣 麻布
第八師	東京府 神奈川縣 麻布 東京府 神奈川縣 麻布	第八旅	東京府 神奈川縣 麻布
第九師	東京府 神奈川縣 麻布 東京府 神奈川縣 麻布	第九旅	東京府 神奈川縣 麻布
第十師	東京府 神奈川縣 麻布 東京府 神奈川縣 麻布	第十旅	東京府 神奈川縣 麻布
第十一師	東京府 神奈川縣 麻布 東京府 神奈川縣 麻布	第十一旅	東京府 神奈川縣 麻布
第十二師	東京府 神奈川縣 麻布 東京府 神奈川縣 麻布	第十二旅	東京府 神奈川縣 麻布
第十三師	東京府 神奈川縣 麻布 東京府 神奈川縣 麻布	第十三旅	東京府 神奈川縣 麻布

軍隊の配備

麻布(東京)横濱高崎長野佐倉水戸本郷(東京)宇都宮等は即ち聯隊區司令部所在地なり。聯隊區司令官には中少佐一人之れに任し、區内の徴兵事務召集事務等を掌る。

帝國の軍隊は全國に十二箇の師團あり。各地に配備せられて其の地方を衛

成す。別に近衛師團あり。専ら皇室の警備に任ず。今關東地方東京外六縣内の配備を示せば左の如し。

都東督部部		師團司令部所在地	步兵旅團司令部所在地	步兵配備地	騎兵旅團司令部所在地	騎兵以下各兵科配備地
第一師團 (東京)	近衛師團 (東京)	近衛第一旅團 (東京)	近衛第二旅團 (東京)	第一聯隊(東京) 第二聯隊(東京) 第三聯隊(東京) 第四聯隊(東京)	騎兵第一旅團 (習志野)	近衛騎兵第一聯隊(東京) 近衛騎兵第二聯隊(習志野) 近衛騎兵第三聯隊(東京) 近衛騎兵第四聯隊(習志野)
	步兵第一旅團 (東京)	步兵第二旅團 (東京)	步兵第三聯隊(東京) 步兵第四聯隊(東京) 步兵第五聯隊(高崎) 步兵第六聯隊(佐倉)	步兵第一聯隊(東京) 步兵第二聯隊(高崎) 步兵第三聯隊(高崎、長野)	騎兵第二旅團 (習志野)	近衛騎兵第五聯隊(東京) 近衛騎兵第六聯隊(習志野) 近衛騎兵第七聯隊(東京) 近衛騎兵第八聯隊(習志野) 近衛騎兵第九聯隊(東京) 近衛騎兵第十聯隊(習志野) 近衛騎兵第十一聯隊(東京) 近衛騎兵第十二聯隊(習志野) 近衛騎兵第十三聯隊(東京) 近衛騎兵第十四聯隊(習志野) 近衛騎兵第十五聯隊(東京) 近衛騎兵第十六聯隊(習志野) 近衛騎兵第十七聯隊(東京) 近衛騎兵第十八聯隊(習志野) 近衛騎兵第十九聯隊(東京) 近衛騎兵第二十聯隊(習志野) 近衛騎兵第二十一聯隊(東京) 近衛騎兵第二十二聯隊(習志野) 近衛騎兵第二十三聯隊(東京) 近衛騎兵第二十四聯隊(習志野) 近衛騎兵第二十五聯隊(東京) 近衛騎兵第二十六聯隊(習志野) 近衛騎兵第二十七聯隊(東京) 近衛騎兵第二十八聯隊(習志野) 近衛騎兵第二十九聯隊(東京) 近衛騎兵第三十聯隊(習志野)
						近衛工兵大隊(東京) 近衛輜重兵大隊(東京) 近衛砲兵大隊(東京) 近衛輜重兵第一大隊(東京) 近衛輜重兵第二大隊(東京) 近衛輜重兵第三大隊(東京) 近衛輜重兵第四大隊(東京) 近衛輜重兵第五大隊(東京) 近衛輜重兵第六大隊(東京) 近衛輜重兵第七大隊(東京) 近衛輜重兵第八大隊(東京) 近衛輜重兵第九大隊(東京) 近衛輜重兵第十大隊(東京) 近衛輜重兵第十一大隊(東京) 近衛輜重兵第十二大隊(東京) 近衛輜重兵第十三大隊(東京) 近衛輜重兵第十四大隊(東京) 近衛輜重兵第十五大隊(東京) 近衛輜重兵第十六大隊(東京) 近衛輜重兵第十七大隊(東京) 近衛輜重兵第十八大隊(東京) 近衛輜重兵第十九大隊(東京) 近衛輜重兵第二十大隊(東京) 近衛輜重兵第二十一大隊(東京) 近衛輜重兵第二十二大隊(東京) 近衛輜重兵第二十三大隊(東京) 近衛輜重兵第二十四大隊(東京) 近衛輜重兵第二十五大隊(東京) 近衛輜重兵第二十六大隊(東京) 近衛輜重兵第二十七大隊(東京) 近衛輜重兵第二十八大隊(東京) 近衛輜重兵第二十九大隊(東京) 近衛輜重兵第三十大隊(東京)

東部都督部は東京にあり。第一第二第七第八等の師管を監す。
第一師團内の歩兵隊兵員徴集區の指定地は左の如し。

第一師團	旅團	隊	號	衛戍地	聯隊區名	旅團	隊	號	衛戍地	聯隊區名
第一旅團	第一聯隊	東京	高崎	麻布、横濱	第二旅團	第二聯隊	東京	佐倉	本郷、宇都宮	
	第十五聯隊	高崎	高崎、長野			第三聯隊	東京	佐倉、水戸		

又第一師管内の壯丁は他の第二第七第八師管内の壯丁と共に北海道なる第七師團の諸隊に徴集せらるゝものあり。
關東の俗由來武を尚ひ強悍を以て名あり。遠き寧樂朝の昔には人をして鳥が鳴くあつま男は出向ひ願みもせず勇みたる云々と謳はしめ、中比源平時代には阪東武士を以て稱せられぬ。近き江戸時代の盛世には江戸に男伊達町奴を出し、地方に長脇差遊び人を出しぬ。是れ皆何れも關東男兒の儁勇義俠の表顯なり。されば斯くの如き剛壯勇俠なる血統を有する人士より組織せらるゝ第一師團は共に亦他の師團に勝れて武勇の名高く、軍隊として光榮ある歴

第一師團及近衛師團の歴史

史に富む。殊に明治廿七八年日清の役に於ては、勇武當年に比類なしと稱せられたる獨眼龍猛將軍山地元治の指揮の下に、第二軍に編せられて、廿七年十月廿六日華園口に上陸し、十一月五日を以て金州城を攻めて之れを抜く。第一聯隊主として衝に當り、第二聯隊之を援く。又此の時有名なる金州城の留守と爲し、第一聯隊第二聯隊第三聯隊は更に長谷川混成旅團と共に進んで旅順口に向ひ、全月廿二日遂に全く之れを陥る。第二聯隊は海岸砲臺饒頭山砲臺を取り、第三聯隊は椅子山砲臺を取りたり。此の占領は實に日清戦争の大勢を決定せしものにして、主として第一師團の功なり。此の後又鳳凰山攻撃蓋平城陷落等に於て第一聯隊第十五聯隊猛烈の功高し。

近衛師團は御親兵に濫觴し、本と全國各地方の壯丁中より撰抜して之れを編成したる者なりしが、今は第一師管區より之を徵集する事となりたり。亦軍隊として名譽ある歴史を有す。即ち明治十年西南の役に於ては勇敢無雙を以て稱せられ、田原植木の激戦共に與りて効あり。赤帽の名稱克く賊の膽を

寒からしめたりといふ。其の後明治廿八年には北白川宮能久親王の下に臺灣に渡航し、瘴烟蠻雨の裡に土匪を討して之れを殄滅せり。蓋し日清大役の後にして、且つ敵とする所土匪にあるを以て、自ら人目を引くもの少なかりしと雖も、然れども其の戦役の苦辛と平定の偉功とは、遼東轉戦の諸軍に比して決して甲乙すべきにあらず。殊に此の役に於て師團長宮殿下が勵悻の極陣中に於て薨去するに至り玉ひし一事は、最も痛惜すべき御事にして、又其の偉勳と御不幸とは正に日本國民が永く傳へ奉るべきなり。その記念像は竹橋内近衛兵營の門前にあり。(第六十八圖の乙)

軍事警察

軍事警察は別に憲兵の設あり、之れを掌る。憲兵司令部は東京麴町區大手町にあり。少將一人司令官として全國の憲兵を統轄す。東京には又憲兵第一大隊を置かる、全しく大手町に在り。

軍事教育

陸軍の教育は東京に教育總監部あり。大中將一人總監に任し、陸軍全般の教育の齊一進歩を規畫し、又陸軍士官學校以下の諸學校を監督す。今陸軍諸學校の東京及び關東地方に在るものを擧ぐれば左の如し。

陸軍大學校(第四十六圖の乙) 東京青山北町一丁目にあり。參謀官たるべき技能を授くる所にして、獨り參謀本部の管轄たり。

陸軍士官學校(第四十七圖の甲) 東京市ヶ谷本村町にあり。陸軍將校の養成所なり。

陸軍中央幼年學校 陸軍士官學校に入る階梯なり。東京市ヶ谷本村町にあり。

東京陸軍地方幼年學校 全所にあり。

砲工學校 牛込區若松町にあり。

戸山學校 牛込區下戸塚町にあり。

騎兵實施學校 東京府下荏原郡目黒村

野戰砲兵射擊學校 千葉縣印幡郡千代田村

要塞砲兵射擊學校 神奈川縣三浦郡浦賀町

軍醫學校 軍醫養成所にして東京麴町區

獸醫學校 東京府下目黒村にあり。

兵器製造保管

陸軍兵器の製造及保管には東京小石川に東京砲兵工廠及び東京陸軍兵器本廠同東京支廠あり。横須賀に横須賀支廠あり。

海軍省及海軍司令部

海軍 海軍の軍政は海軍省ありて之を掌り、海軍大臣之を管理す。

海軍々事上の計畫は、陸軍に參謀本部あるが如く、亦海軍に軍令部あり。之を東京に置き、大中將一人部長に任し、天皇に直隸して帷幄の機務に參し、出師作戰及海岸防禦等一切の軍務を統理す。

海軍區劃

海軍々事上の區劃は、帝國の海岸及び海面を分ちて五海軍區となし、各區に軍港を置き、鎮守府ありて其の軍區を管す。鎮守府司令長官は將官を以て之に充つ。第一海軍區の區域は陸中下閉伊郡界より紀伊南牟婁東牟婁郡界に至るの海岸海面及小笠原島の海岸海面にして、即ち關東地方の瀕する海岸海面は此の第一區中に屬す。軍港は相模横須賀にあり、横須賀鎮守府之を管す。鎮守府内には港務部豫備艦部及び海兵團造船廠等あり。

横須賀鎮守府

横須賀の地は三浦半島の東北海岸に位し、前に灣を擁し後に丘陵を負ひ、遙かに上總の富津と相對して共に東京灣の入口を扼す。實に帝國主要の軍港

たり。抑も横須賀が今日の如く本邦第一の大軍港たるに至らしめたる基礎は、實に慶應元年二月、時の勘定奉行小栗上野介が目附栗本瀬兵衛と謀り、百年の大計を打算して幾多の異議を排し、海軍技師佛國人ウエルニ一の設計に基きて、造船所を此地に經營したるにあり。幕府其の末路に迫り、府庫窮乏を告ぐるの時に際して、目前の便利を卻けて國家の爲に此の不朽の事業を起したる兩氏の功は、蓋し没すべからず。栗本氏は即ち後年の鋤雲翁なり。其の後造船所成を告ぐるの時、會、明治維新に遭遇して遂に現政府海軍の手に歸したり。現政府は即ち改めて之れを軍港と爲して鎮守府を置き、造船廠は其の後益々擴張せられて船渠を増加し、帝國の軍艦を製造修理するの用に供せらる。帝國第一の軍港なり。

横須賀鎮守府所管の軍艦及水雷艇

- | | | | |
|----------|-----------|-----------|----------|
| 朝日(二等戰艦) | 初瀬(全) | 磐手(一等巡洋艦) | 淺間(全) |
| 鎮遠(二等戰艦) | 橋立(二等巡洋艦) | 高砂(二等巡洋艦) | 豐橋(水雷母艦) |
| 扶桑(二等戰艦) | 浪速(一等巡洋艦) | 和泉(二等巡洋艦) | 平遠(一等砲艦) |

今横須賀鎮守府所管の軍艦及び水雷艇の名稱を擧ぐれば左の如し。

- | | | | |
|-----------|----------|-----------|----------|
| 高雄(三等海防艦) | 八重山(通報艦) | 武藏(三等海防艦) | 天城(二等砲艦) |
| 龍田(通報艦) | 愛宕(二等砲艦) | 操江(全) | 鎮東(全) |
| 鎮北(全) | 雷(編送艦) | 電(全) | 曙(全) |
| 漣(全) | 龍(全) | | (以上軍艦) |
| 第五號 | 第六號 | 第十四號 | 第十五號 |
| 第十八號 | 第二十號 | 第二十九號 | 第三十號 |
- (以上水雷艇)

(明治三十四年十二月末日調)

以上乗組總人員

將官	上長官	士官	候補生	准士官	下士	卒	合計
二	七八	一八九	七六	一一六〇	一〇三四	四、三〇三	五、七九八

以上諸軍艦の中第一流に位する朝日・初瀬・磐手・淺間等の諸艦は、何れも日清戦役の後、軍備擴張の結果として新に造られたるものにして、進水後時を關する事尚ほ多からず。日清役に際して實に戦争に列りて赫々の偉功を建てた

るものは、寧ろ第二流の橋立豊橋扶桑浪速以下の諸艦にあり。就中浪速は明治廿七年七月廿五日吉野秋津洲の二艦と共に、豊嶋沖に於て清國軍艦に向て最初の砲火を擧げて戦捷を獲、日清開戦の端緒を啓きたるものにして、國民の最も記憶すべきものなり。軍艦操江は即ち此の時の捕獲船なり。橋立扶桑の諸艦は全年九月黄海の大戦に北洋艦隊勢力の大半を殺き、翌年二月威海衛の攻撃には敵艦を降すに與りて功あり。豊橋は其當時より恒に水雷母艦として戦列に加はり、就中威海衛敵艦攻撃の際に當り能く幾多の水雷艇をして、安じて其任務を盡し、定遠來遠威遠等の諸艦を撃沈するに至らしめたるは蓋亦母艦の偉勳と稱すべし。鎮遠平遠鎮東鎮北等は何れも此役に於て獲たる名譽の紀念品なり。

軍事教育

海軍の諸學校にして東京及び關東の地方にあるものは左の如し。
 海軍大學校(第四十六圖の中) 東京築地にあり。
 海軍々醫學校 全所に在り軍醫の養成所なり。
 海軍主計官練習所 全所に在り主計官の養成所なり。

海軍造兵廠

海軍機關學校 横須賀にあり。
 海軍機關術傳習所 全所
 海軍砲術傳習所 相模三浦郡長浦村
 海軍水雷傳習所 全所
 海軍の造兵には東京芝赤羽町に東京海軍造兵廠あり。火薬の製造には東京府北豊島郡瀧野川村に海軍下瀬火薬製造所あり。下瀬雅允の發明にかゝる無烟火薬を製造す。

四 教育

我邦の教育は、明治維新已來舊慣を一洗して、新たに制度を布き、上下協力して大に之れが奨励發達に力めしより、頗る長足の進歩あり。今や上は大學より、下は小學に至るまで、施設悉く備り制度大に整ひ、自ら文化燦然たるの盛況あり。殊に關東は本邦首都の地とて、大學以下各種の専門學校多く此地方に存在し、恰も帝國學術の淵藪たるの觀あり。

初等教育

初等教育 各市町村皆な高等小學校及び尋常小學校の設備あり。或は都市にありては特に幼稚園の設備あるもの少からず。兒童は滿六歳より八ヶ年間を以て學齡と稱し、其の父兄保護者は必ず學齡兒童に尋常小學校四ヶ年の科程を卒へざるの間は、學に就かしむべきの義務を負担す。今關東各府縣、學齡就學不就學の状態を百分比例を以て表はせば左の如し。

兒童就學比例

學齡兒童就學始期既達者百中

東京	神奈川	埼玉	千葉	茨城	群馬	栃木	平均	就學者		不就學者	
								男	女	男	女
八〇一七	八三九二	八九五九	七九三三	九三九九	九三三四	八七三五	八六四四	七二四九	七三〇三	一六八三	二八五二
七二四九	七三〇三	六二三四	五七九五	七六〇三	七五一九	六六一二	六九〇三	一七〇九	一〇四二	二六九七	二八五二
八二一七	八三九二	八九五九	七九三三	九三九九	九三三四	八七三五	八六四四	七二四九	七三〇三	一六八三	二八五二
七二四九	七三〇三	六二三四	五七九五	七六〇三	七五一九	六六一二	六九〇三	一七〇九	一〇四二	二六九七	二八五二
八二一七	八三九二	八九五九	七九三三	九三九九	九三三四	八七三五	八六四四	七二四九	七三〇三	一六八三	二八五二
七二四九	七三〇三	六二三四	五七九五	七六〇三	七五一九	六六一二	六九〇三	一七〇九	一〇四二	二六九七	二八五二

以上は明治三十三年度(最近)の統計にして、之れを全國の他の地方の就學比例に對照すれば左の如し。

中等教育の状況

是れに因て之れを見れば、關東地方の屬する東京府外六縣の初等教育播布の程度は、北海道及び沖繩を除きては日本全國中最劣等の地位にあり。就中東京府及び千葉縣の最も振はざる所のは、蓋し東京府に在りては都會なる丈けに又生活の程度低き下層の貧民多く、兒童に就學を許さざるの事情あり。又た千葉縣に在りては房總海岸の漁民に細民多く、往々教育の要を解せざるものあるに由るが如し。神奈川縣の之れに次て不振なるは亦た東京府の不振と全一の事情あるべし。要するに帝國首府周圍の地にして此くの如き状態を見る事寧ろ嘆ずべきなり。

中等教育 中等教育は近年愈々隆盛に赴きて、各府縣に續々として中學校の増設あり。中等程度の實業教育も亦た近來大に奨励せられて、各地に學校の設備さるゝもの少なからず。今各府縣に於ける現在の師範學校、中學校

關東	中區	關東除ク	西區	四國區	九州區	北區	北海道	沖繩	就學者百中	
									男	女
八六四	八八三	九三九	九〇八	九四三	九〇一	七〇九	六八四	六八四	六八四	
六九〇	七〇四	七三〇	七〇七	八〇六	六二七	五九三	三四八	三四八	三四八	

高等女學校及び各種の學業學校の數及び其の所在地を擧げは左の如し。(第四十八圖の甲)

各府縣中等程度公私諸學校所在地

地名	師範學校	女子師範學校	中學校	高等女學校	各實業學校	實業補習學校
東京	東京市 赤坂青山北町	東京市 小石川竹早町	本所區 日比谷町 本所區 飯田町 府下區 多摩郡 川麻郡 外三 私立 二〇町	神田區 錦竹早町 小石川區 竹早町 麻布區 居坂町 東區 島居坂町	(職)東京市 本所區 林町	公立 私立 二二
神奈川	鎌倉郡 鎌倉町	—	足柄下郡 小田原町 愛甲郡 南毛利村	横浜市	(商)横浜市 (農)中郡 金目村	—
埼玉	北足立郡 浦和町	全	南栗橋郡 栗橋町 入間郡 川越町 大里郡 熊谷町 北足立郡 熊谷町 北足立郡 熊谷町 南栗橋郡 栗橋町 私立 一町	北足立郡 浦和町	(農)大里郡 (農)熊谷郡 (農)秩父郡 大宮町	—
千葉	千葉郡 千葉町	—	千葉郡 千葉町 東葛飾郡 葛飾町 東松戸郡 松戸町 香取郡 香取町 海上郡 香取町 子原町 分枝 町	千葉郡 千葉町	(農)長生郡 茂原町	公立 二

各府縣中學校生徒の總數は左の如し。

東京府	公立	三三六	私立	一〇五	神奈川縣	公立	三七
埼玉縣	公立	二六〇	私立	三八	千葉縣	公立	二九
						私立	二五

茨城縣 公立 一六五
群馬縣 公立 一四六
栃木縣 公立 六四
私立 三〇

高等教育

東京帝國大學

高等・教育 東京帝國大學(第四十二圖)は東京本郷に在り。帝國最高の學府にして、國家の須要に應ずる學術技藝を教授し、及び其の蘊奥を攻究するの所たり。其の起原は徳川幕府の蕃書調所に濫觴し、初め南校と稱し、又開成學校と改め、明治十年東京醫學學校を合せて東京大學と名づく。明治十九年三月帝國大學會の公布ありて初めて帝國大學を設置し、東京大學及び工部大學校の事業を繼續す。三十年京都に復大學を設けらるゝに及びて、帝國大學を改めて東京帝國大學と爲し以て今日に及ぶ。其の卒業生を出すもの實に五千餘人、社會の各方面に偉大なる裨益を與へたる事素より言を待たず。現在の組織は大學院及び分科大學を以て構成せられ、大學總長之れを統ぶ、分科大學には法・醫・工・文・理・農の六科あり。農科大學の外は一構内にありて正に一大學區を形成す。本郷の一區は殆んど大學の本郷區たるが如きの觀あり。尙ほ大學の附屬研究所としては、醫科大學に附屬病院あり。同構内に在り。昔く一

般の患者を收容治療して醫學社會の範たり。文科大學には史料編纂掛あり、修史館以來の事業を繼續せるものにして日本の史料を編纂印行するを目的とす。理科大學附屬としては麻布飯倉町に東京天文臺あり、専ら天象觀測及び編曆の事を司る。植物園は小石川白山御殿町に在り、四万八千餘坪の面積を有して内外の植物を栽培し、一般公衆の入場を許す。相模三崎町に在る臨海實驗所、亦理科大學の附屬所管なり。

農科大學は元と東京農林學校の後を承けたるものにして、獨り荏原郡駒場野にありて別に一區劃を爲す。千葉縣下に清澄山林三百三十六町、(安房天津町)奥山山林千八百三十六町、(上總君津郡龜山村)及び北海道石狩空知川上流に二万三千餘町の附屬演習林を有す。

第一高等學校も(第四十二圖の乙)亦た東京本郷駒込にあり。舊大學豫備門の後を承けたる大學豫科にして、中學校を卒へて大學に入らんと欲するものゝ爲めに設けらるゝ所なり。全國の各地に於ひて他に七個の高等學校ありといへども、最も盛大にして且つ最も完備したるものは、實に第一高等學校に在りと

文部省管轄諸學校

す。

此他、商業貿易の實務に就くの準備を爲さんとするもの、爲には、東京神田錦町に高等商業學校あり。(第四十三圖の甲)工業に就かんとする者の爲には、東京淺草藏前に東京工業學校あり。(第四十三圖の甲)又中等教員の養成所としては、小石川區大塚窪町に東京高等師範學校あり。(第四十二圖の甲)本郷湯島に女子高等師範學校あり。東京美術學校と東京音樂學校(第四十四圖)とは共に上野公園内に設けられて、美術音樂の研究所たり。又東京外國語學校は神田錦町に設置せられ千葉醫學專門學校は下總千葉にあり。以上第一高等學校以下の諸學校は何れも文部省の直轄に屬する官立專門學校なり。

東京盲啞學校も亦た文部省直轄の官立學校にして、小石川指ヶ谷町にあり。不具の不幸兒を教育する所たり。

逓信省の管轄に屬するものには、東京市靈岸島に商船學校、東京芝公園内に東京郵便電信學校あり。交通機關に従事するものを養成す。

宮内省の管下には東京四ッ谷尾張町に學習院、麴町區永田町に華族女學校

あり、主として華族の子弟教養に任す。學習院には小學科以上大學科皆備はる。又た私立專門學校の東京の地に設けらるゝものも尠なからず。其の數を擧ぐれば左の如し。

醫學藥學に關するもの 三 政治法律經濟に關するもの 九

文學に關するもの 五 理學に關するもの 二

中に就て私立大學の名を稱するものは慶應義塾大學部及び早稻田大學(第四十五圖)の二なり。慶應義塾は東京芝區三田に在り。慶應年間に福澤諭吉の創立する所にして、時世に率先して文明の學術を授け、幾多の人才を社會に供給して、世を導きたる偉功は國家の永く感謝すべき所なるべし。早稻田大學は明治十五年大隈伯爵等の創めたるものにして、初め東京專門學校と稱し、三十五年大學組織に改めて早稻田大學と稱す。慶應義塾と相並て私立學校の最も成功したるものなり。(其の後東京法學院・明治法律學校和佛法律學校・日本法律學校等も擴張して大學組織に改めたり)

各種學校 東京及び各地に於ける各種の公私立諸學校の數は左の如し。

慶應義塾及び
早稻田大學

各種の學校

圖書館

東京府 私立二九三 神奈川縣 公立一 私立三二一
 埼玉縣 私立六 千葉縣 私立三二
 茨城縣 私立三一 栃木縣 私立六
 群馬縣 私立一五 (明治三十三年調)

圖書館及び博物館 一般衆庶の閲覧に供する圖書館は、東京上野公園内に帝國圖書館あり。我國唯一の官立圖書館にして、最近の調査に依るに、藏書總計四十一万八千五百九十二冊、其の内衆庶の閲覧に供するもの、和漢書十七万八千八百四冊、洋書四万五千七百七十八冊、計二十一万一千六百六十二冊なり。又た一ヶ年の閲覧人員八十三萬三千八百三人、一日平均四百人強に當れりといふ。其他各府縣にあるものは、

東京府 私立一 千葉縣 公立一 私立一 茨城縣 公立一 私立一
 群馬縣 私立二

等なり。

博物館は東京上野公園に東京帝室博物館あり。宮内省の管する所にして帝

東京帝室博物館

圖書出版

國第一の博物館なり。美術部美術工藝部歴史部及び天産部の四部に分ち、學藝技術に資すべき百般の標本を陳列す。附屬動物園亦た上野公園に在り。内外各地の動物を蓄養して衆庶の觀覽を許す。

東京高等師範學校附屬教育博物館は本郷湯島に在り。舊聖堂を利用したるものにして、大成殿以下の建築皆存して舊態を窺ふに足るべし。一般の觀覽を許し教育の標本を陳列す。

圖書出版 鉛槧の術進みて圖書の出版近年に於て頗る増加するを見る。亦た文運の進歩を見るに足るべし。今左に明治二十九年以來五年間の出版圖書部數を掲げて、其の一般を知らしむべし。

著述	翻譯	譯合	著述	翻譯	譯合
明治廿九年 三五五	一一三	二五七六	明治卅二年 三三五	一八〇	二四三五
全三十年 三五八二	一四二	二五五三	全卅三年 一八七〇	一一	二四八二
全卅一年 三〇八五	九	二〇八四			

而して是等の出版圖書の多數は、實に帝國の首府たる東京に於て刊行せら

新聞紙雜誌

るゝものなる事を知るべし。

新聞紙及び雜誌 近來世間一般の讀書力進みて、新聞紙雜誌類の發行も亦た著しく増加せり。就中東京は政治實業學藝百般の中心地たるの故を以て、此の地に於て發兌さるゝもの最も多く、全國發行總數の三分一強に當たる。即ち今東京以下關東各府縣に於て發兌せるもの、數を擧ぐるに左の如し。

(明治三十三年十二月末日)

有保證金 無保證金(學 術技藝統計)	全國總數					
	東京	神奈川	埼玉	千葉	茨城	栃木
廿九年	三〇	一〇	七	三	五	八
三十年	三三	一〇	七	三	五	八
卅一年	三六	一〇	七	三	五	八
卅二年	三九	一〇	七	三	五	八
廿九年	三〇	一〇	七	三	五	八
三十年	三三	一〇	七	三	五	八
卅一年	三六	一〇	七	三	五	八
卅二年	三九	一〇	七	三	五	八

尙ほ參考の爲め三十三年より遡て數年間の全國總數の統計を示せば左の如し。

五 宗 教

關東の宗教の概観

徳川時代に於て唯一の公認宗教たりし佛教は、明治維新の大打撃に由りて、到る所否運に傾きたりと雖も、關東地方殊に衰頽に歸したるが如し。今日に於て關東の平野が、最も宗教に冷淡なる土地として數へらるゝに至りしものも亦之れが爲めなるべし。市町村落尙ほ未だ寺院の設備殘留して、檀家信徒の名目は之れを保つと雖も、多くは單に形式的の關係に過ぎずして、眞の信仰心を持つるものなし。或は各地講中講社なるもの、組織ありて、神社佛閣の參詣に行を壯にするもの多きも、亦事を信仰に托して實に遊覽的旅行を爲すに過ぎず。然れども之れに反して現世の幸福を求むる雜多の俗信、或は笑ふべき諸種の迷信等に至りては、到る所頗る多くして、且つ最も盛に、他の地方に在りては多く其の比を見ずといふ。是れ亦實に此の地方人民に鞏固なる眞正の信仰なきが爲めなるべし。

神社

東國にありて古來最も有名なる大祠は鹿島香取の兩神宮なり。鹿

鹿島香取兩神社

島神社は(第四十九圖の甲)常陸鹿島に在り。香取神社(第四十九圖の乙)は下總香取に在り。共に神武天皇の御宇の創建と稱し、古來皇室の尊敬も頗る重く、多くの社地社領をも有したり。今尙ほ官幣大社として神威儼然たり。

鎌倉以降、武家時代に於て關東人の最も尊崇したるものは、伊豆權現箱根權現及び三島明神鶴岡八幡宮等なり。武人の起請文に諸神に先ちて伊豆箱根兩權現の名を擧ぐる事永く書式となれるに見ても、此兩社が崇信の重きを知るべし。伊豆權現、今は伊豆山神社と稱す。關東總鎮守と稱せられたる所に於て、伊豆國伊豆山に在り。箱根權現は箱根神社と稱し、相模元箱根村に在り。共に今は神威衰へて舊の如くならず。

官幣社

伊豆箱根兩權現

今關東各國に散在せる官幣社を擧ぐれば左の如し、

官幣大社

- 鹿島神社 祭神武甕槌神 常陸國鹿島郡鹿島村鎮座
- 香取神社 祭神經津主神 下總國香取郡香取村鎮座
- 氷川神社 祭神素盞鳴尊大己貴命奇稻田姬命 武藏國北足立郡大宮町鎮座

官幣中社

- 安房神社 祭神天太王命 安房國安房郡富崎村鎮座(第五十一圖の甲)
 - 日枝神社 祭神伊弉册尊國幣立尊仲哀天皇 東京市永田町鎮座(第五十圖の甲)
 - 金鑽神社 祭神天照大神素戔鳴尊 武藏國兒玉郡青柳村鎮座
 - 玉前神社 祭神玉依姬命 上總國長柄郡一宮村鎮座
 - 鎌倉宮 祭神護良親王 相模國鎌倉町鎮座
 - 官幣小社
 - 大國魂神社 祭神大國魂命 武藏國北多摩郡府中町鎮座
 - 別格官幣社
 - 靖國神社 維新以後國事に死せるものを祀る 東京九段坂上(第六十八圖)
 - 小御門神社 祭神藤原師賢 下總國香取郡小御門村鎮座
 - 常磐神社 祭神徳川光圀徳川齊昭 常陸國水戸市鎮座
 - 唐澤山神社 祭神藤原秀郷 下野國安蘇郡唐澤山鎮座
- 以上は關東地方に於ける神社にして最も社格の高きものなれども、然れど

東國に多く祀
らるゝ神社
三三三
伊弉諾伊弉
咩

も人々の信仰の歸する所は、必ずしも社格の高下に關せず、無格の小社と雖も間々信徒を遠近に有して、賽者の恒に絶えざるものもあり。

關東に於て各地に最も多く奉祀せらるゝものは、八坂神社牛頭天王八幡宮天満宮稻荷神社等なり。武家政府倒れて八幡宮の信仰傾き、寺小屋の制廢れて天満宮衰微したりと雖も、尙ほ昔日の餘影を窺ふに足るべし。稻荷に至りては俗間の迷信伴ふの故を以て益々盛なるものあり。昔日にありては王子の稻荷、現今に在ては羽田の穴守稻荷、常陸笠間の紋三郎稻荷の如き最も流行せるものにして、其の賽日には之れが爲めに臨時汽車の發車あるに見ても、以て其の如何に盛なるかを知るべし。

此の他各地方到る所、都市にありては數街の間に、又村落にありては一村一郷毎に必ず鎮守社あり。關東に於ては多く八坂神社八幡宮天満宮等を祀る、之れを氏神又は産土神と稱し、其の地の住民は之れに對して氏子と稱す。毎歲必ず大祭の執行あり。又都會の商家地方の豪家等にありては、概ね邸内に神社を祀り、之れに奉祀し、私に祭禮を行ふもあり、各地多く異なる所なし。

大洞巡拜風

靈社大洞の巡拜は亦徳川時代以來の風習にして、伊勢神宮の參拜を初めとして、或は讃岐の琴平神社に詣るものあり。駿河の富士に登るものあり。關東地方に於て殊に盛なるものは夏季に於ける相摸大山の石尊詣、(阿夫利神社)武藏秩父の三峰參り、武藏多摩の御嶽、下野の二荒山、常陸の筑波山等にありとす。何れも講を組み、伍を爲して行粧頗る盛なり。

各地神社數

關東各府縣神社數 (明治卅二年十二月現在)

地名	官幣社 國幣社	府縣 以上	合計	境外 無社	地名	官幣社 國幣社	府縣 以上	合計	境外 無社
東京	三	六九三	六九五	一九六	茨城	四	一六七	一六一	二七五
神奈川	三	一八三	一八六	一八〇	栃木	四	一四一	一四五	五〇〇
埼玉	二	一五七	一五九	五六一	群馬	一	一六五	一六六	三三三
千葉	四	二八三	二八七	四四五	馬				

神道

神道は王政維新の時所謂廢佛毀釋の行はれし時に於て一時勢力を得しが、其の後漸次勢を減し、現今に於ては神宮教大社教扶桑教大成教以下

の諸派何れも教會を組み講社を作り、信徒を有すと雖も、要するに其の勢微にして振はず。

佛教

●佛教 關東の地概して宗教心薄くして、佛を念し法を聽く事の如きは之れを老夫愚媪閑餘の業と爲して卻け、少壯の輩の如きは殊に之れを省みざるもの通習なるが如しと雖も、然れとも亦地方によりては時に熱誠なる信仰を持するものなきにあらず。房總地方に於ける日蓮宗の信仰の如きは其の一なり。

日蓮宗

×日蓮上人は安房小湊に生れ、建長五年初めて清澄山に於て其の教義を説きたるものなり。されば其の感化今に残りて、其の地方は日蓮宗の寺院頗る多く、就中小湊誕生寺(第五十一圖の乙)は上人降誕の靈地として信徒の參拜常に絶えず。僻境に一名區を成せり。上總に入りては山武郡に所謂七里法華と稱する所あり。七里の間殆んど他宗の寺院を交へずといふ。其の他諸國に於ける日蓮の名刹には武藏荏原郡池上の本門寺、全豐多摩郡堀内の妙法寺、下總東葛飾郡中山の法華經寺、全郡真間の弘法寺、相模鎌倉郡龍ノ口の龍口寺等あり。

淨土宗

池上本門寺は日蓮臨終の地なるに、殊に其の地東都に近きを以て來賽する者最も多く、十月會式の盛觀は他に類を見るべからすといふ。
×淨土宗は徳川時代に於ては將軍家の歸依篤きを以て、其の盛諸宗に冠たりしが、現今の形勢は頗る振はず。關東十八檀林の名刹も衰微に歸したるもの多し。十八檀林は即ち左の諸寺院なり。

- 芝 増上寺(東京) 小石川傳通院(東京) 鎌倉光明寺(相模) 爪連常福寺(常陸)
- 飯沼弘經寺(下總) 新田大光寺(上野) 深川靈巖寺(東京) 瀧山大善寺(武蔵)
- 川越蓮馨寺(武蔵) 岩槻淨國寺(武蔵) 小金東漸寺(下總) 淺草幡隨院(東京)
- 結城弘經寺(下總) 館林善導寺(上野) 鴻巣勝願寺(武蔵) 本所靈山寺(東京)
- 生實大巖寺(下總) 江戸崎大念寺(常陸)

眞宗

×眞宗にありては常陸下野及び下總の北部(利根川以北)が宗祖親鸞上人留錫布教の地にして、殊に眞宗なる一宗の開立は常陸西茨城郡なる稻田の坊に於てせられたる干係もあることとて、從て此れ等の地方に於て眞宗の寺院及び信徒多く、宗祖の遺蹟としては所謂廿四輩の靈區ありて、門徒の巡拜ありと雖も、

概して關西北國地方の如き熱心を見ず。所謂二十四輩とは左の如し。

七重妙安寺 岩井西念寺 古河宗願寺 石下東弘寺 安靜弘徳寺

結城稱名寺 (以上下總)

大穂常福寺 柿岡如來寺 宍戸唯信寺 水戸信願寺 酒門善重寺

息栖無量壽寺 淡 淨光寺 末崎上宮寺 額田阿彌陀寺 桑久枕石寺

佐竹西光寺 金澤覺念寺 逆池青蓮寺 野口壽命寺 (以上常陸)

東京には築地に西本願寺(第五十二圖乙)淺草松清町に東本願寺(第五十二圖丙)あり。

共に京都兩本願寺の輪番所にして東京屈指の大伽藍なり。門徒の歸信、信者の群參京都の本院には及ばずと雖も、亦東都に於ける宗教界の一大勢力たり。

曹洞宗

曹洞宗は徳川時代に於ては一宗の中心を關東に收め、下總市の總寧寺、武藏成田の龍隱寺、下野山田の大中寺を關三ヶ寺と號して、一宗の總僧録たりしが、今は其の制も廢れ、一宗の状態も舊時の盛觀なし。

臨濟宗

臨濟宗にありては鎌倉に建長寺圓覺寺の兩大本山あり。名識の留錫あるより近來學殖ある輩の往々東京より之れに參禪するものありと雖も、要するに

天台・眞言兩宗

一般の上に於て大なる勢力を有すといふべからず。

大師及觀音

天台眞言の兩宗は寺院の數に於ては比較的多數を占むと雖も、維新以後社僧なるものを廢せられ、祈願寺の稱を禁ぜられたるより、勢失墜し檀徒の信仰に於ても甚だ厚きものなく、形勢振はず。然りと雖も天台宗の寺院に於て多く奉ずる所の觀世音菩薩及び眞言宗の開祖たる弘法大師とは、一般佛教の歸信する所にして、觀世音には阪東三十三番、秩父三十四番の札所あり。大師には八十八所の靈區を摸したるものあり。信心の輩は順禮と稱して家を擧げて其れ等の佛寺を巡り、冥福を祈るもの多し。阪東三十三番の札所なるものは左の如し。

- 一番 相模杉本寺
- 二番 全 岩殿寺
- 三番 全 田代堂
- 四番 全 長谷寺(鎌倉)
- 五番 全 勝福寺
- 六番 全 長谷寺(飯山)
- 七番 全 光明寺
- 八番 全 星谷寺
- 九番 武藏慈光寺
- 十番 全 正法寺
- 十一番 全 安樂寺
- 十二番 全 慈恩寺
- 十三番 全 淺草寺
- 十四番 全 弘明寺
- 十五番 全 上野長谷寺
- 十六番 全 水澤寺
- 十七番 全 下野滿願寺
- 十八番 全 中禪寺
- 十九番 全 大谷寺
- 廿番 全 西明寺

- 廿一番 常陸日輪寺
- 廿二番 全 佐竹寺
- 廿三番 全 正福寺
- 廿四番 全 樂法密寺
- 廿五番 全 筑波大御堂
- 廿六番 全 清瀧寺
- 廿七番 下總圓福寺
- 廿八番 全 瀧正院
- 廿九番 全 觀音院
- 卅番 上總高藏寺
- 卅一番 全 南光院
- 卅二番 全 清水寺
- 卅三番 安房那古寺

武藏川崎の大師及び西新井の大師とは大師中に於て最も俗間の信仰を蒙るものなり。殊に川崎の大師(第五十四圖の乙)は之れに詣つる時は能く厄年の災禍を消除し得べしとの迷信より、男女厄年に達するもの必ず一たびは之れに詣づるの風習あり。三月の御影供、一月五月九月の護摩供最も境内の熱鬧を極む。此他武藏高田村雜司谷の鬼子母神、南葛飾郡金町の帝釋天、豊多摩郡新井の薬師等亦之れに歸信するもの多し。賽日には何れも來賽者の雜踏を見る。然れとも東國に於ける諸種の佛閣中に於て、最も信仰の盛なるものは下總成田の不動(第五十三圖の甲)に若くものなし。靈驗の赫灼なるを傳へて來賽のもの境内に堵をなし、護摩料として或は金圓を捧げ或は山林を寄進し、其の勢力遠く奥羽關西に及ぶ。實に海内に於て屈指の靈場たり。

成田不動

寺院數

關東各府縣各宗寺院表 (明治三十三年十二月現在)

地名	天台	眞言	淨土	臨濟	曹洞	黃檗	眞	日蓮	時	合計	住職
東京	二〇六	六四	五三	二〇	三七一	二〇	二六三	四三	一四	二六三	二〇一一
神奈川	一三七	五九	二八	三三	三三	五	一三〇	三七	六	一九六	一三三五
埼玉	一九	一〇七	一五	一五	五七	一〇	三五	六	一五	二七四	一六三
千葉	四六	一三六	一五	七	三五	四	三	一〇〇	八	三三五	一九六
茨城	三六	三七	一五	七	一五	一	一六	四	六	二七	九五
栃木	一四	四九	七	四	一九	二	四	五	四	一〇三	六四
群馬	三三	四〇	七	六	三三	三	一九	三	一五	一三四	八二

融通念佛法相華嚴諸宗寺院無し。

佛教徒の教育には各宗派共に教育區域を分ちて學校の設立あり。何れも其の宗派の僧侶を養成するを目的とす。中學より進んで大學に入る事一般の制度に准ず。今東京に在る各宗學校にして稱して大學といふもの、名稱及び其の所在地を擧ぐれば左の如し、

宗教教育

關東の耶蘇教

佛教大學

東京市芝高輪

眞宗大學

東京府下葉鴨町

曹洞宗大學林

東京市麻布北山下窪町

天台宗大學校

東京上野櫻木町

眞言宗新義派大學林

東京小石川區音羽

淨土宗高等學院

東京小石川表町

日蓮宗大檀林

東京芝二本榎町

此他禪宗に於ては別に専門道場の設あり。

耶蘇教 耶蘇教は關東地方に於て比較的盛なり。是れ一は佛教の勢振はずして鞏固なる先入の宗教心なかりしと、一は東京及び横濱の地が開國後第一着に外國宣教師の入込みて、地歩を占めたる所なるの故を以て、此附近に最も布教の便宜ありし爲めなるべし。されば耶蘇教の根據地は素より東京及び横濱にありと雖も、上野及び下野兩國の地方最も盛なり。之れに反して最も振はざるは常陸地方にあり。蓋舊水戸藩排外主義の尙ほ影響せるものあるが爲めなるべし。今關東各府縣に散在せる教會堂の數を掲ぐれば左の如し、

地名	天主教	ハリストス正教	日本基督教會	組合	日本聖公會	浸禮教會	美以監南美以監教會	日本美以監教會	美音教會	福音教會	福音教會	世其他	合計
東京	八	九	二六	三	一〇	九	八	一	七	一	一六	五	九三〇

神奈川	埼玉	千葉	茨城	栃木	群馬
三	一	二	一	三	二
四	一	三	一	二	六
八	六	六	一	四	三
一	一	一	一	一	八
三	七	四	一	一	三
二	一	一	一	二	一
八	四	三	二	二	三
一	一	一	一	一	一
三	一	一	一	一	一
七	八	三	三	三	三

(明治三十三年十二月現在)

基督教の學校亦た東京市内に設立せらるゝもの多し。就中有名なるものは立教學院(東京築地)青山學院(豊多摩郡澁谷村)明治學院(芝白金町)等なり。

雜信仰及び迷信

從て關東の地最も雜信仰多くして迷信甚だ強し。加持祈禱より易占卜筮の道皆行はれ、又陰陽曆術を信じ、五性九星方位等に由り、吉凶を斷し禍福を説くの風あり。帝國の首府たる東京の地に於て最も多く如上の惑信を見る事寧ろ嘆ずべき事なり。歳の初めの惠方詣りより年の暮の酉の市まで、皆縁起を

東京に迷信多き事

各地方

祝ひ幸福を祈るの餘に出てざるはなく、水難を避くべしと稱しては帝釋天・水天宮に祈り、盜難を防ぐと稱して不動を拜し、眼病を治すると稱して藥師に賽し、其他大黒を拜すれば富を得といひ、地藏に歸信すれば子を得べしと説くもあり。甚だしきは回向院内一鼠賊の碑石を碎きて袂にすれば運に克つと信じ、淺草寺境内の石燈籠に香花を捧ぐれば病を獲ずと信するものあり。而して信仰の手段としては寒詣願懸け水垢離御百度茶斷鹽斷食等あり。己れの身に苦痛を加へて神佛に其の祈願を強請するものなり。

各地方の状態も概ね東京と大差なし。或は殊に甚だしき者あり。商家は夷子を祭りて富を求め、農家は稻荷を信じて豊饒を希ひ、早魃には雷神に祈りて雨を請ひ、悪疫の流行には天狗に祈信する等の風習あり。天狗を祀るものありては相摸の道了權現最も名高く、其の他下總銚子の川口明神は婦女容貌の醜を治すと稱し、全國東葛飾郡手見奈祠は痘瘡に効驗ありと傳ふるの類は枚舉に暇あらず。

動植物禮拜の

動植物禮拜には各神社の御神木を崇拜するを始として、稻荷社の狐、三峯

天理教

社の狼、庚申の猿、辨才天の蛇の如きも皆靈異として尊敬せらるゝの愚俗尙脱せず、就中男女の情交を割くの靈驗なりとして最も名高きものは武藏板橋の縁切板なり。

此他には近年天理教なるもの、播布頗る盛にして、今日に於ては都鄙到る所多少の信徒のあらざる地なく、迷信の極、家に病者あるも醫を拒みて腐水を飲ましむる類屢々傳へらる。慨嘆すべし。

六 交通

交通

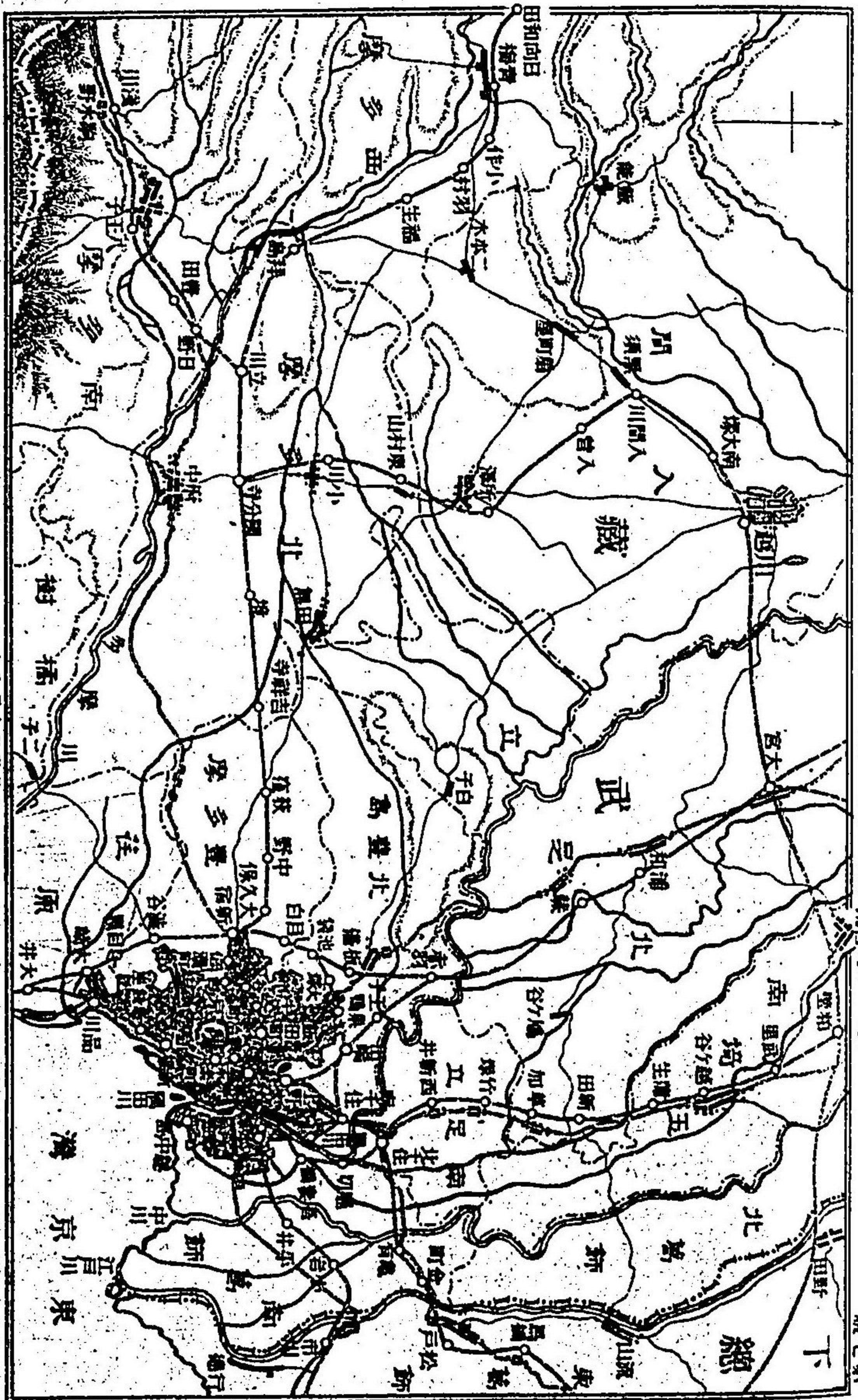
交通機關の發達如何は、大にしては一國、小にしては一地方の文化の程度を卜知するに足るべきなり。蓋し我國今日の文化を來せるもの、畢竟交通機關の長足の發達によらずんばあらざるなり。今、關東の交通機關の現狀を見んが爲め、道路鐵道郵便電信電話航路の條項に分ち、順次詳説せんとす。

道路

道路。東京は江戸と稱せし徳川時代より、中央政府の在る所にして、四通八達の衝に當り、緊要なる道路皆茲に集中せり。東海道は西より箱根の嶮

四大道路

祖を踏えて相模の小田原に至り、海岸に沿ふて國府津大磯平塚を過ぎ、藤澤
 に至り内部に入り、再ひ神奈川より東京灣の海濱に沿ふて、川崎大森を経て
 品川にて東京に接す。中仙道は信濃より碓氷峠を下り上野に入り、安中高崎
 新町を過ぎ、武藏深谷熊谷大宮浦和を経て、板橋に至り巢鴨町により東京に
 入る。奥羽街道は白河より下野宇都宮下總古河武藏粕壁越谷を経て、千住よ
 り東京に来る。濱街道は勿來關より常陸の海岸線に沿ふて、水戸土浦を過ぎ、
 下總取手松戸を経て千住より東京に入れり。此等の四大道路の關東に入るや、
 皆天然物の區劃によりて、四方出入の咽喉を扼し、一大別天地を形成せり。
 今や鐵道の開通せらるゝに至り、此等の線路により遠距離の交通をなすもの
 尠なきに至れりと雖も、地方的交通は皆此の線路によるものとす。
 關東は概して地勢平坦にして、通路を開鑿する甚だ容易なれば、以上の四
 大幹線の外、各地方に通ずる道路甚だ多く、且つ平坦なれば、交通にも甚だ
 便利なりとす。之れ關東の道路の特色なり。然れども山間の地に至れば、自
 然の地勢に従ひ、多く溪谷に沿ふて道路を開けり。



關東近郊鐵路圖

道路は之れを國・縣里の三道に分つ。國道は東京より府縣廳開港場及び府縣廳と師團所在地とを連絡するものを云ひ、縣道は各府縣を連絡し、兵營所在地に適するものを云ひ、里道は各村里間を通する小路を云ふ。道路の幅員は其の階級に従つて廣狹あり。今、東京日本橋より各府縣元標に至る里程を示さん。

鐵道の起原

鐵道

地方元標地名	經由道筋	里程	地方元標地名	經由道筋	里程
神奈川 横濱市本町	神奈川	八	千葉 千葉町市	川	一〇
埼玉 浦和町	中仙道	六	茨城 水戸市土	浦	二九
群馬 前橋市連雀町	熊谷伊勢崎	二八	栃木 宇都宮市	奥羽街道	二七

鐵道 交通機關中、其の利用最も汎きものを汽車とす。大都會は貨物の集散、人民の交通頻繁なるを以て、之れを中心として其の四周の鐵道の敷設甚た多きは、理の正に然るべき所なりとす。關東は帝國の首府なる東京の在る所なれば、之れを基點として八方に鐵道線路の輻射せるを見るなり。

明治維新前、本邦駐在イギリス國公使サー・ハリ・パークスは、其の友人ネ

ルソン・レーと共に、鐵道の便利にして吾國にも此を敷設し、世界の文明に浴せざるべからざるを説き、其の資本を貸與すべきを勸誘したり。明治二年、政府は此勸誘に従ひ鐵道敷設の議を決定し、民部兼大藏卿伊達宗城、大藏大輔大隈八太郎(重)、大藏少輔伊藤俊介(文)をして事務を擔任せしむ。當時明治創業國費多端の時に際したれば、資本を借り入れ、鐵道敷設の大事業を起し、幾多の經營を盡して、終に先づ横濱東京間の鐵道開始の大功業を奏せり。之れ實に我國鐵道の嚆矢にして、英國公使ハリ・パークス、ネルソン・レー及び伊達大隈伊藤諸氏の功勞に謝せずんばあらざるなり。

既に鐵道敷設の議を決せりと雖も、工事着手の準備に關する智識を有する技師なきを以て、ネルソン・レーの周旋によりて、エドモンド・モレルに此のこゝとを委託せり。モレルは明治二年十一月我國に到着して、敷設に關する見込書、及び意見の大要を伊藤大藏大輔に差出し、工藝に關する學校を建て、生徒をして理化の學識を習得せしめなば、外人の手を假らずして諸工事を辨ずべしとの建議をなし、又た、鐵道に關する會計統計、及び其の他の事務に就

京濱間鐵道

て畫策する所多かりき。遂に工部省を設置し、大に土木建築の發達を督勵し、益、其の事業の擴張を計れり。

明治三年三月、東京芝沙留町より横濱野毛町に至る線路の工事を起し、五年五月、横濱品川間十四哩六十二鎖(ト)の工成り、假りに汽車の運轉を開始し、次て全年八月、品川沙留町間の敷設の工を竣へ、爰に京濱間十八哩の竣功を告げ、沙留停車場を新橋停車場と改稱し、九月十二日、聖烈、新橋横濱兩停車場に臨御して開業の式を擧げさせ給ふ。翌十三日より運輸の業を開き、公私一般の用に供す。之れ我國鐵道敷設の嚆矢なれば、須く吾人の記應すべきことならんか。

京濱間鐵道は、東海道鐵道の一部にして、此の區間の工事成るや、續きて中仙道線の經營に従事したりと雖も、之れを中止して再び東海道線の工事に着手し、遂に廿年七月を以て横濱國府津間卅一哩を竣工せり。横須賀線は東海道線大船停車場より分岐し、鎌倉を経て横須賀に至る約十哩餘の線路を云ひ、二十二年七月を以て開通せり。

横須賀線

信越線

信越線は明治十八年十月、高崎横川間十八哩を竣工し、高崎に於て日本鐵道線路に接続して運輸を開きたり。更に其の工事を進め、碓氷峠の嶮を除きて、二十一年十一月直江津に達せり。

碓氷峠アプト式鐵道

碓氷峠は横川より輕井澤に踰ゆる嶮路にして、我邦唯一のアプト式軌道を採用せり。横川輕井澤兩停車場間七哩にして、アプト式施行區は横川停車場を距る半哩の所より始り、碓氷峠の絶頂に達する五哩十鎖十三節なり。廿三年三月起工し、廿六年三月工を竣り、四月一日より開業せり。其の建設費一百九十九万一千六百六十五圓を要し、平均一哩の建設費實に二十八万四千五百二十四圓にして、非常の巨額なりと云ふべし。碓氷峠は名にし負ふ嶮嶺なれば、其の勾配甚だ急なり。横川を去る一哩餘の所より勾配漸く急に、絶頂に至る三哩の間は通して十五分の一にして列車頗る傾斜す。隧道の數も甚だ多く大小二十六あり。頂上に近き一哩餘の間は殆ど隧道のみを通行するの感あり。其の最長なるは第六隧道にして長さ二十七鎖十三節なり。さてアプト式と云へば、レールに齒あり、亦た列車に齒車ありて、レールの齒と車の齒

日本鐵道線

と相噛み進行するもの、如く想像すれども、實際は然らずしてレール及び列車の構造は普通のもの、と差異なく、只汽車の進行緩にして兩停車場間一時間を要し、列車の動搖は却て普通鐵道よりは平穩なり。其の異なる所は勾配の急なる部分には、左右兩レールの中間にラックレールと稱する鐵齒を並へたるレールあり。又た機關車の底の中央に一の齒車ありて、此の車の齒とラックレールと相噛んで、上りには汽車の後戻りを防ぎ、下りには汽車の急下を防ぐ者にて、所謂アプト式とは之れを云ふなり。(第五十六圖の甲)

以上は政府營業に係る鐵道とす。

日本鐵道會社の創立は、明治十四年五月にありて、我國私設鐵道の權輿とす。當時技師其の人に乏しく、器械未だ備らざれば、工事は擧つて工部省に囑託せり。同社の線路は東海道官線の中、品川に分岐し、之れを首端とし高崎前橋に達し、又た、大宮にて分岐し宇都宮福島仙臺青森に達する計畫なり。十五年六月、川口高崎間、及び川口より赤羽王子を経て上野に至る間の工事に着手し、十七年六月竣工し、其の月の二十五日、聖駕、上野高崎兩停

甲武鐵道

車場に臨御して、開業の式を挙げさせ給ふ。その年八月、更に前橋に接せり。之れを第一區線とし、延長六十九哩九鎖にちよべり。十八年三月、品川赤羽間十三哩の線を竣工し、日本鐵道線及び東海道官設線とを連絡せり。全年七月、第二區線即ち大宮より分岐し、奥羽街道に沿ひ宇都宮まで四十九哩を敷設せり。二十年七月、白河を経て第三區線の内、郡山に至る四十哩二十鎖を竣工せり。由て大宮白河間延長九十七哩成り、二十四年九月、青森に達し、上野青森間四百五十六哩七十一鎖を全通するに至れり。

東海道官設線及び日本鐵道線は、關東に於ける敷設の最も早きものにして、且つ官設私設鐵道の最も大なるものなり。

東京麴町區飯田町を起點とし、八王子に達する甲武鐵道は、二十一年六月工事に着手し、翌年四月、新宿立川間を竣工し、次で二十八年十二月、新宿より市内飯田町に延長し、更に神田區萬世橋へ延長せんとして、今や其の工事に着手中なれば、其の工竣るの日は一層交通の便を來すなるべし。甲武鐵道と接続して八王子より中央官設線を起工し、甲府に達し開通せり。

總武鐵道
東武鐵道

其の他、東京本所區錦糸町を起點として千葉銚子等に至る總武鐵道、全區吾妻橋を起點として、千住久喜川俣に達する東武鐵道等あり。猶ほ多くの私設鐵道は、關東平野の都邑を縦横に連結したれば、鐵道交通の便著しきに至れり。

今關東に於ける鐵道會社名、及び延長哩數、併に主要停車場乗客數を掲げん。左の統計表は明治三十三年四月より、全三十四年三月に至る一年間の者なり。

鐵道線路延長主要停車場乗客貨物統計表

社線	區間	距離	主要停車場乗客數	主要停車場貨物數
東海道線 (官設)	新橋、山北	六三、五七	新橋 七二、九〇七 品川 七〇七、六四七	品川 一三、二九八 濱川 一五、四七九
全 (官設)	大船、横須賀	一〇、〇三	横須賀 二七〇、八八一	横須賀 一、三三三
信越線 (官設)	高崎、輕井澤	二四、七七	高崎 三六八、四七九	高崎 一、六八八
日本 (官設)	赤羽、品川	二二、七六	赤羽 二五九、八四三 品川 二五九、八四三	赤羽 一、八九三 新宿 二、一七四
甲武	飯田町、八王子	二六、七七	飯田町 一、四三三、五三九 八王子 一九一、八六三	飯田町 六、七五九 立川 八、九一六

全房	川越	青梅	總武	全全	全全	全全	全全	全全	全全	全全	全全	日本				
大網、東金	千葉、大原	國分寺、川越	立川、日向和田	本所、新生	田端、隅田川	上野、秋葉原	小山、前橋	水戸、勿來	田端、友部	小山、那珂川	宇都宮、日光	大宮、黒磯	上野、前橋			
三、五〇	三、五六二	一、八三六	一、三〇〇	七、三三三	二、五三三	一、二二五	五、〇七五	四、二一七	六、二六〇	四、三二七	二、五〇〇	八、四三九	六、九〇九			
東金	大原	川越	日向和田	本所	隅田川	秋葉原	足利	高萩	土浦	北千住	笠間	日光	宇都宮	小宮山	大宮	上野
三七、八三七	二一、七六三	二、七三三	一、三九六	一、三二五	一、〇二二	一、九一五	二、四二二	四、二一四	一、三〇〇	一、六三三	一、三三三	一、七七一	一、三九七	一、三三三	一、三三三	一、三三三
	大網	銚子	銚子	銚子	桐生	佐野	佐野	松戸	水戸	水戸	水戸	水戸	水戸	水戸	水戸	水戸
	八七、七二七	三、三九三	九、四九五	三、三九三	一、八五二	一、七六八	一、九一五	一、〇六六	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三
東金	大原	川越	日向和田	本所	隅田川	秋葉原	足利	高萩	土浦	北千住	笠間	日光	宇都宮	小宮山	大宮	上野
一、六六三	六、八二八	二、八〇一	三、〇〇〇	七、三三三	一、三三三	二、五三三	一、九一五	二、七三三	一、九一五	一、九一五	一、九一五	一、九一五	一、九一五	一、九一五	一、九一五	一、九一五
	茂原	銚子	銚子	銚子	相模	佐野	佐野	松戸	水戸	水戸	水戸	水戸	水戸	水戸	水戸	水戸
	九、三三五	一、四七六	一、四七六	一、四七六	一、四七六	一、四七六	一、四七六	一、四七六	一、四七六	一、四七六	一、四七六	一、四七六	一、四七六	一、四七六	一、四七六	一、四七六

電氣鐵道

上武	上野	佐野	龍ヶ崎	東武	豆相	水戸	全水	成田
熊谷、寄居	高崎、下仁田	越名、葛生	龍ヶ崎、佐貫	吾妻橋、川俣	三島、大仁	水戸、太田	佐倉、成田	我孫子、佐原
一一、五三	三、〇〇	九、五六	二、六四	三、五二九	一、〇五二	一、二二	七、七八	三、七〇七
	高崎	佐野	龍ヶ崎	北千住	三島	水戸	佐倉	成田
	八三、二二〇	一、〇四、七三	二、二、八八一	二、〇八、〇七六	一、六三、七九六	七、七、二四七	六、七、八九三	三、四、九八〇
	富岡			久喜				
	七、四、八九六			五、四、六五一				
	高崎	越谷	龍ヶ崎	北千住	三島	水戸	佐倉	成田
	一、七、七九五	一、三、八三〇	一、〇、五一	一、二、七三六	一、一、九二九	一、一、八三七	七、〇、八	三、八、五五
	一、〇、九八六			三、七、三六	四、六、七八	七、三、七〇		一、二、五七八

電氣鐵道 電氣鐵道は道路に鐵軌を敷き、電氣の力を籍りて、車輛を運轉するものにして、歐米にても僅々十四五年前より此の方法を採用したり。吾國にては其の發達甚だ遅々たりと雖も、馬車人力車に比すれば輕快の利あれば、各地に敷設せらるゝの傾向あり。其の實施せらるゝものは、東海道鐵

道大森停車場より、六郷又は川崎に通する十三哩の京濱電氣鐵道あり。同國府津停車場より小田原を過ぎ湯本に通する八哩五鎖の小田原電氣鐵道あり。同藤澤停車場より江ノ島鎌倉極樂寺に通する小距離の江ノ島電氣鐵道あり。東京電車鐵道は、もとの馬車鐵道の線路によるものにして、其の延長十二哩二十五鎖なり。(未だ完成せず)

人車鐵道

人車鐵道は、鐵軌の上に人力を以て車輛を運轉するものにして、吾國唯一の豆相人車鐵道あり。相模小田原より伊豆熱海に至る十六哩十二鎖の線路あり。小田原電車鐵道、及び東海道鐵道とに相連接して、京濱の地より熱海に至るに甚た便利なりとす。

郵便及び電信

郵便及び電信 交通の方法は思想の交通、物件の交通に關する二種に大別す。前者は交情互通の振紐にして、智識普通の機關となる通信の方法を云ひ、後者は貨物生産の動力となり、貨物交換の媒介となる運輸の方法を云ふ。郵便電信は其の主要なるものなり。

郵便事

郵便制度の定れる以前に於ては、郵便事業は専ら飛脚に依れり。徳川時代

電信線

に於ては郵便事業は之れを富家に託したり。繼飛脚諸侯飛脚町飛脚の名稱あり。又其の中三度飛脚通早馬飛脚仕立早飛脚登草繼飛脚間飛脚差込幸便催合幸便等の俗稱あるものありて、一々特殊の用務ありて其の制度を異にしたりき。明治四年、東海道新式郵便を始め、日本橋區江戸橋に郵便局を設置す。今日の東京郵便電信局之れなり。此れに由て東京京都大坂の間に通信を開き、貨錢切手を發賣せり。十年六月萬國郵便聯合に加入し、歐米各國との通信に便にせり。爾來多くの變遷進歩を経て、今日に至りては如何なる寒村僻地と雖も、郵便制度の行はれざる所なきに至れり。

電信線は明治二年十二月、横濱東京の間に架設せられたるを以て、我國に於ける電信の創設とす。當時文化の進歩甚だ低く、之れを利用するもの少きのみならず、動もすれば却て此の舉を妨礙し、以て事業の進歩を阻害せんとするものあり。十年西南の役起るに及んで、國事上大に必要な度を進め、其の工程を助けたり。十二年萬國電信聯合條約に加盟し、始めて海外諸國電信局と其の資格を全くするを得たり。是れ洵に本邦電信事業の一大進歩と謂ふ

べし。爾來電信線の數毎年増加し、現今通信上迅速なる第一の利器とす。明治二十年後に至り、都會の地にては電燈線電話線の盛に起るあり、電信線と交錯して宛も蛛網の如き盛觀を呈するに至れり。

今關東を中心として重なる電信線架設の時日を云はんは、明治二年、東京横濱間に架線したるは既に前に述べたる所なり。全四年東京長崎線を架設し、六年二月に至りて竣工す。五年九月、東京青森間の架設に着手し、七年十月竣工す。九年七月、東京新潟線を起工し、十一年九月竣工す。十二年二月、東京より千葉、及び八王子を経て甲府に架線す。二十二年、千葉より木更津に至る線を延長して、安房館山に及ぼせり。爾後各地に架線して電信線を見ざるの地甚だ尠きに至れり。

今各府縣に於ける明治三十四年度の郵便物及び電信の發着數を擧げ、郵便物電信の人口に對する比例率を示さん。

地方	郵便		電信	
	引受合計	配	發信數	着信數
東京	二,〇五,六三三	一三,五七,七〇七	一,〇七一,三三三	一,七九,三五八
神奈川	三,七六,〇八五	三五,一五,四二七	五九,六九九	四二,四三六
埼玉	九,四三,〇三三	一一,九六,〇七四	一〇四,九二二	一九,六三六
千葉	一三,八二,五八三	一五,七七,八五八	一四一,六四三	二九,三六四
茨城	一〇,九九,〇六六	一三,二六,〇一〇	一三三,〇三三	二七,三三三
栃木	八,七八,三四五	一〇,四三,〇三九	一四四,九二九	二八,六〇八
群馬	七,七三,一六九	九,三三,三三六	一三三,六六六	二八,七三三

郵便物電信發着數及人口對する比例率

地方	郵便物	電信
東京	一〇,一七五	一,〇七一,三三三
神奈川	三,四七九	五九,六九九
埼玉	八,一三三	一〇四,九二二
千葉	一〇,九六六	一四一,六四三
茨城	九,五三三	一三三,〇三三
栃木	一〇,四六六	一四四,九二九
群馬	九,五五六	一三三,六六六

電話

電話に至りては更に數層の利便をなし、居ながらにして遠距離の人と談話するを得るものにして、一條の銅線よく數十里の遠きに傳へ、彼我の意志を全通せしむ。交通機關の發達豈驚くべきにあらずや。我國に於て電話線を架設したるは、明治十年十一月東京横濱間を以て嚆矢とす。其の通話自在なるを以て十二月より之れを實用に供し、次に諸官省間に使用し、大に其の利便を

加ふるを得たり。當局者は東京大坂等に電話交換局を創設せんとせしも、費用支辨の道なく之れを遂ぐる能はさりき。爾來専ら之れが試験に力を盡し、益、機械及び線條の改良を謀り、二十一年中東京伊豆熱海間に於て、之れを試み好果を奏し、更に之れを静岡に延長し、翌年之れを大坂に及し試験せしに、愈、支障なきを證するを得たり。二十三年十二月、遂に東京及び横濱市内に於て、官設電話交換を開設せり。現今、關東にては大磯鎌倉宮下葉山湯本浦和川口池上羽田川崎の各地及び高崎前橋宇都宮日光中宮祠間に架設し、東京横濱と連結して通話自由なるに至れり。

三十六年四月一日より從來の郵便の制度を廢し、通信官署官制を公布實施せり。通信官署は通信管理局郵便局電信局電話局鐵道郵便局とし、郵便局は郵便郵便爲替及び郵便貯金事務の外、電信及び電話事務を、電信局は電信事務の外電話事務を兼掌することを得るものなり。左に通信管理局及び一等郵便局の名稱並びにその位置管轄區域を左に表示せん。

名稱	位置	管轄區域
東京通信管理局	武藏東京	東京府埼玉縣千葉縣山梨縣
横濱郵便局	武藏横濱	神奈川縣静岡縣
宇都宮郵便局	下野宇都宮	栃木縣群馬縣茨城縣
航路	航路	航海に使用する船舶には汽船と帆船との二種あり。帆船は從來西洋形帆船合子船及び大和船の三種ありしも、明治二十九年法律を以て此の名稱を發し、百五十石一石は十立方尺の容積を云ふ以上にて帆を用ふるものは悉く帆船と稱するに至れり。我國にて蒸汽船を用ひ始めしは安政年間ありと云ふ。明治維新に至りても其の使用甚た振はず、當時三菱郵船會社ありと雖も甚た微々たる者なりき。明治七年佐賀の亂、次て征台の役ありて、兵士軍糧運送の爲め其の航海の業務擴張せられ、益、隆盛の域に進み、十八年九月、共同運輸會社を合併して、日本郵船會社なるもの、成立を見るに至り、廿七八年の日清戰役に至り、其の業務航路益、擴張せられ、我沿岸は勿論歐米濠洲等に其の航路を擴張せり。是れ我國航海に従事せる會社の最大なる者なり。

日本郵船會社

横濱は關東に於ける唯一の開港場（第五十七圖）にして、日本郵船會社の内外各航路船、及び外國會社の船舶は多く此の港に出入し、各開港場の中最も隆盛を來し、今は殆ど日本全國に冠たるに至れり。（其の外國航路は地方誌横濱市の部に詳なれば茲に省す）

今汽船及び帆船の現在數を擧げん。明治三十四年十二月三十一日現在

汽船帆船の數

官廳及地方	種 船		不 登		合 計	
	登 船	噸 數	噸 數	噸 數	噸 數	噸 數
官 廳	112	1,533	84	1,533	196	3,066
東 京	182	2,913	87	2,913	269	5,826
神 奈 川	93	1,270	25	1,270	118	2,540
埼 玉	1	68	1	68	2	136
千 葉	24	954	3	954	27	2,916
茨 城	3	125	5	125	8	311
計	515	7,803	205	7,803	720	15,606

左に東京及び關東沿岸汽船の寄港地を示さん。

東京灣汽船會社

區 間	寄 港 地	區 間	寄 港 地
東京、館山（一日四回）	東京、横須賀、浦賀、山形、那古	東京、浦賀	横須賀、品川
東京、三崎	東京、浦賀、下浦	東京、勝浦	東京、勝浦、小湊
東京、八幡	東京、千代田、八幡	東京、久慈	東京、久慈、大湊、小湊、氣仙沼、長部
東京、木更津	東京、木更津	東京、下田、島地	東京、下田、島地、新島、三宅、取

内國通運會社	
區 間	寄 港 地
江戸川筋	新市川、深井、流山、下總行、徳下、野新波
下利根川筋	新市川、深井、流山、下總行、徳下、野新波

東京、父島二見浦	西浦筋	北浦筋	石見、納川、荒川、小見川、野原、新宮、石賀、山、銚子、太田、野尻、高田、矢野邊	東京大橋、行徳	大橋、高橋、富川町、釜屋、大島、草川、舟橋、浦安、三軒、角、欠間、真水、淡野、押切、行徳
東京品川、新島浦、波浮、立、二見港	牛堀、麻生、今宿、井上、柏崎、玉造、小川、高濱	根三田、大舟津、水原、瓜木、居合、山田、銚田、志崎、吉川、札山	東京洲崎、新橋、東京吾妻橋、永代橋、東京吾妻橋、千住	新橋、起伊國橋、八丁堀中ノ橋、永代橋、深川不動前、深川八幡前、洲崎、辨天橋、吾妻橋、兩國橋、大橋、永代橋	東京ヨリ直行、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御倉島
豆南諸島	大豆、諸島				

第三章 産業

一 農業

關東地方は、最も生産に適する第四紀層の平原廣大の地積を占め、利根川、荒川、多摩川等の沖積せる膏田沃野、渺茫として相連なり、頗る灌漑に便に、

農業の概況

農事上の設備

氣候亦適順なるを以て、農耕の業(第五十九圖の甲)大に進み、禾穀蔬菜茶桑煙草等の重要農作物、概ね栽培に適し、到る所稻田麥圃の種々たるを見ざるはなし。又本地方は蠶業大に發達し、就中群馬埼玉茨城諸縣の如きは、本邦屈指の養蠶地に於て、年々巨額の繭糸を産出し、大に名聲を博せり。斯く本地方の生産發達を來せる所以のものは、實に我國の主腦部たる東京の大都會を控え、人口稠密、民度一般に高きを以て、農産物の需用も從て多く、運輸金融等の機關最も完備せるが故に、之れが集散販賣に頗る利便の地位を占むることも、亦疑ひを容れざる一原因にして、昨日利根河畔に收穫したる麥は、今日既に東京市場に堆く、客月赤城山麓に蝨々たりし蠶兒は、本月早くも皓白の生糸と變じて横濱埠頭を賑はすを見る。而して是れ等農事上の設備としては、東京府北豊島郡瀧ノ川村大字西ヶ原に、農事試験本場蠶業講習所茶業試験所等の設立せらるゝありて、孰れも農商務省の直轄に屬し、銳意農業殖産の改良進歩を企圖して、當業者を指導し、裨益を與ふること尠なしとせず。爰に關東の農業を記載するに臨み、先づ生産の第一要素たる耕地に就て、其の廣袤

面積と耕地との比較

及び土性の概略を述べんとす。

面積と耕地との比較 (明治三十四年)

地方	面積	田段別	畑段別	耕地と面積との百分率	
				耕地と面積との百分率	耕地と面積との百分率
東京	一五、八〇	一七、八六四	四三、三五	三	三
神奈川	一五、七〇	二五、七二	五、七三	三	七三、六九
埼玉	二五、九	六、九〇	九、七六	四〇	一〇、三四
群馬	四七、三五	二四、六九	七、五一	一五	三三、八三
千葉	三六、二五	一〇、〇九	七、三六	三	三五
茨城	三八、八	八、四六	一〇、三四	三	三五
栃木	四二、七	五、六三	五、三六	一七	三五

右表に徴するに、本地方に於て、耕地が面積に對する百分比例最も多きは、埼玉縣の管轄區域にして、四〇パーセントに相當し、秩父の山岳地方を除けば實に五〇パーセントの上に出で、耕地の發達最も顯著なるを示せり。是れに次げるは千葉縣にして、殊に下總は、一望際なき廣大の平原地なるを以て、其の耕地發達の度は、敢て武藏平原に譲らざれども、上總の南西部より、安房に連亘せる山地ある爲めに、全縣より見たる耕地發達の度は、大に減率を

耕地の發達

田と畑との比較

土壤

來せり。神奈川茨城の兩縣も亦之れに亞て廣き耕地を有す。群馬栃木の二縣は其の南部に平野ありと雖も、礫礫なる火山岩より成る所、亦頗る廣きを以て、鋤犁を容るゝの地最も乏しとす。又東京府下の耕地の、埼玉千葉等の諸縣に比して、其の發達に遜色あるは、全く農業よりも、商工業の旺盛なるが爲めにして、市街宅地等の少なからざる地積を占むるも、亦之れが一原因たり。

爰に田地と畑地との廣袤を比較するに、田の畑よりも著るしく多きは、千葉縣にして、栃木縣は、殆んど兩々相半し、其の他の府縣は、皆田よりも畑多く、殊に群馬縣に於て甚だしきを見る。

土壤 關東地方に於て、廣潤の區域を占むる地層は、前述するが如く、第四紀層にして、最も生産發達せる所なり。而して平原の過半は、概ね其の古層に屬し、所により頗る肥瘠の度を異にすれども、多くは埴土及び埴質壤土より成り、其の表面は、腐植質に富み、火山灰を混有すること夥しく、水分を吸収するときは、粘重の度を強め、空氣の流通を妨げ、又乾燥するとき

は、忽ち輕鬆となりて、風の爲めに飛散し易く、農作上甚だ良好の土壤と稱すべからず。然れども、蔬菜桑茶煙草等の如き採葉を主とする植物は、栽培して比較的好成績あり。若し夫れ米穀果樹等の如きを耕種培養せんと欲せば、多少人工を加へて、土地を變造沃化せしむるを要す。又其の新層に屬するの地は、海濱湖畔及び河川の兩側をなせる沖積地にして、是れ又廣大の地域に亘り、其の土質は、利根河系に屬するの地と、荒川及び多摩川の灌漑地とは、大に異なれりと雖も、多くは壤土砂土及び埴質土壌より成り、地味概ね膏腴、生産上の利益は、古層の比にあらず、最も耕作に適し、禾穀蔬菜藍果樹等一として栽培し能はざるはなしとす。彼の印旛沼霞ヶ浦附近、其の他一般低濕の土地にありては、適當の排水法を施さば、農作物の増收を見ること疑ひなかるべし。特に渡良瀬川流域の地は、足尾より注流する鑛毒の害を蒙れる所尠なからず。又相摸三浦半島及び上總の西南部より、安房一回に連亘して、廣く露出せる第三紀層の地は、概ね凝灰質の土壌より成り、其の理學的性質不良にして、生産力の低き所多し。亦武藏秩父地方及び常陸多賀郡地方

を構成せる所謂秩父古生層の地は、重みに壤質埴土及び礫質壤土より成り。結晶片岩より分解したる土壤は、武藏の西北部に狭少の地積を占め、礫を混ざる埴土を以て成り、孰れも桑柘等の培養に適し、生産上中等の地位にあり。此の他火成岩の構成に係る所は、兩毛の北部及び相摸箱根地方にして、肥沃の所なきにあらざれども、一般に土壤淺くして礫确、生産に適せざる所多し。

之れより各種の農作物に就き、其の栽培收穫等の梗概を記載す。

米 本地方は、沖積土多きを以て、最も水田を耕耘するに適せり。殊に近來各地競ふて良種を撰擇し、耕地を整理し、銳意改良に熱中するに至れるを以て、年々其の收穫を増すと共に、米質漸く良好となるに至れり。其の産額最も多きは千葉縣にして、本邦二三を争ふ米作地たり。故に縣下到る所水田相望み、平年の收穫高は、無慮百三十七萬石一石の價格を平均拾三圓とすれば、千七百八十一萬圓に上るに達せり。之れに次で、百萬石以上の收穫あるを茨城縣とし、稻敷行方猿島郡等の如き利根川灌漑地は、盛んなる米作地たり。

然れども、常總地方の米は、産額の夥しきに拘はらず、其の品質は、概して餘り良好ならず。埼玉縣にも、平年九十萬石の收穫あり。其の熊谷附近に産するものは、武州上米の名を市場に博し、粕壁近傍に産する糯米の如きも、又良品と稱せらる。栃木縣も、平原地方は、灌漑の便ありて、米作盛んなれども、其の品質は、寧ろ劣等に屬せり。其の他群馬神奈川縣等にも、相當の收穫あれども、他地方に輸出する程の多額に達せず、却て接續地方より多少の供給を待つもの、如し。殊に東京の如きは、年々百三四十萬石の米を、遠きは奥羽越後地方、近きは常總地方より輸入を仰ぐにあらざれば、以て府下二百萬の民衆を養ふに足らず。次に米の最近收穫表を擧げ、尙ほ参考として、平年の收穫高をも記載す。

米作付段別及び收穫高 (明治卅四年)

地方	米作付			收穫高		
	段別	米	陸	米	陸	計
東京	一五、〇五七	二、五五六	三、九七〇	三、四四五	三七、四〇五	四三、一八九
神奈川	三〇、九四四	三、一〇一	二、七四七	三、五二七	四四、四三〇	四二、九四五
計						一、五四三

米平年收穫高

地方	米	陸	計
埼玉	五七、七九七	九、四九五	三、八九一
群馬	三五、〇三二	四、〇三六	三、三三三
千葉	八九、九三三	二、一八〇	三、六六四
茨城	七六、四九九	二、九八九	一〇、二一八
栃木	四八、七〇三	六、九四〇	六、六〇〇
東京	三九、八三四	二、五五六	三、九七〇
神奈川	一、三七〇、五五六	三、一〇一	二、七四七
埼玉	八七、七九九	一、〇二一	四、八四〇
群馬	四八、三〇三	四、〇三六	三、三三三
千葉	一、六五三、三六六	一、〇二一	三、六六四
茨城	一、五七六	二、一八〇	三、六六四
栃木	一、三九〇	六、九四〇	六、六〇〇
東京	四三、三三六	三、九七〇	三、九七〇
神奈川	三、三三三	二、七四七	二、七四七
埼玉	一、〇二一	三、六六四	三、六六四
群馬	一、五七六	二、一八〇	三、六六四
千葉	一、三九〇	六、九四〇	六、六〇〇
茨城	一、五七六	二、一八〇	三、六六四
栃木	一、三九〇	六、九四〇	六、六〇〇
東京	四三、三三六	三、九七〇	三、九七〇
神奈川	三、三三三	二、七四七	二、七四七
埼玉	一、〇二一	三、六六四	三、六六四
群馬	一、五七六	二、一八〇	三、六六四
千葉	一、三九〇	六、九四〇	六、六〇〇
茨城	一、五七六	二、一八〇	三、六六四
栃木	一、三九〇	六、九四〇	六、六〇〇

麥 麥は、關東地方に於て、多く耕種せらるる作物にして、其の收穫の夥しき米に譲らず。而して其の最も多きは、埼玉縣にして、平年の收穫百十三萬石(一石の價格を平均五圓とすれば、五百六十五萬圓に上る)に達し、實に我國第一の麥作地たり。殊に鴻巣熊谷古河栗橋幸手等の沖積層或は洪積層の地より産出する所の大麥は、品質佳良、本場大麥の名聲を市場に博し、其の標

準品たり。されば本縣麥作の豊歉は、忽ち全國麥價の高低に關係を及ぼすと尠なからず。次ぎに麥作の盛んなるは、茨城縣にして、北部の山岳地方を除くの外、到る所として、黄穂の秀々たるを見ざるはなく、其の産額亦百萬石以上に達し、我國第二の麥作地たり。關東各地の醬油、味噌醸造家及び麵麩菓子等の製造業者は、主として其の原料を是れ等の地方に取り、又た麥酒醸造の原料となるものも尠なからず。其の他千葉群馬栃木等の諸縣も、亦主要なる麥作地にして、概ね七八十萬石を産出し、神奈川東京の府縣も、四十萬石以上の産額あり。左に麥の最近と平年との收穫高を擧ぐ。

麥作付段別及び收穫高 (明治卅四年)

地方	麥作付段別		收穫高	
	大麥	小麥	大麥	小麥
東京	一八八〇七	二九三三	三三、五七	三三、五七一
神奈川	一九、一九一	四、三三七	三、八五七	四、三三七
埼玉	五、五五九	五、八七	八、八九五	七、五九一
群馬	三、一九七	三、一七〇	四、七〇三	四、〇〇五
計			五七、三三〇	五七、三三〇
一段歩平均				一、四〇〇

麥平年收穫高

地方	千葉	茨城	栃木	東京	神奈川	埼玉	群馬
千葉	四、六三三	二、四七八	一、四二七	五八、三〇七	六五、五六六	三、七三〇	一、四六一三
茨城	四、三九九	八、七一九	三、八〇八	八三、三〇〇	七五、一五三	二、一〇六	三、八四七三
栃木	三、八九五	二、九九三	三、三三三	五七、三二〇	四九、三〇四	三、五七〇	一、八六六七
東京	四、一三二	四、七五七	四、七五七	一、三二〇	一、三二〇	一、三二〇	一、三二〇
神奈川	七、三三四	一、〇〇一	七、三三四	六、四〇八	六、四〇八	六、四〇八	六、四〇八
埼玉							
群馬							
計							
一段歩平均							

食用農産物

大豆 食用農産物の重なるものを豆粟稗黍蕎麥甘藷馬鈴薯等とす。豆類は、北海道、東北地方に次で産額多く、大豆の二十萬石以上を産するは、埼玉千葉茨城の三縣にして、何れも百五十萬圓以上の價格に上れり。之れに次げるは、神奈川群馬にして、其の産額十二三萬石に達せり。殊に茨城縣筑波眞壁兩郡に産する赤大豆及び武州北部地方に産する方言イタチ大豆の如きは、品質佳良にして醬油の醸造に適す。又小豆は、茨城群馬の二縣、本邦産額の主位を占め、何れも五萬石以上を産し、埼玉栃木縣之れに亞

粟 種 蕎麥 甘藷 馬鈴薯

て二萬石以上の産額あり。亦本地方は、粟の收穫の多きこと、九州地方に次ぎ、殊に神奈川縣は、二十萬石以上の産額あり。千葉茨城縣等これに次ぐ。種は、栃木縣に六萬石以上の産額あり。群馬茨城縣之れに次ぐ。黍は、東京府及び千葉縣に一萬石以上を産す。蕎麥は東京地方に於て、需用多きが故に、之れを栽培する所も從て多く、茨城縣の如きは、八萬石を産し、長野縣と并びて本邦の主位にあり。栃木千葉埼玉の諸縣各々三萬石以上を産し、其の品質亦悪しからず。甘藷の産額夥しきことは、實に意外の額に上り、九州地方の次位にあり。就中埼玉千葉兩縣は、其の栽培頗る盛んにして、何れも三千萬貫目内外の收穫あり。茨城神奈川東京等の府縣之れに次ぎ、瘠薄の土地と雖も、よく生育するが故に、其の收益亦非常の巨額に上れり。馬鈴薯は、神奈川埼玉縣に多く、何れも百萬貫目以上の産額あり。之れに次げるを千葉縣とす。其の他蠶豆豌豆等各地多少栽培せざるはなし。左に是れ等食用農産物の收穫高を載す。

食用農産物收穫高 (明治卅四年)

地方	大豆	小豆	粟	種	黍	蕎麥	甘藷	馬鈴薯
東京	六九八	六八〇	五九、九二五	一七、七九	一七、七六	一六、六五五	一〇、三〇五、九三	七三、〇七六
神奈川	一四、〇〇三	一六、〇三〇	二二、五二九	一九、五二二	二、四七三	二六、八七九	二二、〇三六、〇四六	一六三、七七一
埼玉	三、七、〇三九	三、五、五三	五、三、七九	三、三、四三	三、四八六	三、三、〇五三	三、九、八〇、六〇七	一、五、八、六、九
群馬	一三、九、九六	四、七、六三	四、二、七四	四、三、三六	三、〇〇〇	三、〇、一〇四	一、三、八、二、四	五、七、七、六
千葉	三、九、九、九五	一、五、九、九五	一〇、三、一三〇	六、三、七八	二、二、三九	三、三、五、五五	三、三、三、九、三三	七、四、一、九一
茨城	三、九、九、六六	六、三、九七	九、六、六〇一	三、五、八、九三	四、四、八三	八、〇、五、七三	一、四、〇、九、一、〇七八	二、八、九、六
栃木	八、三、六、二五	三、〇、三、九	四、〇、四、五	六、六、三四四	一、三、三四	三、三、五、九九	四、七、四、四六一	三、五、五、五〇

特用農産物

茶

特用農産物

特用農産物の主要なるものを、茶桑實綿大麻葉藍葉煙草

菜種及び楮皮等とす。茶樹は、氣候温暖なる地方に多く栽植せられ、就中茨城縣は、本邦屈指の茶産地にして、眞壁猿島兩郡地方は、茶業に従事するもの多く、同縣下の茶園は、諸所に散在せる見積段別を合せ、二千五百町歩の廣きに亘り、其の製出額は、十五萬貫目價格殆んど二十九萬圓に上り、品質亦良好なり。然れども、同縣下の茶樹は、老朽のもの多きを以て、若し新株

棉 大麻

に植換えをなし、製造法にも改良を施すときは、現時に倍加するの産額を見、品質亦一層良好となること、難きにあらざるべし。埼玉縣も、茨城縣に亞げる茶業地にして、十二三萬貫目の産額あり、入間北足立郡等に其の栽植盛んなり。殊に入間郡の狭山茶は頗る名あり。又千葉縣も茶樹を多く植え、坊間下總茶と稱し、印旛香取東葛飾郡等に産出するもの多し。東京府下にも茶樹を栽培せる所尠なからず、狭山茶と并びて廣く市中に販賣せらる。其の他の諸縣皆多少茶を産せざるはなし。又棉は茨城縣に最も多く、約四十萬貫目を産し、埼玉千葉縣にも、十萬貫目内外の産額あり。大麻は、栃木縣に最も盛んに栽培せられ、其の産額は、四十萬貫目以上價格百二十萬圓に達し、廣島縣と並びて、本邦の首位にあり。特に上都賀郡粟野村及び其の附近の地に産するものは、北海道産の大麻と等しく、最も優等にして、鹿沼栃木の二地を経て、諸國に販賣せられ、古來鹿沼麻栃木麻の名を博せり。栃木縣には遙かに及ばざれども、群馬縣にも、三萬貫餘の大麻を出す。其の産地は、重みに北甘樂郡とす。其の他の諸縣は、大麻の産地として擧ぐるに足るものなし。

藍

煙草

茶種 楮皮

藍の栽培は、埼玉縣及び東京府下の荒川沿岸に盛んにして、埼玉縣の如きは、葉藍の産額七十萬貫目價格凡そ五十萬圓に上り、就中大里郡八基新會兩村は良藍を出すを以て名あり。所澤を市場として、各地に販賣す。又た小笠原島よりは山藍を産すれども、其の額は多からず。本地方は、また煙草の産地として屈指の中であり、其の栽培最も盛んなる茨城栃木兩縣の如きは、葉煙草の産額各七十萬貫目以上、價格二百萬圓以上に上り、神奈川縣の産額も、六十萬貫目に近く、千葉縣にも、二十萬貫目の産額あり。其の他の地方亦多少の産出あらざるはなし。就中良品を出だすの地は、茨城縣久慈郡赤土、神奈川縣中郡秦野にして、其の産額も亦多く、栃木縣那須芳賀壺谷郡地方の達摩葉、群馬縣利根多野群馬郡地方の蓮華葉、千葉縣東葛飾郡の桐ヶ作葉、埼玉縣秩父郡の秩父葉も、亦産額多しとす。是等の葉煙草は、東京專賣局の外、埼玉縣吉井、茨城縣岩井水戸太田、栃木縣茂木烏山大田原、神奈川縣横濱秦野等各地支局の手を経て、製造業者に賣下ぐるものとす。茶種は、茨城縣に四萬石、千葉神奈川埼玉縣に各二萬石内外の收穫あり。又楮皮は茨城縣那珂

久慈郡地方に産するもの多く、埼玉縣秩父地方亦之れを産すること尠からず。次ぎに是れ等特用農産物の收穫高を擧ぐ。(桑は蠶業の部に譲る)

特用農産物收穫高 (明治卅四年)

地方	實棉	大麻	葉藍	葉煙草	菜種	地方	實棉	大麻	葉藍	葉煙草	菜種	茶	
												茶畑	製茶
東京	10,355	8,563	3,003	1,451	千葉	2,433	9,777	4,010	1,912	2,685	1,912	4,552	6,525
神奈川	16,703	—	—	—	茨城	4,814	—	—	—	—	—	—	—
埼玉	14,759	—	—	—	栃木	7,103	—	—	—	—	—	—	—
群馬	9,037	—	—	—	群馬	—	—	—	—	—	—	—	—
東京	4,904	4,033	831	555	千葉	5,253	—	—	—	—	—	—	—
神奈川	66	1,661	363	1,741	茨城	4,787	—	—	—	—	—	—	—
埼玉	9,500	7,600	1,710	837	栃木	9,844	—	—	—	—	—	—	—

茶畑段別及び製茶額 (明治卅四年)

蔬菜果實及び雜農産物

群馬	千葉	茨城	栃木	群馬	千葉	茨城	栃木
—	705	1,399	433	—	705	1,399	433
—	386	1,066	1,551	—	386	1,066	1,551
—	1,033	2,455	586	—	1,033	2,455	586
—	576	1,751	1,751	—	576	1,751	1,751
—	4,758	1,746	1,376	—	4,758	1,746	1,376
—	—	377	65	—	—	377	65
—	8	1,004	150	—	8	1,004	150
—	1,945	2,441	551	—	1,945	2,441	551
—	84,565	154,917	21,107	—	84,565	154,917	21,107
—	149,907	288,584	57,599	—	149,907	288,584	57,599

蔬菜果實及び雜農産物

蔬菜類は、各地到る所に栽培せざるはなしと雖も、殊に都市の近郊に多く栽培せらるゝものなるを以て、東京附近は、最も盛なる蔬菜産地たり。されば其の産額の多き、却て他の農産物を凌ぐものありて、東京全市の需用に供し、尙ほ餘りあるより、横濱横須賀地方へも供給すること尠からず。又果實類も、各地多少の産出あり。是れ等農産物の集散地たる東京神田多町、京橋大根河岸及び南足立郡千住等の青物市場は、頗る盛況を呈し、殊に多町は、魚河岸に亞ぐの般賑を極め、日々の取引高は、實に一萬四五千圓に上り。今是れ等農産物の有名なるものを擧ぐれば、東京府北豊島郡練馬の蘿蔔、南足立郡千住の葱、豊多摩郡目黒の筍、神奈川縣橋樹郡鶴見の西洋蔬菜及び果實、同郡川崎の梨、久良岐郡中村の百合、同郡

落花生

蒟蒻

杉田の梅、足柄下郡園府津の蜜柑、埼玉縣南埼玉郡梅田の午莠、同郡岩槻の葱、同郡及び北埼玉郡地方の逆根慈姑蘿蔔、北埼玉見玉郡地方の百合、群馬縣利根吾妻山田三郡の椎茸、北甘樂郡下仁田の葱、千葉縣匝瑳郡大浦の午莠、東葛飾郡八幡の梨、同縣の各郡に栽培する落花生、茨城縣久慈郡の蒟蒻、椎茸、水戸附近の紅花、那賀郡の防風、栃木縣河内郡の干瓢、上都賀郡日光地方の蕃椒、各郡山岳地方の栗、小笠原島の椰子檳榔樹鳳梨の如き熱帯性の果實等、其の他枚舉に遑あらず。又東京本郷千駄木町及び横濱在の中村には、蒙駱師多く、種々の園樹を栽植して、盛んに市中へ販賣す。以上列舉せるもの、内、特殊のものを撰みて、更に其の梗概を記さんに、千葉縣下の落花生は、頗る侮るべからざる特有産物にして、よく瘠地にも生育し、肥料を要すること尠なきを以て、近年栽培甚だ盛んに、現今全縣下に蔓延せざる所なきに至り、其の一箇年の産額は、八十萬石、價格二十萬圓に上ぼり、多くは東京へ販賣し、又支那香港インド等に輸出することも尠ならず、市井童幼の南京豆と稱するもの之れなり。茨城縣久慈郡より産出する所の蒟蒻は、又有名のもの

紅花

干瓢

百合

蠶業

群馬縣

にして、晒粉の儘、各地方へ出だすこと夥しく、其の産額十八萬貫の上に出で、二十七萬圓の價格に上れり。主として保内郷、太田地方より産出す。又水戸近傍に栽培する所の紅花は、悉く之れを京都へ輸送し、京紅及び加茂川染の原料となす。彼の京都土産として賞揚する所の京紅は、其の原料の供給を、斯かる東販の茨城地方に仰ぐもの尠ならずとは、亦人の意表に出づる所なるべし。又栃木縣河内郡より産する所の干瓢は、同縣の主要産物の一にして、其の栽培、製造の盛んなる、全國に其の比を見ず。其の價格は、三十四萬圓に上れり。埼玉縣北埼玉郡見玉郡等に、盛んに培養する所の百合も、頗る巨額に達し、海外へ輸出することも尠ならず、其の植付段別は、合計百五十町歩に及べり。

蠶業 關東地方は、其の氣候風土頗る蠶業に適し、古來之れに従事するもの多く、最も旺盛を極めたり。就中群馬埼玉の兩縣を以て、之れが巨擘とす。群馬縣山田郡桐生新町及び勢多郡大間々町等のごときは、最も古き沿革を有する蠶業地にして、殊に横濱開港以來、生糸の輸出盛んなるに従ひ、年

其の他の府縣

埼玉縣

々斯業の發達を來し、多年の經驗を積んで、漸く妙境に達し、繭質精良、今や長野・福島縣と相并びて、我國の首位に居り、其の桑園は、見積段別を合するときは、二萬五千町歩の廣きに亘り、繭の産額は、二十二萬石に上り、或は之れを各地に販賣し、或は生糸に製して、機織用となし、また盛んに海外へ輸出す。本縣繭の總價格は、實に八百萬圓に垂んとし、其の他の産業を壓倒せんとするに至れり。されば、收繭時期に向へば、各地の繭商人競ふて入り來り、縣下の驛邑俄かに繁榮を増すが如し。埼玉縣の蠶業も、又近年頗る盛況を呈し、殊に群馬縣及び山梨縣に隣接せる北西部地方の如きは、專業として、或は副業として、農家の採桑養蠶の業を営まざるものなく、縣下の桑園は、二萬町歩に達し、收繭額十九萬石、其の價格五百萬圓に上れり。茨城縣亦之れに次げるの蠶業地にして、年々盛運に向ひ、最早農家の副産物を以て見るべからざるに至れり。神奈川縣も、蠶業亦盛んにして、規模の大なるものなしと雖も、其の繭の産額は、八萬石に達し、優に重要物産の一に居れり。また東京府三多摩郡地方も、盛んなる蠶業地たり。其の他千葉・栃木の二

桑畑段別及び繭産出額 (明治卅四年)

地方	桑園		見積		計別		桑畑		繭産出		出賣額
	段別	積段	計別	桑畑	繭産出	桑畑	繭産出				
東京	三八八八	四〇九四	七九四一	五八七〇	四五四	一五、九五四	七、二七六	二、四六三、三〇			
神奈川	四、〇四三	五、七四三	九、七六六	六〇九一五	一一一	一三、六六六	七、四六三	二、八六七、七三			
埼玉	一五、〇三五	六、五九四	二一、六六九	一四、一五三	四三三	四、五四四	一、九二、三五	五、〇七〇、〇六			
群馬	一六、一四〇	九、三六三	二五、五〇三	一六、一七九	二四八	四、六六三	三、五、六五	七、八七、七八			
千葉	五、七三三	七、〇	一二、七三三	四、三三三	二六九七	八、三三二	五、一八二	一、六三七、二六			
茨城	九、八三四	三、二七五	一三、〇〇九	五、五五二	五、〇九二	一七、一〇三	八、七七六	二、四一八、三〇			
栃木	四、三六五	一、〇五七	五、四二二	三、九七七	三、四四三	三、五五三	四〇、九七三	一、三、四一八、〇六			

牧畜 本地方の平原曠野は、牧畜事業を爲すに頗る適せりと雖も、未だ充分發達の域に進まず。殊に牧牛の如きは、遙に關西地方に劣り、牛の飼養

馬 牧場

數二萬頭以上に達せるは、唯千葉縣あるのみ。東京府の八千五百頭、神奈川縣の四千三百頭、群馬縣の千八百頭遞次に次ぎ、埼玉茨城栃木縣等皆千頭に満たず。之れを中國諸縣の數萬頭を飼養するに比すれば、到底日を同じうして語るべからず。然れども、東京横濱等の都市、牛乳を需用すること夥しきを以て、乳牛の數從て多く、東京府下の如きは、牝牛の過半は乳牛として、市の場末或は接續町村に飼育し、其の數三千四百頭の多きに上り、乳牛の數のみは、全國の第一位に居る。又屠牛の數も、牛肉の需用と共に、比較的多しとす。亦牧馬は、牧牛に比すれば、頗る盛んにして、奥羽及び九州の次ぎに位し、勞働用の馬匹を合算するときは、茨城栃木千葉群馬諸縣の如き、何れも其の飼育數四萬頭内外に上り、軍馬乘馬に適する駿足を出だすことも亦尠からず。本地方牧場の有名なるものは、千葉縣印旛郡三里塚牧場、同安房郡峯岡牧場、茨城縣東茨城郡櫻野牧場、同多賀郡大能牧場、群馬縣吾妻郡吾妻牧場、同勢多郡赤城牧場、同北甘樂郡神津牧場等にして、其の最も大なるものを三里塚牧場とす。此の牧場は、當時宮内省の管轄に屬し、往古徳川

羊 豚

幕府の支配したる有名の牧馬地にして、専ら優良なる牛馬羊を蕃殖し、帝室に要する乘馬及び乳牛を供進し、或は各地に良好の種畜を供給し、設備完整盛大を極め、其の總面積は、三千五百町歩の廣さに亘り、最近飼養する所の畜數は、馬五百頭牛百八十頭羊千二百頭に及べり。又峯岡牧場は、千七百餘町歩の地積を占むる著名の牧地たり。群馬縣は、其の名の示すが如く往古良馬を産し、延喜天曆の治世、貢馬を命ぜられたる事ありしも、中世に移り、大に萎靡を來せしが、近年漸く挽回の機運に向ひ、往年故北白川宮殿下の開き給ひし吾妻郡吾妻牧場の如きは、現今二千餘町歩の面積を有する大牧場となり。其の他勢多郡赤城牧場、北甘樂郡神津牧場の如き有名の牧場續々開かれ、神津牧場の如きは、近年牛酪の製造をも試みるに至れり。亦養豚事業は千葉縣最も盛んにして、匝瑳千葉東葛飾君津等の諸郡に飼養するもの多く、縣下の養豚數は、八千頭以上に達し、醬油粕及び澱粉粕を以て、飼料となすもの多し。其の他東京神奈川茨城の各府縣、四千頭以上の豚を有す。羊は、千葉東京及び栃木縣に多少飼養せらるれども、未だ畜産の大をなすに至らず。

鶏

養鶏事業も、又千葉縣に於て盛況を呈し、最近の飼養数は、八十八萬羽(見積)價格凡そ三十六萬圓に達し、産卵額約三千萬圓其の價格五十五萬圓に上り、殊に東京に接近せる千葉葛飾郡に於て、其の飼養盛んなるを見る。其の他の各地にも、亦多少養鶏事業に従事せざるものなしとす。本地方牧畜の統計は、次ぎに示す所の如し。

牛・馬・豚の飼養數 (明治三十四年)

地方	牛		馬	豚	地方	牛		馬	豚
	乳上	乳内				乳上	乳内		
東京	八五九四	三四六三	六九五九	四七四	千葉	二、七二	二、三三	四、八〇九	八、九八三
神奈川	四、三七八	一、〇八五	八八六一	四九五	茨城	七三三	三〇三	五、六八五	四、〇五〇
埼玉	七〇三	三七	二、六五五	二、六九七	栃木	五八九	三五	五、七七三	一、八二八
群馬	一、七九一	六四	三、〇八五	四四三					

農産製造物

農産製造物 農産製造物として、爰に砂糖麥粉漆澱粉及び農業原料として、人造肥料等を擧げんとす。砂糖の製造は、現今東京府及び神奈川縣に

砂糖

麥粉 漬物

盛んにして、是れ亦非常の巨額に上れり。從來本地方にて使用せる砂糖は皆他地方よりの輸入を待つのみなりしが、菓子製造其の他砂糖の需用多き爲め、其の不足を告ぐることに甚しく、東京府に在ては、近年南葛飾郡砂村に日本精製糖株式會社の設立を見、主として原料をジャバに取り、盛んに精製す。該社に於て、外國原料を以て精製したる額は、各種合計六百六十七萬貫目其の價格三百六十五萬圓の巨額に上れり。又た原料を本邦各地に取りて、製造したる府下の總高は、各種合計四十萬貫目其の價格十五萬圓に達す。神奈川縣の製糖業者は、大抵本邦各地より齎らす所の黒砂糖を精製するものにして、其の精製高は、合計百十萬貫目其の價格四十六萬圓に達せり。亦た麥粉製造は、東京府下に於て盛況を極め、其の重なる製造會社は、深川に二箇所あり。其の他水車に據れる製造所は、郡部に多く、其の製造高は、實に三千萬斤價格百六十萬圓に上れり。唯遺憾なるは、其の製品米利堅粉の如く純白なる能はずして、麵麩類の原料には適すれども、上等菓子の製造用には供すべからざるにあり。製造業者は、銳意之れが改良を圖るべきなり。亦た漬物類

人造肥料

は、東京附近の農家副業として戸々に製造し、市内の營業者に販賣する者尠からず。殊に其の著るしきものは、北豊島郡岩淵の澤庵漬とす。人造肥料は、主として東京府下に於て製造し、其の重なるものを過磷酸とし、動物質肥料も多少製造す。過磷酸は、澁澤榮一氏の設立に係る、南葛飾郡大島村字釜屋堀在の東京人造肥料株式會社に於て、盛んに製造し、或ひは直接之れを販賣し、或は深川に軒を並ぶる肥料問屋の手を経て、各地に輸出す。又た重過磷酸も、該社及び其の他に於て、多少製造すれども、到底輸入品の右に出づること能はず、從て販路頗る狭し。又た骨粉肉粉等の如き動物質肥料も、其の製造所なきにあらずと雖も、是れ亦た外國品の壓倒を受くること甚だしく、製造高販路共に多からず。是等人造肥料の總價格は、八十萬圓の巨額に上れり。因に記す、去る三十五年、本邦とアメリカ間との國際問題に上りたる、彼の南洋の小孤島、南鳥島の砂礫は、多くの磷酸分を含有するを以て、頗る肥料家の注目する所となれりと雖も、未だ採集の企てをなしたる者あるを聞かず。漆は、茨城栃木兩縣に、凡そ三千貫目を産し、其の價格は、茨城縣に

漆 澱粉

て三萬圓、栃木縣にて二萬圓に上れり。又た澱粉製造は、千葉縣に最も盛んにして、其の原料は、甘藷及び馬鈴薯に取り、五十萬貫目以上、價格十二萬圓以上の産額あり。此の澱粉は、食用に供するの外、糊に製し、絹布の機織用に使用す。

二 林業

本邦の地味は概して膏腴にして植物の繁植に適し、且つ氣候亦溫暖且つ濕氣に富めるを以て、到る所に樹木草莽茂りて森林を成せるもの多し。是れを以て古來特に森林國の名あり。近年に及びて開墾の業盛んに行れて森林地大に減少せりと雖も、尙ほ明治三十四年度の統計に由れば、其の森林地たるもの總面積二千二百五十九萬八千四百九十四町歩餘あり。其の原野地たるもの總面積二百六十四萬四千四百三十四町歩餘あり。之を帝國の全面積に比較すれば、即ち殆んど其の十分の七を占有するものといふべし。而して是等の森林原野には御料林國有林及び民有林の三種の別あり。御料林は即ち帝室御料に

林産物用材

して宮内省に御料局ありて之れを管し、國有林は農商務省之れを管す。民有林は又た之れに公有寺社有及び私有の三に分たる。

以上我邦の林野より産出すべき林産物としては、主として木材にして、其の用材たるべき者には松杉扁柏等を最とし、續いて樺樟櫟等あり。是れ等は家屋の建築橋梁の架設船車の製造を始め、其の他百般事物の材料として供せらる。其の一年間の伐採高總價格は、明治三十三年度に於ては三千五百五十一万餘圓に達し、三十四年度に於ては三千八百八十八万餘圓に達せり。次に其の薪炭とせらるべきものは松櫟及び雜木の類にして、日常の燃料に充てらる。其の伐採高總價格は三十三年度に於ては二千七百八十万餘圓あり、三十四年度に於ては二千百三十四万餘圓あり。年々之れに大差なく共に帝國に於ける大なる財源たるを見るべし。又た竹材は東洋に於ける特産として、西洋諸國に産せざる所なるを以て、近年は諸國に輸出するものも多きに至りて其の需要を増加し、亦た全國内年々の伐採總額二百萬圓を下ることなきに及びたり。以上は主要なる林産物なれとも此の他に林野の副産物としては、樹皮樹實、脂

薪炭

竹材

關東地方の森林帶上の位置

液蕈類藥草等あり。是等も亦た需要多きものなれば收益も尠なからず。要するに我が邦に於ては、森林事業は最も重要視すべきものゝ一にして、從て古來最も注意して徳川氏時代の如きは大に整備せるの状態ありしが、維新後濫伐續きて弊漸く多く、一時大に退歩して、今日に於ても尙ほ復舊する能ざるもの甚た多きは嘆すべきなりといふべし。

日本森林帶の分類及び其の名稱は人々に由て之を異にす。從て關東地方の屬すべき位置名稱も各相異れり。即ちマイエル氏は關東の地を以て第二黒松帶及び第三山毛櫸帶の間にある間帶なりと名づけ、林學博士本多靜六氏は暖帶林一名亞熱帶林の最北部にして又た溫帶林の最南部に屬すと爲せり。今本多氏の說に従へば、安房上總下總相模の殆んど全部、及び武藏常陸の大半は即ち暖帶林に屬すべきものにして、武藏常陸の西北部及び兩毛の地は溫帶林に屬すべきものなりとし、而して關東地方の氣候に適すべき森林植物は左の如くなりとせり。

(一) 常綠潤葉樹林 かし しひ

(二) 落葉潤葉樹林 主として人工の結果にて生せるものにして

くぬぎ こなら

海岸は黒松 内地は赤松

(三) 松林 以上の外に於て植林せらるゝものは、

すぎ ひのき さり けやき くす さはら 竹

等是なり。

關東地方の森林

然りと雖も關東地方は人口の最も繁殖せる地として、古來の森林は已に開墾せられて田畑となり、農業作物植付の場と變したるもの多く、又其の然らざるものも概して人工を施して造林せられたるものなれば、天然林の状態を存するもの少し。且つ又た其等の造林は區域も狭く、伐採も頻繁に行はるゝを以て、此の地方に於ては他の地方の如き大森林を見ること能はず。されば建築用の小用材若くは薪炭たるべき雜木の産出はあるも、大木良材の如きは産出頗る乏しく、纔に武藏の秩父地方及び兩毛の地箱根地方等に、杉及び檜の産地あるも、是れ亦た尾張參河若しくは紀伊信濃等のものには到底比較す

兩毛の地

べきにあらざるなり。今次に關東諸地方にける森林の概況を列記すべし。

關東諸國に於て林業の見るべき者あるは兩毛の地を最とすべし。就中下野日光地方に産する神代杉及び足利地方に産する扁柏及び杉は、特に其の名高きものなり。然れども一般の産額に於ては、杉材を最も多しとす。薪炭は那須地方に於て殊に多量に産出し、汽車に由て東京に輸出す、實に東京市内に於て費す燃料は其の過半を此地方よりの供給に待つものなり。上野國に在りては赤城榛名妙義の三山其の地味も植林に適し、多く松杉扁柏等を産す。要するに利根郡殊に扁柏に名あり。舊高崎藩に於ては特に林業に意を用ゐられたるを以て、其の影響今に残りて、此の地方植林の事の甚だ進歩せるを見る。副産物としては椎茸松茸及び生漆等あり。生漆は殊に優等のものを出すといふ。

常陸地方

常陸に於ても亦舊水戸藩最も林制に意を注ぎ、植林を奨励し、濫伐を禁じたるを以て、遺風今に存して、その領内たる國の北部は概して植林の見るに足るもの多し。國內産する所のものは松最も多くして、杉之れに次ぐ。副産

物には久慈郡の椎茸及び松茸、并に南部諸郡の松露等あり。漆樹亦た北方諸郡に多く生漆を出す。

下總

下總は平野沃田多き地なれば、林業は最も振はず。大建築に使用すべき良材の如きは殆ど見るべからず。唯薪炭に供する雑木の産出あるのみ。佐倉地方最も樺の産額多く、之を木炭に製し他地方に輸出せらる、有名なる佐倉炭是なり。副産物としては松露初茸多く、之れを以て春秋の候には東京方面より松露狩茸狩として遠征するものも亦た尠なからず。果實には柿栗多し。

上總安房

上總安房も亦一般の林業は振はずと雖も、尙ほ下總に優るべし。上總に在りては鹿野山鬼涙山共に松杉を出し、又た夷隅郡筒森大多喜城山の官林は杉松の巨木多きを以て名高し。副産物としては安房の枇杷實著しきものなり。

清澄山林

此兩國に於て大に注意すべき者は、兩國國境に跨る農科大學附屬演習林なり。安房の清澄山及び上總の奥山の兩部に分れ、總面積凡二千百七十一町歩あり。農科大學教官及び學生の研究實習に供し、傍ら林業上の模範林として廣く世に合理の林業を實地に知見せしむるの地なり。清澄山は常緑潤葉樹林

にして、主要なる林木は杉及び樺なり。杉は人工造林に係れども、樺は天然林なり。杉樺共に其の最老のものは九十年乃至百年に及ぶ。其の他雑木林を形成せるものありてはあらかしこならを主として、七十餘種の常緑及び落葉潤葉樹混生せり。奥山山林は常緑潤葉樹林及び針葉潤葉混生林にして、就中常緑潤葉樹林其大部分を占む。其の主要なる樹種はあらかしあかがしひさかきさかさ等なり。針潤混生林はもみつかかや及びまつの針葉樹を上木とし、上述の潤葉樹を下木とする中林形の森林なり。

武蔵

武蔵に於ては秩父地方の扁柏及び杉等を最も著しき者と爲す。其の木質良好にして産額も亦た多し。之れに次では西多摩郡の日原山檜原山等より産する杉材其の名高く産額も多し。要するに本國に在りては埼玉縣下に屬する部分に於て一般に林業の進歩せるを見る。是れ蓋本縣に於ては、明治二十五年の頃より特に林業の上に留意するに至り、縣費を以て技師を聘して、調査を囑し意見を徴して、着々其の施設に盡されたるを以てなり。尙ほ將來に於ても益々發達すべきの見込あり。相模にては著しきものは鎌倉附近に於ける

小笠原島

御料林國有林
及民有林の面積

杉及び楡の大造林なり。最も年代を經過せるものにして、恐らくは鎌倉幕府時代の經營になりたる遺物なるべしといふ。箱根山中も亦古來最も良材に富むを以て名あり。就中杉扁柏及び樅等の産出殊に多額なり。

小笠原島は其の地温帯にありと雖も本島及び本州の間を流る、黒潮の暖流を受けて、亞細亞大陸より來る寒風を消滅するを以て、氣候殆ど熱帯と等しく、從て本島に産する植物は皆熱帯的の者なり。何れも多く繁殖し、一の熱帯林を形成す。即ち本島産出の重なる木材を示せば左の如し。

野椰子 林投樹 榕樹類 杉 樺 蒲葵等

是等の結ふべき果實は亦た之れを副産物として數へ得べし。

以上は關東の各地方に於ける森林現在の大概なり。今又更に御料林國有林及び民有林公有社寺有及び私有等の區別に基きて、各府縣内に存在する各森林の箇所及び其の面積等を擧ぐれば即ち左表の如し。

地名	御料林		國有林		公有社寺林	
	箇所	面積	箇所	面積	箇所	面積
東京
...

用材伐採額

地名	御料林	國有林	公有社寺林
東京
埼玉
千葉
茨城

以上御料林は明治三十四年十二月末日現在、國有林は明治三十五年三月末日現在、公有社寺私有は明治三十五年一月一日現在調の數也

各地方に於て年々伐採せらる、木材は、已に畧前段に述べたるが如く、用材として其主なるもの杉松扁柏等にして、樺栗の類之れに次ぎ、薪材としては杉其の重なる者にして、栗杉等之れに次ぐ。今左に明治三十四年度に於ける各林の伐採用材及び薪材の總數并に價格を掲げて参考に資すべし。毎年の伐採格殆ど之れと大差なきものと知るべし。

地名	御料林		國有林		公有社寺私有林	
	尺貫	價格	尺貫	價格	尺貫	價格
東京	三六一	一九〇〇	一九九	五二三	—	—
...

竹類

千葉	埼玉	神奈川	栃林	群馬	茨城
一七八 五九	六 一一	九六、二七四、二四、九八六	一〇、三三五 五八三	一五六 一四二	
一七五 四五〇		七〇三六 三、一九八	二五三 二〇九	一九七 一八五	
六、六四八 四、五八三	四、四六二 三、六五三		二、三二八 三、四〇〇	三九、〇〇五 二、〇三九	一八、五二〇 一、六九六
三、六四〇 七、五〇	三、六六九 三、三三三		三、〇二九 二、四二九	二〇、七九八 一、七六四	九、六三七 一、六九〇
九八八、九八一	七六四、七六〇	五三三、〇五三	一、〇三三、九五五	一、〇六六、〇〇四	一九三、二一〇
一八〇、六五六	一、〇六六、九三〇	一一八、九三六	四三三、四九四	三三九、一九五	八五九、二〇六
四二六、六六三	五〇五、九七一	一七〇、三〇五	五二五、七五九	四八〇、三五六	八四〇、一九四

竹類の産出は、御料林國有山林等に於ては殆んど見るべからずと雖も、公有寺社有私有林野に於て其の産額頗る多し。左に三十四年度に於ける各府縣伐採總額を擧ぐべし。

東京	栃木	茨城	群馬	埼玉	千葉
四〇、六〇三	二九、七六五	一三、二一七			
二、三〇七	三、五七三	三〇、四六			
一八、三三四	一〇、四五六	三、六六三			
四七、六二	五、七四三	五、七八九			
神奈川					
四、四九九					
三、七二二					

御料林管轄
及區域

國有林管轄
及其區域

御料林は宮内省に御料局あり。各要地に支廳又は事務所ありて、之れを監督す。關東各府縣内に散在せる御料林の管轄廳及び其の區域を擧ぐれば左の如し。

東京府 埼玉縣 千葉縣 茨城縣 — 東京事務所
神奈川縣 — 静岡支廳
栃木縣 群馬縣 — 宇都宮事務所

國有山林は各要地に大小林区署ありて、其保管利用處分測量及び境址査定等の事を掌る。關東には東京に東京大林區署あり。その管轄區域左の如し。

東京大林區署 — 東京府 栃木縣 茨城縣 群馬縣 埼玉縣 千葉縣
神奈川縣 静岡縣 山梨縣

而して尙ほ各府縣左の地方に小林區署の設備あり。何れも國有山林の所在地なり。

武藏 浦和 熊谷 秩父
常陸 水戸 太田 高萩 大子 龍ヶ崎 筑波 石岡 笠間 鉾田

下總 千葉

上總 大多喜 久留里

上野 宮岡 高崎 横川 中之條 館林 前橋 沼田 追貝 花輪

下野 栃木 鹿沼 足尾 宇都宮 矢板 藤原 大田原

三 水産

關東沿岸の地形を見るに、伊豆三浦房總の三半嶋遠く海中に突出して、相模灣東京灣をつくり、海岸線甚長く、加之那珂利根隅田多摩馬入等の、諸大川の注流して朝宗するもの多く、水質之れが爲めに中和して、生物の繁殖に適し、港灣の點在するもの多く、水勢之れに依りて靜穩となり、生物の優游に適す。且つ黒潮の暖流は臺灣附近より來り、北緯二十六度邊に於て、本支の二流に分岐し、其の本流は大隅の海峡を衝きて、紀州の南端より御倉八丈兩嶋の間を過ぎ、房總の東海岸を洗ひ、三十五度邊の所より北方に向ふて去る。親潮と稱する寒流の一派は、カムチャツカ海より千嶋群嶋の間を流れ、北

製鹽業

海道の東岸より下總犬吠崎附近に來る。此等潮流の分布は、水族の種類の聚散に至大なる關係を有す。親潮は常陸の海岸を洗ふと雖も、他の海岸は黒潮の流布するを以て、水族の種類は頗る豊富なり。實に關東に於ける諸大河、及び黒潮親潮の分布は、鹹淡水の水族の棲息に適せり。之れを漁獲して生計を營む漁家甚だ多く、特に房總の海岸の如き、有名なる漁場となれるは此理由によるものならんか。今之れを製鹽業漁獲物水産製造物水産養殖遠洋漁業の數項に分ち詳説せんとす。

製鹽業

下總行徳の古積鹽は、其の起原甚だ古く、品質佳良にして聲名甚だ高かりしと雖も、今や漸く衰頽せんとせり。關東の地鹽田少く製鹽の業甚だ隆なりと云ふべからず。鹽田を有する地は東京府下にては、八丈島にして品質良きも其の量多からず。神奈川茨城二縣にても製造し、千葉縣甚だ多く、鹽田二百十九町、産數二百八十九所の多きに及ぶ。今左に鹽田産數産額價額を挙げ、以て製鹽業の盛衰を窺ひ、其の一石の平均價格によりて、品質の良否を見んとす。

製鹽地方別統計

製鹽地方別 (明治三十四年)

地名	製鹽濱、浦	鹽田段別	竈數	產額	價額	平均石價
東京	八丈島沿岸	1	9	645	1547	344
神奈川	横浜市、金澤、大浦、町田村、沙田、大師河原、林流	355	29	9,297	6,777	309
千葉	内海、九十九里浦、銚子浦	265	47	7,830	15,556	212
茨城	高野濱、高千濱、合瀬濱、宮田濱、滑川濱、前濱	1	3	747	19,026	254

生物類

関東は河川潮流の配合により、淡鹹水産物の繁殖に適し、其の種類も甚だ豊富なること、前に述ぶるが如し。水産物は日本の南北により、其の種類を異にするものあり。関東にて亦た特有のものあり。而して関東中にも、河川海水の形勝によりて、其の水族の種類及び繁殖に異同多寡の差を生し、之れを漁獲すべき漁具、水族廣集の場所の配置にも影響するものなるらん。関東にて瀬海の府縣、東京神奈川千葉茨城の四府縣は、鹹水淡水の水族の漁獲ありと雖も、埼玉群馬茨城の三縣は、海に瀬せざるを以て、淡水々

漁船地方別統計

漁船地方別 (明治三十四年)

族の漁獲に限れり。漁具の最大緊要なるは漁船なり。其の多少によりて、其の地方漁業の盛衰如何を見るべきを得んか。今左に漁場及び漁船の數を表出せん。

地名	濱、浦、湖、川	五間以上	五間未滿	三間未滿	年末現在總數
東京	小笠原島、深川浦、品川浦、御林浦、羽田浦、荒川、多摩川、袖ヶ浦、芝浦、築地浦、佃浦、中川、神港	6	395	805	908
神奈川	東京灣、相模灣、西根湖、多摩川、相模川、片瀬川、庄内古川、元荒川、綾瀬川、入間川、権現堂川、新河岸川、烏川、古利根川、利根川、荒川、渡良瀬川、忍川、小針沼、星川、伊佐沼、志手沼、油井沼、別府沼	35	504	855	904
群馬	利根川、烏川、碓氷川、石田川、板倉沼、碓氷川、榛名湖	1	9	55	64
千葉	内海、九十九里浦、夷隅海濱、銚子浦、印旛沼、手賀沼、利根川、江戸川、栗山川、夷隅川、長沼、小貝川、奥太浦、小櫃川	12	566	1,778	2,355
茨城	利根川、細川、鹿島浦、鯉川、北浦、濁沼、霞浦、袖ヶ浦、那珂川、久慈浦、常陸浦、勸行川、櫻川、小貝川、小野川、牛久沼	32	3,973	11,293	15,504
栃木	鬼怒川、田川、中宮湖、那珂川、荒川、五行川、小貝川、赤麻沼、思川、巴波川、永野川、妻川、内川、渡良瀬川	2	175	950	1,126

今左に地方特産物又は其の地特に多量に産出するもの、大畧を擧げん。

各地方特産物

漁場及び漁獲物地方別統計

地方	魚	場			魚	場	魚	場
		数	量	額				
東京	鯉	金杉浦、本芝浦、築地浦、品川浦、御林浦、大森浦、佃浦、羽田浦、多摩川、浅川、荒川、秋川、綾瀬川、中川、伊豆七島、小笠原島、東京灣、相模湖、箱根湖、多摩川、相模川、酒匂川	118,070	30,735	元六四八	八、五七	1,296,008	五六三、六〇九
神奈川	鰻	荒川、綾瀬川、傳石川、鴨川、利根川、権現堂川、江戸川、入間川、高麗川	793,078	26,7806	六二三四九	四六、五二四	1,281,057	四三三、六四
群馬	鮭	利根川、神流川、烏川、鏡川、板倉沼等	946,411	1,003,003	1,296,008	五六三、六〇九	1,296,008	五六三、六〇九
千葉	鰻	内海、房州外海濱、夷隅海濱、九十九里浦、鎌子浦、印旛沼、利根川、江戸川、小糸川、夷隅川等	1,281,066	1,506,533	1,281,057	四三三、六四	1,281,057	四三三、六四
茨城	鮭	鹿島浦、久慈浦、霞ヶ浦、北浦、沼沼、牛久沼、大室、溜井、長井戸沼、那珂川、利根川、犬北川等	1,281,066	1,506,533	1,281,057	四三三、六四	1,281,057	四三三、六四
栃木	鮭	田川、鬼怒川、奈川、五行川、小貝川、珂那川、碓川、荒川、黒川、小倉川等	1,281,066	1,506,533	1,281,057	四三三、六四	1,281,057	四三三、六四

次に地方別漁獲物の種類数量価額を示す。
漁獲物地方別 (明治三十四年)

地方	魚	場			魚	場	魚	場
		数	量	額				
東京	鯉	金杉浦、本芝浦、築地浦、品川浦、御林浦、大森浦、佃浦、羽田浦、多摩川、浅川、荒川、秋川、綾瀬川、中川、伊豆七島、小笠原島、東京灣、相模湖、箱根湖、多摩川、相模川、酒匂川	118,070	30,735	元六四八	八、五七	1,296,008	五六三、六〇九
神奈川	鰻	荒川、綾瀬川、傳石川、鴨川、利根川、権現堂川、江戸川、入間川、高麗川	793,078	26,7806	六二三四九	四六、五二四	1,281,057	四三三、六四
群馬	鮭	利根川、神流川、烏川、鏡川、板倉沼等	946,411	1,003,003	1,296,008	五六三、六〇九	1,296,008	五六三、六〇九
千葉	鰻	内海、房州外海濱、夷隅海濱、九十九里浦、鎌子浦、印旛沼、利根川、江戸川、小糸川、夷隅川等	1,281,066	1,506,533	1,281,057	四三三、六四	1,281,057	四三三、六四
茨城	鮭	鹿島浦、久慈浦、霞ヶ浦、北浦、沼沼、牛久沼、大室、溜井、長井戸沼、那珂川、利根川、犬北川等	1,281,066	1,506,533	1,281,057	四三三、六四	1,281,057	四三三、六四
栃木	鮭	田川、鬼怒川、奈川、五行川、小貝川、珂那川、碓川、荒川、黒川、小倉川等	1,281,066	1,506,533	1,281,057	四三三、六四	1,281,057	四三三、六四

地方	蝦		牡		蟹		蛤		魚	
	數	價	數	價	數	價	數	價	數	價
東京	二七、五四	二五、六三一	五〇、七三三	一六、四九三	四九、四六	一四、四三	一八、八九五	二八、二六		
神奈川	三、八三六	二九、〇五三	三七、五八二	七〇三	四三〇	五	五、九三八	八、七八四		
埼玉	一、一三三	五七					四、四〇六	六、八五三		
群馬	一、五二三	七五〇					三、〇三三	六、〇三六		
千葉	一、八、五三三	元、八八五	一一、四六	五、〇九	一六、二六九	二七、〇〇	四九、五六〇	七、七八四		
茨城	八、二四八	五、三三七			四〇、七四五	二、五五六	三、三〇三	二七、四九八		
栃木							八、八九三	一四、三四五		
東京	一、四三二	一、五二〇	三五六	二二三	二〇七、四八七	四八三、七六六				
神奈川	一五五	一六六	三二二	九三	四〇一、二八四	一、五三九五二九				
埼玉	三、九一七	三、八三七	五、四二二	二、三九八	一〇、六〇九	三、六七三				
群馬	一、四一一	二、〇五〇	五、〇九八	三、七七四	五、五三一	三、二五一一				
千葉	一、七、四五三	一八、五三三				五七三、一九二	三、六六三、八三二			
其他價格										
價格計										

製造物

水産に關する
學校及び試験
場

茨城	一一、〇九九	一一、一六三	四三、三五八	一一、六八〇	二五九、二三一	三、六六三、八三二
栃木	七九五	九六一	四二、四九	一、六五五	九、六八三	八六、七五九

製造物 食料とすへき水産物の肉は、腐敗し易くして保存するに難し。海藻類の如きも運搬の便否、需要の嗜好に依りて之れを製造し、貯藏運搬に便にす。水産物の品質と需要の目的とに依りて、食料以外種々の製造品となすことあり。肥料・薬料・細工用等となす。即ち貝殻は衣服・家具等の裝飾、其の他種々の美術的器具に用ひ、海藻及び魚類は製して肥料とし、殖産上の大効用をなすが如し。製造物中錫干鮑の如きは、海外輸出品の重なる部分を占め、大概支那に輸出し、數百万圓の價額に上ると云ふ。今や東京市に水産講習所、(芝三田四國町) 上總夷隅郡勝浦町及び常陸東茨城郡磯濱町に水産試験所あり。茨城縣鹿嶋郡若松村に村立若松水産學校、全縣多賀郡大津町に町立大津水産學校ありて、水産事業に關する研究教授をなすつゝ、あれは、製造物の巧妙を極むるに至り、海中無盡藏の資源を利用し、益、海外輸出を計り、我國の財源を海中に求むるもの益、大なるを得んか。

水産製造物地方別統計

地方	鱈		鰹		鱈(肥料)		魚		油		其他價格	價格計
	數	價	數	價	數	價	數	價	數	價		
東京	二,〇六	四,一三三	三〇〇	四五〇	—	—	—	—	—	—	—	—
神奈川	八六	一,五二五	二,二〇〇	五,六七〇	二〇,三七九	八八六	—	—	—	—	—	—
千葉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
茨城	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
東京	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
神奈川	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
千葉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
茨城	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

製造品の重なるものは、鰹・イリコ・乾鮑・鯨節・海苔(第六十一圖の乙)・魚油等にして、左に其の數量及び價額を示さんとす。

水産製造物地方別 (明治三十四年)

養殖

地方	干鰯		鰹(肥料)		魚		油		其他價格	價格計
	數	價	數	價	數	價	數	價		
東京	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
神奈川	二四,三〇〇	五,五三五	—	—	—	—	—	—	—	—
千葉	一,七二七,七九二	四〇二,二七二	—	—	—	—	—	—	—	—
茨城	九二,八六五	二二,二二六	—	—	—	—	—	—	—	—
東京	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
神奈川	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
千葉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
茨城	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

水産養殖 魚介の類を飼養して蕃殖せしむるを養殖と云ひ、魚介の稟性に随ひ、重に吾人の需用に必要なものに就て之れを行ふ。關東にて此の方法を以て魚介を養殖し、市場の需用に應ずる府縣は、東京神奈川埼玉群馬茨城栃木千葉にして、其の魚介の種類は、重に鯉牡蠣鮑海苔等なり。鯉の如き淡水魚類は、雌雄の兩種を池水泉水等にて飼養し、少しく保護を加ふれば、自然に繁殖して其の勞甚た少なりと雖も、牡蠣の如きは其の需用甚た多きも、其の稟性に從ひ、海水の淺深地質等に大に關係ありて、質の美惡を異にし、養殖甚た困難なるを以て、未だ隆盛なりと云ふべからず。今左に養殖場數及び其の面積を擧げ、其の生産數量價額を示さん。

分の一を占め、體色背部は淡黒色にして、少しく紅色を帯ひ、宛も抹香の如し。依て其の稱あり。四五月頃、水温二十度乃至二十六度の黒潮流域内に洄游し、伊豆七島小笠原島近傍に多し。此鯨油は淡黄色にして頗る精良なり。額骨中にある者は半は液體にして、之れを鯨頭油と云ふ。之れを精製して蠟分及び脂肪とし、前者を鯨腦と稱し、後者を鯨腦油と云ふ。鯨腦は蠟燭石鹼其の他藥料等に供し、鯨腦油は繊巧なる器械に用ゑ。又腸及び膀胱より分泌する、灰褐色の物質を龍涎香と云ひ、貴重なる香料なり。齒は堅硬にして種々の器具を製造し、肉は食料とすへし。抹香鯨の科に屬するつちくぢらあり。牀長七メートルに達し、頭は圓大にして、顎は細長く、牀色灰黒なり。房州の沿岸(第六十一圖の甲)に多く、常に七八頭群をなす、其の脂肪より精製したる油は、其の色淡黄にして抹香鯨に次ぎ貴重せらる。こくぢらは牀圓長にして鬚白く、全身淡黒色に微蒼色を帯ふ。牀長牡は六乃至十五メートルにして、牀は之れより稍大なり、安房の近海に産す。白鬚は工藝上貴重なる材料にして、油は甚だ多からざるも、品質は優等なり。肉皮共に較佳良なり。

關東の海洋に於ける捕獲物は、大畧以上の如し。今東京千葉に現籍を有する、遠洋漁業者の獵場船數乗組員數漁獲物の種類及び其の價額を示さん。尙房州以北の沿海にて、臘豚獸の漁獲に従事するもの、三重縣にて西洋形帆船一艘、北海道にて二艘あり。其の漁獲物價は一萬五千八百餘圓に及ぶ。

遠洋漁業地方別 (明治三十四年)

遠洋漁業地方別統計		地方	場所	季節	日本形船數	西洋形船數	帆船數	乘組員數	種類	價額
東京	計	朝鮮海	秋	季					臘豚獸	七、八九〇
千葉	計	日本海及北海道千島近海 安房沖より大島近海	自十二月 至一月	自七月 至九月					臘豚獸及ラッコ	二、四六三
計					八	三	一	一九九	六	二九、六九二

工業

四 工業

本邦は農業國たると共にまた工業國と稱して可なり。これ、國土が其の原料に富めると、國民の意匠巧緻にして美術工藝に長したればなり。見るべし、織物陶器銅鏡器等は千有餘年前より著しき發達を爲し、奈良朝時代に於て、既に驚くべき製作品を造りたるを。明治に及んで、外國の機械工業また續々として輸入し來り、種々なる工業の上に、一大進歩を劃し、更に偉大なる飛躍を爲さんとするは争ふべからざる事實なり。關東の地は、東京なる首都と横濱なる要港と桐生足利なる機業地とを包含したれば、其各種の工業の進歩の夥しきは言ふを待たず、産額の多大なる、技術の優等なる、全國屈指と稱するも決して過言にあらず。左に、同地方重要なる工業の景況を叙述すべし。

製糸 生糸は實に本邦輸出品中第一の多額を占め、其の業の駁々として日に月に隆盛に赴くは皆人の知る所なり。關東平野、ことに群馬縣の地は殆ど本邦製糸の本場とも稱すべく、今は産額に於ては長野縣に凌駕せられたれ

製糸

ど、技術に於て、沿革に於て、猶此の地に指を屈せざるべからず。維新前までは製糸事業と言へば、單に手挽、座繰の餘業たるにとゞまりしが、安政六年海外輸出の道開け、其の製品又極めて好評を博せしかば、蠶業頗る振興し、明治三年には前橋及び南勢多郡岩神村に十二人取の西洋機械を据付くる會社を起すに至れり。而して明治政府は三年四月を以て教師を海外より聘して一大製糸場を起すことに決し、遂に上野國北甘樂郡富岡町に建築工事を起し、五年六月を以て開業式を擧げ、工女二百人を募りて繰糸の業を傳習せしめたり。而してこの傳習工女各地に散在し、西洋式製糸の教師となり、以て今日各縣に於ける製糸業の進運を促かすこと、尠少なざりしがごとし。この會社は則ち今の富岡製糸所にして、二十六年民業に歸してより、復た舊時の盛觀なく、模範工場の名も空しく過去に葬らるゝに及べり。今、其の作業の概況を述べば、製糸の種類を別製飛切上飛切一等の四等に分ち、外に屑繭より製造せるものを二等糸と爲せり。原料は春繭を使用し、毎年初夏これを乾燥貯藏し、以て一ヶ年の使用に供せり。而して例年の買入高は九千八百石より

十万一千石に及び、其の製造高は三十四年に於て五十一万三千七百七十三圓に達せり。工場を有すると二、ケンネル式鐵製の機械を備ふること二、他に轉線工場を有せり。製品は概ねアメリカ向にして、稀に歐洲行のものを製することあれど、大抵横濱生糸會社の注文に應じ、自ら海外に輸出する場合極めて少し。その他、群馬縣内、碓氷郡原中町に於ける碓氷社製糸額平均二ヶ年二百二十七万四千餘圓北甘樂郡富岡町に於ける甘樂社製糸額平均二ヶ年二百四万六千餘圓同下仁田町に於ける下仁田社製糸額平均二ヶ年六十九万六千六百四十七圓前橋市一毛村に於ける精糸交名合資會社製糸額卅四年度百十六万四千餘圓等皆有望なる好製糸場なり。

栃木縣の製糸は明治七年上州岩神製糸場の傳習生を聘し、縣内河内郡石井村(俗に大島河)に機械製糸場を建設したるに始まる。其の後、益隆盛にして大嶮製糸の名は内外に知らるゝに至れり。ことに明治二十三年三月三井家の所有に歸してより、工場を増築し、新に蒸汽機械を据付け、製造額年を趁うて増加せり。

生糸産額累年
地方別

地方	卅四年	卅三年	卅二年	卅一年	三十年
東京	四四、四三三	四九、一八七	六五、一八八	六九、四七九	六三、一七四
神奈川	四三、二一九	三三、四四〇	三三、一九二	二八、三九八	三三、三三四
埼玉	八〇、三八五	七八、四一一	九三、七八四	七二、三八五	五九、八九六
群馬	二〇〇、二九八	二一八、三三四	二四九、五六〇	一八八、二五七	三五六、一九九
地方	卅四年	卅三年	卅二年	卅一年	三十年
千葉	二一、六〇六	二一、六三四	二〇、八四三	一九、五七〇	一六、六三五
茨城	三三、二七六	二九、七七一	二四、八四三	二〇、九三九	二二、三八〇
栃木	一八、四二二	一六、〇三九	一三、四三三	一一、六八一	一一、六三四

西洋式の撚糸器械は明治六年を以て始めて本邦に傳へられ、漸次各地に其の業を起すもの多けれど、關東にては唯た上州桐生なる日本織物株式會社に於てアメリカ製の撚糸器械を備へて開業せるものあるのみ。今生糸地方別累年比較を示せば次の如し。

生糸製造額

更に生糸製造額を示せば (明治卅四年)

地方	製糸戸數	數量	價額	地方	製糸戸數	數量	價額
東京	一九、四三九	四四、四三三	二、〇一六、一六〇	千葉	三、六九五	二一、六〇六	一、〇三三、〇四三
神奈川	一〇、一九五	四三、二一九	二、〇四九、一五八	茨城	二、〇六四	三三、二七六	一、〇三三、〇四一

群	馬	玉	柄	木
二〇、八〇一	八〇、三八五	三六三六、三五三	二〇、七〇〇	一八四二二
四三、六八一	二〇〇、二九八	九四〇七、五九八		九二九三五二

群馬縣は依然として製糸業に於て關東に覇を稱へ、嶄然として頭角を抜けり。これに次ぐは埼玉縣にして、猶ほ年々進歩の兆あり。神奈川縣これに次ぎ、ことに三十年の二万二千二百二十四貫より三十五年の四万三千二百十九貫に進歩したるは異數とすべし。東京は漸次衰微の兆あり。

機械紡績

機械紡績 綿糸を製するには從來一の手紡車を用ひ、唯農家の婦女が

本業の餘暇、其製糸を市場に賣捌きたるに過ぎざりしを、三十餘年の僅々たる日月を以てして今日の盛境に進まんとは何人か想像すべき。而して紡績機械の輸入と、紡績工場の建設とは鹿見島を以て濫觴と爲し、續きて泉州堺に今の川崎紡績所を起してより、大阪附近の地は全く機械紡績の本場たるの素を成せり。關東にては、鹿島万兵衛氏が東京北豊島郡瀧川村に鹿島紡績所を開きたるを創始と爲す。當時、維新戦亂の後を承けて、人心甚だ動搖し、將來有望の事業たるを知らなから、しかもこれに賛するもの稀に、在留の外人

綿糸紡績地方別

東	地	紡	紡	放	一	職	工	工	産	額
京	方	績	績	下	日	工	業	業	業	額
東京紡績株式會社	東京紡績株式會社	東京紡績株式會社	東京紡績株式會社	東京紡績株式會社	東京紡績株式會社	東京紡績株式會社	東京紡績株式會社	東京紡績株式會社	東京紡績株式會社	東京紡績株式會社
七五〇〇〇〇	七五〇〇〇〇	四、〇〇〇〇〇〇	四、〇〇〇〇〇〇	四、〇〇〇〇〇〇	二六、〇五二	二六、〇五二	一、四三三	一、四三三	六二二、七六六	六二二、七六六
					三九、五七六	三九、五七六	二、一六五	二、一六五	一一、二四六	一一、二四六

中亦た紡績事業に熟せしものなく、機械運轉に關しても實に一方ならざる苦心を爲したりといふ。されど十年に至りて、政府も此事業を誘導することに決したれば、次第に隆盛に赴き、二十九年綿花輸入税を免除してより更に益々振張して、明治十二年にあつては僅に三所の工場、八千二百四本の紡錘なりしもの、三十四年に至りては八十一所の工場、百十八万七千七百六十二本の紡錘を爲り、廿九年創立の大阪の日本紡績株式會社の如きは瓦斯紡績系の如き細糸をも製造し、技術産額、優に輸入品を壓するに至れり。現今關東は大坂に比して、恰も支店のごとき光景を呈し、その繁盛は遠く其の脚下にも及はざれども、東京鐘淵紡績會社(第六十團の甲)の如きは、巨万の資本金を以て、精巧巨大なる機械を据付け、職工の數二千百餘人に及び、その産額實に又た巨額に達せり。今關東に於ける綿糸紡績地方別を示せば左の如し、(明治卅四年)

麻糸紡績

東京瓦斯紡績株式會社	一、二五〇〇〇	二〇、五六八	一、二七六	一六三、五七九
小名木川綿布株式會社	六、六〇〇、〇〇〇	四、二五四	二、三六	一九七、四四五
埼玉紡績所	不詳	一、〇〇〇	一、五	五、〇〇〇
埼玉野瀬工場	不詳	六、四〇〇	一、三	六、二〇〇
下野紡績株式會社栗橋分工場	—	五、〇〇〇	二、八三	一〇、八〇〇
栃木下野紡績株式會社	三、〇〇〇、〇〇〇	三、五〇〇	三、三〇	一四、七五九

群馬縣は絹糸紡績を以て名あり。絹糸紡績は明治の初年、内務省の事業として地を群馬縣綠野郡新町に卜し、機械をスウィツルより購入し、ドイツより建築師機械師紡績師を聘して開業したるに濫觴す。これ今の新町絹糸紡績會社にして、其の後三井家に拂下げられしと雖も、その社運は愈々隆盛にして、年々多額の製造あり、其の他、前橋紡績會社あり、同じく三井家の所有なり。麻糸紡績は本邦有望の事業なれど、未だ隆盛の域に向はず。政府は滋賀縣に近江麻糸紡績會社を設け、以て摸範工場たらしめしも、未だ各地方にその會社の起る者少く、僅かに北海道札幌に北海道製麻會社を創設したるあるの

織物

み。關東にては、栃木縣鹿沼一帶の地方を昔より麻の産地と爲し、その額年々多額に上りたるが、二十一年同地に下野麻紡績會社起り、漸次隆盛の運に向へり。

織物 本國の産業多しと雖も織物のごとく短月日の中に長足の進歩を爲し、克くかの長を以て我の短を補ひ、海外輸出の巨擘たるに至りしものはあらず。而して京都の西陣を除きては、先、指を關東地方、殊に桐生足利の兩地に屈せざるべからず、今、關東の機業の發達及び現況を述るに先ちて、爰に其の産地を擧げむ。

- 東京府 — 八王子織物
- 埼玉縣 — 所澤縞、川越斜子、青縞、秩父絹、
- 群馬縣 — 桐生織物、伊勢崎縞、中野縞、高崎織物、
- 栃木縣 — 足利織物、佐野綿縮、眞岡木綿、
- 茨城縣 — 結城紬、下館木綿、銚子縮、

この數者に過ぎず、然れども桐生足利八王子の三地に至りては、産額の巨

大なる、技術の精巧なる、事業の盛なる、京都西陣を除きて、他に其の比を見ず。

八王子織物

八王子織物 その濫觴は享保年間にして、はじめは産額極めて小く、一二農民の餘業たるに止りしが、天明より寛政に至りて、種類産額共に増加し、五日市場附近の黒八丈、青梅附近の青梅縞、棧留縞、川和縞、甲州の郡内縞等次第に其の名は世に高く、遂に一箇の市場を形づくるに至りき。而してこれら諸織物は孰れも八王子を隔つる三里乃至十四里の山間より産出したるを以て八王子市場にては俗にこれを山物と稱し、今猶その稱を改めず。以後産額次第に増加し、殊に盛大を極めたるは寛政より天保に至れる三十年の間であり。一時幕府士人の奢侈を戒め、絹布を纏ふを禁じたるを以て、産額漸く減少したるも、霎時にして亦其の舊に復したり。而して今の入間郡宇藤山の人藤本嘉平次太織袴地を創製し、これを嘉平次平と名けて盛んにこれを販賣したるは蓋此時にあり。文政年間に至りては上州桐生の人福田某南多摩郡横川に移住し、始めて博多帯地の製あり。殊に、阿波の藍商某此地に來りて正藍博多

帯地を製してより、八王子の絹織物忽地にして頭角を顯はし、以て明治の初年に及び、愈種類を増加せり。即ち米澤産の糸織に擬したる新米澤織、八丈島産を摸したる縞八丈、其の他八反織綾糸織の如き、又は仙臺平を摸したる武藏平糸織平太織平の如き皆是れなり。明治十四年に至りて、販路の良好なるに馴れて粗製濫造に陥り、傍ら泰西の染料を濫用したるが爲め、頓に従來の名聲を失墜し、明治十八年東京上野に於て開かれたる全國五品共進會は偶八王子織物の不名譽を天下に公示せり。十九年に至り、地の有志これを慨き、八王子織物仲次業組合を組織し、嚴にこれが監督を爲し、傍はら織物染色講習所を設けて専ら染色の術を修めしめぬ。爾後次第に名聲を恢復し、二十七八年の戦役、三十年の大火災ありて機業に一頓挫を來したるにも拘らず、愈進歩の域に進めり、産地は一府三縣に跨り、東京府に於ては南多摩北多摩西多摩の三郡、神奈川縣に於ては津久井愛甲高座の三郡、埼玉縣に於ては入間高麗の二郡、山梨縣に於ては南都留北都留の二郡にして、多くは農家の餘業に屬し、間、工場を有し、工女を蓄へて盛んに織物を製造するものありと雖も

そは殆んど指を僂ふるにも過ぎず。賣買販路は先初めに買次商と機業家との間に賣買あり(重に市場にて)。買次商はその買収したる者を一應檢閲し、標記を加へて、これを各地の注文先又は卸賣商に販賣す。市場は町内横山八日の二ヶ所にありて、毎月四の日は横山に、八の日は八日に開くを例とす。織物の種類を細別すれば、

- 一、絹物、博多帶地博多平袴地黒八丈斜子糸織類縞八丈浮織甲斐絹上田縞諸壁織紵八丈縞織本八反風通織琥珀織、
- 二、紬物、節系織砂川紬岸織秩父縞絹紡績織武藏平袴地太織平袴地、
- 三、絹綿交織、吉野織武藏野織紅梅織世留織絹瓦斯織博多結城、
- 四、木綿物、木綿紵二子織紬二子、
- 五、輸出物、羽二重龜稜、

等の諸種あり。
所澤紵 埼玉縣内入間新座東京府内北多摩等の諸郡に産する織物にして、營業組織は農間の餘業、賣買販路は所澤町に市場ありて、其地の買次商これ

所澤紵

川越斜子

を●買●入●る●。
川●越●斜●子● 高麗入間二郡に多少の産地あり。徳川幕府の頃、高麗人を武州の一隅に移住せしめたるより、其の地に絹織物を出すやうになりぬと云ふ人あれど、如何にや。其の他飯能越生に紅色絹の多少の産出あり、市場は飯能町にして、六十の日これを開く。

青●綿● 實用一方の盲綿なれど、其の産出額は非常に多く、埼玉縣西北部の重要なる産物なり。濫觴は何時なるを知らず、只農業の餘暇に村民これを織出したるに始まる。重なる産地は北埼玉郡南埼玉郡の内菖蒲町外四ヶ村、北足立郡の内箕田村外一ヶ村、北葛飾郡の内栗橋町外五ヶ村にして、市場は加須町行田町羽生町騎西町の各所、機業家の便なる所に於て専ら賣買せらる。

秩●父●絹● 創業の年代詳かならず、古來農間の餘業として、各自手製の熨斗糸玉繭等を原料とし、其の染料を草根木皮に取り、地機を以て是を製成したるに始る。其の地は黒色、量目は三百二三十疋の間にありて品質極めて堅緻なり。明治の初年迄は産額僅少にして、僅かに一地方の需要を満すに止まり

青綿

秩父絹

伊勢織

しが、十五六年の交に至りて頓にその産額を増加し、製造者又陸續として出て、前途極めて有望なり。産地は秩父一帯の地の他、猶各郡に産出あり。重なる賣買市場は秩父郡大宮なれども、川越・飯能・八王子等又多少の取引あり。伊勢織・群馬縣伊勢織は桐生に次ぎての機業地なり。その濫觴は文政年間伊勢織在の一農家にて自製の伸糸・繭糸を以て太織縞を製織せしに始まる。當時その産額大ならざりしを以て、地方の商人これを買収し、武州深谷・本庄附近の商賈に轉賣し、秩父産の太織縞に混合してこれを賣れり。これ、今に猶、京阪地方、伊勢織縞を秩父縞と稱する所以なり。天保に至りて、その業愈盛に、始めて町に市場を設く。ことに、この機業の沿革に特色とすへきは、領主酒井下野守のこの業に大なる保護を加へたることにして、當地に商業所を置き、商人世話役を設け、染色機杼に十分なる監督を施し、商人には鑑札を附して、冥加金を課せり。嘉永年間、染色縞柄に大改良を施し、安政年間に至りて、更に紺染法改良を行ひ、舊式なる黒無地の縞柄は此に全く消滅するに至れり。明治に及びて、泰西染料の輸入と共に、粗造濫製の弊に陥り、

一時は名聲全く地に落ちしが、十四年に至りて、縣廳より特に吏員を派し、町の有志者に説くところあり。その結果として、伊勢織太織會社は設立せられ、續いて染色講習所の設立を見るに至りしが、今は伊勢織染織學校の名目の下に全く縣の管轄學校となれり。産地は伊勢織附近にして、製造の状況は孰れも元機屋の注文に應じ、毎戸婦女子の餘業に屬する者なり。賣買は必ず一定の市場に於て取引ふ慣習にして、毎月一六の日を以て市を開く。買次商及び仲買人は市場に出張し、各製造人の持來れる織物を購入し、これを各地に送ること他に異らず。而してその取引先は重に京阪地方なるがごとし。織物の主なるものは、所謂伊勢織縞にして、經に絹糸又は玉糸を用ゐ、緯に玉糸或は紡績絹糸を用ゆるところの縞及び紵その全部を占む。其他糸織玉村絹等あり。近來一樂風通琉球紵裏地紋羽入羽二重等の製造漸く増加し、輸出羽二重・甲斐絹も製造せられたれども、是等は其産額少數にして言ふに足らず。猶この附近に高崎織物あり。重に絹太織等を製造し、市場を高崎市に開き、卅四年に於て、實に四十六万三千餘圓の多額に達せり。

桐生織物

桐生織物 關東に於ける最も著名なる機業地にして、京都西陣と共に本邦第一の名あり。地は群馬縣山田郡にありて、南に渡良瀬川の清流を控へ、後に野州の山嶺を帯ひ、機杼の聲の盛なる、蓋し他に其比を見ず。而してその沿革又極めて古く、和銅年間(今を去る千二百年餘既に上州絹を献したること正史に見ゆ。元明帝は挑文師を各國に派せられたれば、上州の機業も亦當時是等官撰の技術傳習官に依て發達の途に就きたるなるべし。天慶の亂、一たび中絶し、元弘に及んで、新田義貞勤王の師を此の地に起せし時、旗絹をこの地より出したる事あり。元中年間に及んで其の業稍發達し、西部の日野絹、東部の仁田山絹、其名頗る著る。應仁の亂、其業又々中絶したりしが、徳川氏起るに及ひて、再びその事業を恢復し、關ヶ原の役、旗絹二千四百十四を献したると歴史に明かなり。されどこの頃は只一般に平絹を織出すに止りて、未だ他の種類に手を着するに暇なかりしが、寛文年間初めて紗綾絹を産出し、續きて元文に至りて、彌兵衛吉兵衛の兩人の京都より移り住みて、縮緬・小純子・紹紗綾等の織法を傳ふるあり。文政に至りて、織物の技、大に進み、機業

家競うて工夫を凝し、支那製の織物を模造し、傍ら糸織・琥珀龍紋等を製造せり。これ桐生織物に於ける進歩の第二期なり。而して舶來綿糸を使用して絹綿交織を製織し、大に世人の嗜好に投したるは實に安政年間にある。明治維新後、事業一時衰頹したれど、忽にして再び隆盛の域に復し、年々の産額次第に増進の好況を呈したりしも、泰西染色法輸入せられてより、或は目前の利に迷ひて變色し易き物を製し、或は短尺のものを出し、甚しきに至りては一反中仕上げの外部と内部に品質を異にする等の惡むべき奸策を施すものありしを以て、忽ち世上の信用を失ひ、明治八九年の頃は東京市中の確實なる呉服太物商は「上州物一切取扱不申」と標幟して以て名譽と爲すに至れり。この結果として、機業上一般の監督を爲すべき桐生會社設立せられ、一々その精粗を檢し、四種の證紙を製品に貼付するに至りて、漸く其名聲を恢復したり。十三年、黒緇子の流行に會し、從來の染法を更め、新法を用ゐて南京緇子と競争し、十四年初めて米國輸出の羽二重を製し、二十年頃よりジャカード機械を使用する者年と共に加はり、紋織の技術桐生に於て著しく發達し、遂に

く般盛の境に赴き、寶曆明和の頃に及びて、足利町の北方に八丈縞縞縮緬白縮緬、南裏田中村に田中縞を産出し、御用飛脚京屋島屋に托して江戸及び京坂の商人と取引し、又桐生の商人に販賣せり。文化文政に至りて、御召縮緬南部縞(絹透屋縮柳川千年紬玉紬交織木綿縮の數種を増加し、天保三年に至りて、桐生より獨立して、初めて織物市場を足利町に開くに至れり。嘉永年間更に糸織白縮緬等の數種を増し、愈々盛大に赴きたり。ことに足利織物は重きを木綿に置きたるが爲め、幕府の禁奢令に逢ひても、維新の變亂に逢ひても、その影響を蒙ること少く、漸次その敵手なる桐生の壘を磨せんとせり。されど維新後組合の崩解したる後の粗製濫造と、泰西染色法を使用したる失敗の歴史とを免るゝこと能はざりき。十二年に於る第二回内國博覽會に於ては足利機業は漸く上州織物なる上衣を脱き棄て、純然たる獨立の旗幟を世に立つることを得たれど、尙ほその粗造濫製を止めざりしが爲め、名聲次第に地に墜ち、十七八年の交には産額著しく減退したり。即ち、十八年を以て織物講習所を設け、ジャカードの使方を試み、次第に輸入の道を開き、漸く以前

の名聲を恢復するを得たり。二十七年、足利機業組合を組織し、續いて縣立工業學校を起し、海外より新奇流行の織物見本を購入してこれを校内に陳列し、廣く當業者の参考に供したれば、足利織物は俄然その面目を一變し、從來も他地方に優れたる新機軸を出す能力を益々發達し、殊に輸出絹物のごときは實に精巧を極むるに至れり。先年、輸出に關し、足利羽二重が一頓挫を來したる事あれど、そは一時の失敗にして、今は著々として進運の地位にあり。産地は足利町を中心として遠近諸村に亘れる其の區域甚だ廣く、遠く上野下總武藏の三國に跨り、東は葛生岩舟及び下總の結城に及び、東南は武州に入りて栗橋久喜に達し、南は館林附近より武州熊谷の邊に及び、西は太田町附近に至り、北は下野の阿蘇郡に及ぶ。蓋し、足利の織物の大部分は賃織に成れるものにして、其の賃機業者の散布せる區域は則ち生産區域なり。織物の種類は實に多くして、上、高價なる純絹織物より、下、低價なる綿織物に至るまで、殆ど如何なる織物をも産出せざるもの無きがごとし。今その大別したるものを擧れば、

一、絹物、風通縮緬大島風通御召縮緬胸裏地八丈縞秩父縞南部系織銘仙
帶地縮珍綾織紬琉球紬類、

輸出向、羽二重甲斐絹琥珀「まふら」はんかち「ふ」、

二、絹綿交織、各種縮緬綿入風通新秩父紬系織糸入縮珍瓦斯靛光瓦斯海
氣瓦斯友染上布類、

輸出向、紅梅織、

三、木綿織物、各種縮緬縮珍瓦斯一樂更紗京棧紬双子小倉織等

輸出向、縮白無地瓦斯系織の各種、尺三或は二尺巾縮、

特種の織物としては、明治十七年始めて此地に製造せられて、今日最も多
大の需要ある風通御召縮珍帯地あり。明治廿五年以來の製造にかゝれる巧妙
なる綿入風通あり。しかも其の技術進歩の速なる、今此れ等の織物を西陣織
物に比するも、更に遜色あるとなく、且その廉價なるを以て西陣織物を壓す
るの勢あり。されど此地の尤も長とする所は綿織物及び絹綿交織物にありて、
就中綿縮類同瓦斯系織巾形交織の風通新縮緬等は最も熟達する者にして、他

佐野綿縮

地方の企て及ぶ所にあらず。

佐野綿縮 佐野機業の發達たる極めて近年の事に屬し、其の漸く盛んなら
んとしたるは明治五年綿結城縞の製造に始る。而してその特産なる白縮は十
二年、綿縮は二十年、尺三巾縮は二十七年以後の製造なり。この生産額は年
々長足の進歩を爲し、二十七年に於て四十三万六千六百八十三圓なりしもの
卅二年に於て一百四万六千二百七十三圓餘の多額なるに至れり。而して猶日
に月に進歩の域に進みつゝあれば、將來栃木縣下有数の機業地たるに至る、
又た疑を容れざるに似たり。

真岡木綿

真岡木綿 真岡と稱すれども、實は茨城縣下館附近より産す。蓋しその始
め本品を江戸に販賣せしもの、真岡の商人なりしが爲め、遂に其の名を以て
呼ばるゝに至りしならん。真岡木綿に二種あり、一を晒木綿といひ、一を晒
縞といふ。前者は原糸を地糸に取りて所謂往昔の真岡木綿なるものなれど、
舊式にして織るに地織を以てするが爲め、産出額極めて少なく、今は微々と
して振はず。晒縞は近年の創業にして専ら洋糸を用ゐ、織るに高機を以てし、

結城紬

年々多数の産出あり。

結城紬 茨城縣下第一の機業地にして、その名往昔より天下に聞ゆ。明治に至りて、著しくその需用を増加し、紺紵の如きは社會中流婦人の衣服として専ら嚮望せらるゝに似たり。蓋し其の地質染色の牢實にして耐久の効力に富むと、紵様鮮明にしてよく時好に適合せるとによれり。年々多額の産出あり。其の他、この附近に龍ヶ崎木綿あり。重に白木綿にして、品質堅韌、よく久きに耐ゆるを以て、酒及醬油の漉袋、暖簾地等に供するを以て有名なり。蒲團地もまた多少の名聲あり。

銚子縮

銚子縮 千葉縣銚子に於ける銚子縮は古來名聲藉甚にして、關東に於ける著名なる織物の一なり。久しく萎靡振はず、又たその名を説く者あらざりしが、近年に至りて多少聲價を挽回したる趣あり。

機織界の中心

これを要するに、關東の織物(桐生・足利・八王子)は本邦屈指の産物と稱するも決して過言にあらざるべし。ことに桐生の絹織に重きを置ける、足利の絹綿交織及綿織に力を盡せる、八王子の帶地袴地に巧を競へる、いづれも特色を

織物産額地方別

地方	織戸數	織工	絹織物	絹綿交織	綿織	麻織	其他織物	毛織物
東京	五,四三三	一〇,八七三	三,六三,五九八	一一〇,七八〇	七三三,四四五	三,四六六	一一,四六六	二,六三三,五九三
神奈川	一,三〇一	二,五七六	三,三七,〇三四	八,〇九三	八七七	—	—	二,〇〇〇
埼玉	三,九一七	六,三二六	二,八二,三四一	六六〇,六七九	三,九二,四三四	—	—	—
群馬	三,六六八	三,九七〇	八〇,六八七	四,一五,八三六	五七九,五〇五	七五七	—	八二,〇〇〇
千葉	一,三三九	三,八六六	八六,六五四	九,四三三	一五,四七五	—	三	—
茨城	二,七七七	八,六九〇	九一,四〇〇	七,四三〇	三,四九,九九九	五,〇〇〇	—	七,六六四
栃木	三,九〇三	二,六七一	二,三九,八三三	二,三三〇,四三三	一,三〇三,九六七	一四,五三七	—	—

有せざるはあらず。而して足利の機業の漸く桐生を壓せんとするは重きを實用品なる綿織に置きたるに由る。伊勢崎は前の三者に次きて、亦た甚だ盛んなり。今卅四年に於ける關東平野の織物を地方別に分てば、

陶磁器

陶磁器 陶磁器は時勢の變遷に従ひて盛衰一ならず。茶器に用ゐられし者の大抵衰頽を極め、食器及び美術品の海外輸出の便を開きて非常の進歩を

爲したる皆然り。然りと雖も美術品を除きては、山來關東の地は窯業に疎く、著名なる産地殆んど指を僂ふるに過ぎず。否、その美術品と雖も維新以後都會の地の交通の便なるが爲め、名工大家各地より來り住み、以て東京の名を成したるのみ。今、少しくその沿革を述べんに、東京には江戸時代に於て一二の陶器製造ありしのみにて、磁器に至りては其の製造絶えて無かりしなり。而して磁器の製造は實に文久三年に福島政兵衛なるもの始めて瀬戸より陶工を聘し、箕輪村なる龜山侯の別邸に巨窯を築き、盛んに磁器を製造せしに始まる。然れども其の業一年餘にして廢し、明治八年更に瀬戸の陶工井上亮齋によりて淺草橋場町に新窯を築き、以て東京近世に於ける磁器の祖を爲せり。十五年に至りて農商務省地質調査所に於て、ドイツ人ワグネルの創意にかゝれる陶窯を牛込新小川町に開き、江戸川製陶所工長をしてこれを監せしめしが、十六年、更に一私人の手に歸し、友玉園と稱して陶磁器を製せり。其の他明治の初年より小石川高田豊川町に新窯を築き、薩摩錦襦様の陶器を製し、其の後フランス式の陶窯を築き、十八年頃より更に釉等に意を用ゐて、種々

の窯變を製し、珉玻璃紫微釉縹釉などと稱する貴品を製出し、一時大に世に珍重せられたる竹本阜一なるものあり。其の人廿五年を以て歿し、今は其の子其の後を嗣けり。而して江戸川製陶所長なりし加藤友太郎井上治兵衛亮齋の子等良工を以て聞ゆ。而して東京に於ける繪付もまた多少の變遷あり。初めて瀬戸有田より素地を取寄せて一の附屬磁器製造所を淺草芝崎町に置きしは明治五年十月なりしが、翌年オーストリア國ウイン博覽會に出品したる陶磁器の繪付は皆この所に於て製せしなり。六年、同所の廢せらるゝや、陶畫工の散亂するを惜み、更らに繪付工場を深川森下町に設立し、名けて瓢池園と號せり。而して此の工場は松根油を使用して専ら外國輸出品に適する珈琲碗肉皿類等の繪付を爲さしむ。蓋し錦彩畫中尤も上乘なるものか。亦東京は從來、今戸燒隅田燒の外、三浦乾也が乾山の風に倣ひたる一種の陶器を製するのみなりしに、明治十六年の頃、ドイツ人ワグネル江戸川製陶所に於て旭燒一名吾妻燒を發明せり。而して我邦固有の優美清雅なる繪畫を陶面に顯すことを得たるは、ワグネルの發明に得るところ多きがごとし。されど産額

眞葛焼

はいづれも多からず。

神奈川縣に於ては横濱に於ける眞葛焼、近年非常の勢力と非常の聲價とを得たり。而してこの眞葛焼は京都の眞葛香齋の子宮川香山横濱の商人鈴木某の勧誘により、明治四年始めて久良岐郡太田村の不二山下に陶窯を開き、薩摩焼を摸して専ら外國人に販賣せしに起因す。爾來専ら意を窯變にひそめ、濃厚の釉料を以て巧に紋様をあらはし、遂に古作の模擬によらざる一種の磁器を製出するを得るに至りぬ。此の人、今帝室技藝員に選まれ、其の作品いよく美妙に、世人の其の名を唱ふこと漸く多し。而してその製品は重に花瓶香爐盃鉢等なり。

其の他、關東に於ける窯業は重に實用品のみにして、名を博するに足るもの無し。産地は埼玉縣に於て松山町龜井村深谷町、栃木縣に於て益子村小砂村、群馬縣に於て藤岡町安中町、茨城縣に於て笠間町等なれど、皆微々として言ふに足らず。今、陶磁器製造價額三年の比較を示せば、

地方	製造品價額			地方	製造品價額		
	四年	三年	二年		四年	三年	二年

東京	七二、四五二	七〇、九五三	四〇、〇四二	群馬	一五、四四〇	一三、〇八八	三、三〇八
神奈川	一三四、九五〇	一五二、九〇〇	一四三、三〇〇	茨城	五二、〇六五	四七、八〇二	四一、〇九二
埼玉	四、三〇九	四、三三八	四、一二五	栃木	五九、五三九	五三、六〇九	四九、二〇八

七寶

七寶

七寶は一たび寧樂朝に榮えたれど、平安朝に至りて全く其の製法を失ひ、明治に至りて再び製法を開きたり。而して七寶の俄かに面目を改めたるは明治七年以後にありて、八年、東京築地四十一番館アーレンス商社に於て七寶を製造せんとして、名古屋の名工塚本貝助を聘したるに起因す。其の時、貝助は其の子山田甚助塚本甚九郎門人十數名を率ひて東京に來り、小石川御殿坂の工場に入り、盛んに七寶の製造に従事せしが、獨逸人ワグネルも亦雇はれて同社に來り、學理經驗一致して大に七寶の面目を改めたり。其の商社は一躍して破産したれど、七寶の本場とも稱すべき名古屋の七寶會社は曩の甚助甚九郎を聘して、新に工場を牛込神樂町三丁目に設け、第二回内國博覽會の出品物を製造せしめ、更らに東京の澁川惣助の勧めによりて、無線七寶の新發明を爲せり。二十年澁川惣助其工場を襲きて、貝助甚助甚九郎

を聘し、益、資金を投し、精巧にして雅致に富める無線七寶の名聲頻に高まり。爾後盛衰ありて、會社工場亦興廢常ならざりしも、關東の七寶は全く蒔川惣助の無線七寶に歸して、よく京都の並河靖之の製せる有線七寶に相對抗せり。この二人は今七寶を以て帝室技藝員たり。

七寶の輸出は慶應元年には繼かに三箇の皿鉢に過ぎざりしが、今は東京名古屋京都の各地より、イギリス、アメリカ、フランス等に輸出し、その輸出額一年凡三十三万餘圓に達せりといふ。

漆器 漆器も亦本邦に於ける有力なる輸出品なり。陶磁器と均しく、時勢の變遷に従ひて、その盛衰一ならざれども、飲食器を製造せし所は今にその聲價を失墜せざるが如し。關東に於ける主産地は東京市を第一とし、神奈川縣これに次けり。而してこの種類は輸出品なる美術工藝品最も多きを占めたり。

蒔繪は維新後東京に名工輩出し、精巧の品を製すること一年は一年に超へたり。而して其の特色とする所、各流に於て各異れりと雖も、之れを大別す

漆器

蒔繪

れば柴田派、是眞、小川派、松民、川之邊派（一朝、植松派、抱民、白山派、松哉）の數者に過ぎず。而して漆器蒔繪の近來長足の進歩を爲したるは、廣島縣人田原榮の色漆の發明に負ふ所極めて多し。漆は本邦特有の物産にして、其の質堅硬緻密なるが爲めに、其の用極めて多しと雖も、惜いかな、其の色、黒赤黃綠の數者に過ぎずして、古來其の他の色を出すこと能はざりき。田原榮が化學上より研究して、完全なる色漆の發明に志せしは、明治十九年の頃よりなりしが、廿二年に至りて塗漆發色法の名の下に始めて專賣特許を得、これより自由に天然の七色を漆の中に具有するを得るに至れり。廿五年、工場を小石川掃除町に設け、廿七年更らに横濱日出町に移し、今日數十人の漆工を使役して盛んに色蒔繪なる輸出品を製造せり。而してその製品が外人の嗜好に適せるは漸次類似の色漆を使用するもの、出て來りたるによりて推せらる。則ち横濱及び東京に於て蒔繪の發達を爲せるは著しき事實にして、柴田派の池田泰眞、川之邊派の川之邊一朝は二十九年を以て帝室技藝員の撰に預れり。然れども漆器に至りては維新後絶えて名工の出づるなく、繼かに橋本市藏

の竹摸造塗、龜井直齋の黒漆器を出せるに過ぎず。蓋し、東京漆器の優等なるものは、下地の堅牢、研磨の精確、漆色の鮮美、形状の優麗、粉色の鮮發等の特長ありて、優に本邦に覇を唱ふるに足ると雖も、塗師の多數は目前の利益に逐はれて、敢て慎重緻密の態度を備ふるなく、従つて名器を出すこと稀なるに至る。

粟野塗
 其の他、茨城縣東茨城郡坪村に粟野塗あり。淡色春慶髹の膳具多く、水戸市を合せて製造戸數二十戸、職工四十餘名あり。栃木縣には春慶塗の日用雜器最も多く、其の産地は日光及び梁田郡御厨村なり。神奈川縣は横濱市の他中郡足柄下郡に於て猶多少の産出あり。
 今漆器の地方別を擧ぐれば (明治卅四年)

漆器産額地方別	地方	製造戸數	職工	價額
東京	製造戸數	四六	六八	四三、〇五一
	職工	三九五	一、〇四五	二〇二、四九一
神奈川	地方	栃木	製造戸數	職工
	價額	二四	五九	二二四〇

青銅器及び銅器

青銅器及び銅器 青銅器及銅器は維新後海外輸出品の一となり、歐米各國に輸出するもの年々三十万圓の多額に達せり。而して關東にては東京市實に其の巨擘なり。されど日用品よりも寧ろ美術品多く、彫金鏤刻の術極めて盛んに、加納夏雄海野勝珉鈴木長吉黒川榮勝岡崎雪聲寶子山宗珉百々瀬物右衛門鹿島一布大堀正壽鈴木源吉のとき名工陸續として輩出し、其の技術又各、特長あり。その一般の例を擧れば、加納夏雄海野勝珉の彫刻に於ける、鈴木長吉岡崎雪聲の鐫物に於ける、鹿島一布の象眼に於ける、黒川榮勝の切嵌に於ける皆その類なり。而して加納海野の二氏は選はれて帝室技藝員たり。起立商工會社は鈴木長吉寶子山宗珉の専ら銅器製造に従事せし處にして、東京に於ける斯業の進歩はこの社與りて大に力あり。其の他東京彫工會鈍工研究會等起りて、いよくこの道の進歩を圖れり。
 其の他東京市南足立郡にて多少の日用品を製造せり。茨城縣久慈郡にも銅器の製造所あり。されど微々として言ふに足らず。
 青銅器銅器地方別を擧れば (明治三十四年)

地方	製造戸數	職工	價額	地方	製造戸數	職工	價額
東京	一七	四八	一八、八七二	茨城	二	三三	二、四〇〇
埼玉	六	三五	二、四五〇				

神奈川・群馬・千葉・栃木の四縣には製造所なし。

油 魚類より製する諸種の油は水産の部に属すべければ、爰には只植物製の油類のみを擧ぐ。而して其種類を分ちて菜種油・胡麻油・荏油・綿實油及び其の他を爲す。關東地方皆多少の製額を見ざるなく、製造所亦た各地に散在せり。菜種油・胡麻油は東京府下に於て荏原・北多摩の二郡を主産地と爲し、其の他群馬縣に於ける邑樂郡・神奈川縣に於ける橘樹郡・筑波の二郡最も多し。千葉・茨城の二縣は到る處その製額を見ざるなし。今、三十四年の地方別を示さん。

地方別	職工	菜種油價額	胡麻油同	荏油同	綿實油同	其他	總計
東京	六九	三、五七五	四三三			五六一、〇四四	五六五、〇五二
神奈川	一〇六	四、五七五	二、〇六三	三四〇		二〇	四八、一八〇

紙

地方	製造戸數	職工	價額	地方	製造戸數	職工	價額
埼玉	一七二	六七、三八五	六、八八七	群馬			一、四五〇
群馬	七七	三〇、一四五	三、六一三	千葉			四、三〇五
千葉	四四七	三、四九五〇	四、八、五七八	茨城			四、三三、一〇四
茨城	三二六	一、六九〇六七	三、五五九八	栃木			四、三三、一〇四
栃木	七七	五、二六一七	三、五〇九四				二、二九三、一五

紙 紙は和紙・洋紙の二に分ち、洋紙は重に機械にてこれを製す。關東に於ける和紙は、到る處多少の製出あれど、東京・埼玉・茨城の三縣尤も多し。而して東京の主産地は東京市・群馬縣の主産地は多野郡・茨城縣の主産地は那珂久慈・東茨城・水戸市等なり。江戸川製紙會社は東京小石川區にありて、専ら江戸改川良紙の製出に盡力せり。其の他、西の内延紙は東京群馬茨城栃木の四縣に出で、吉野紙は埼玉栃木の二縣に産し、小菊紙・漉紙等は東京に製せらる。又、加工紙類としては東京に壁紙・襖紙の産出あり。就中金砂子の如きは、優等美麗にして、尤も室内の装置に適す。其の他紙製品の元結は東京の産物として殊に著名なり。三十四年和紙地方別を擧げは左の如し。

和紙地方別		地	方	製造戸數	職	工	美	濃	紙	半	紙	其	他	價	額	計
東	京	東	京	一、三六四	五、七五五	二八、五二一	五八、三二二	七四四、三五四	八三一、〇八七							
神	奈	神	奈	三八	七三		九五〇	一四、三二七	一五、二七七							
埼	玉	埼	玉	一、二一六	三、一七六	二、九〇〇	四九三六	二二七、八一八	二三五、六五四							
群	馬	群	馬	七二四	一、五八八		七三八二	二一、二八九	二八、六七一							
千	葉	千	葉	三七	七八		一、四五二	一〇、四〇〇	一一、八五二							
茨	城	茨	城	七五五	九七九	一、六三五	二〇、九九四	七四、五三九	九七、一六八							
栃	木	栃	木	六九〇	二、三三三	二、八一〇	一九、一九四	九五、一六六	一一七、一七〇							

洋紙の本邦製造は、明治五年淺野侯爵家に於て府下蠟澁町に有恆社の工場を起したるに始まる。次きて王子の印刷局抄紙部(明治八年創立)王子抄紙會社(第五十九號の子製紙會社と改む)東京三田製紙所等起れり。爾來印刷局は専ら抄紙に力を盡し、植物纖維を原料とせる外國に比類なき一種の紙を製し、抄紙機械をつくり、傍ら一大機械を輸入するなど、益々盛大に赴けり。而して明治八年澁澤榮一等が島田組小野組三井組に勸めて一大製紙會社を北豊島郡王子村に起せし事

燐寸		製造所	放下資本金	原動力	職	工産	出高
内閣印刷局		八二八、八七八	汽	力	九〇三	五二八、八四八	
王子製紙株式會社		二〇〇、〇〇〇	水汽	力	六六八	二〇、〇八六、四四一	
有恆社		一〇六、七九三	汽	力	四七	一、一四七、九三一	
東京板紙株式會社		五〇〇、〇〇〇	汽	力	二二三	一一、二〇〇、三二六	

業も愈々隆盛に赴き、其の後四日市神戸富士等の大なる製紙會社の設立せらるゝ一二にして止まらず、其の産出統計三十四年度に於て七百十四万九百四十五圓の多額に達せり。即ち同年の輸入總額二百二十一万三千三百五十一圓に比すれば殆ど三倍以上の盛況を呈せり。
今關東に於ける製紙所の産額を示せば (明治卅四年)

燐寸 本邦に於ける燐寸の製造は實にフランス留學生清水誠を以て始めと爲す。而してこの動機は男爵吉井友實がエウロッパ漫遊の途次、フランスに於て大に我邦輸出入の不平均を嘆じ、燐寸製造の必要なるを論したるに因

る。即ち清水誠は明治八年を以て歸朝し、東京三田四國町吉井友實の別邸を假工場と爲し、始めて燐寸製造を創始し、試験の結果、頗る好評を博せしかば、更らに政府より若干の保護金を受け、九年九月本所區柳原町に一大工場を建築し、以て新燐社と號したり。而して始めて外國に輸出せしは十年の九月なり。十一年、清水誠は更に海外に遊びて、燐寸業を研究し、殊にスウイデン國エンコピンク燐寸製造會社の工場に於て、種々の要點を調査し、得る處實に尠少ならざりしがごとし。爾來全國の唐物商同盟一致して開興商社を設立し、輸入燐寸の賣捌を廢し、専ら新燐社の製造をのみ賣捌さしかば、漸次輸入を防遏して以て今日の盛を致すを得たり。新燐社は明治二十一年を以て不幸にして解散したれど、其の化身とも稱すべき新燐社(深川區大工町)等起りて、年々輸出高二十七万圓餘の多額を出すに至れり。されど其の業今は中心を神戸に奪はれ、關東は微々として振はざるの概あり。而して關東に於ける三十四年製造は東京に於て六百六十九万七千九百五十打と、千葉縣に於ける一万二千打とのみにて他縣は殆ど皆無の姿なり。

麥稈眞田

麥稈眞田

本邦に於ける麥稈眞田の産地は現今岡山縣地方笠岡を中心とし、愛知縣之れに次ぎ、四國九州等にもまた多少の産額あり。然れども其濫觴は實に東京府荏原郡に始まる。抑、本業の創始は明治四年荏原郡大森の人河田谷五郎の經營する處にかゝり、當時氏は横濱の町役人たりしかば、屢々外人と相接するの機を得、曾て其の携ふる所の麥稈朝を見、始めて本邦にも麥稈眞田業を起さんとの考案を爲し、専心思を該事に潜め、明治七年始めてこの製品をアメリカ人に示せしに、其の眞田大に見る可きものあるを以て、幸に五千反の注文を受け、漸く盛大の域に進めり。されど十二年に至り、麥稈の漂白法不完全なるが爲め、外國人の評判宜しからず。産額徒に多くして、需要太乏しく、一時非常なる窮境に沈淪せしも、亞硫酸を以て漂白すべきことを米人より聞き、次第に其の名譽を恢復せり。當初は只六本平打のみなりしが、十六年頃より種々なる組方を案出し、次第に其の技上達せり。十八年の初、米國商人中我麥稈眞田の有望なるをみとめ、買占を企てたるものありて、價格に變動を來せしが、二十一年に至り、問屋仲買製造人等にて麥稈

製藍

業の組合を組織し、好結果を得たり。爾來益、進歩の域に進み、其の産額も非常に増加せり、産地は大森の近傍より神奈川縣橋樹郡川崎村に亘りて、その製造組織は多く農家の餘業に屬せり。工場を設けて職工を使役するものは、東京府に屬する大森六郷にして幾かに三戸を有するのみ。而して三十四年の製造高は東京の三十一万二千東の他、千葉埼玉二縣に少額の製造あるのみ。

製藍

東京府に於ける主産地は北多摩北豊島の兩郡にして、群馬に於ける主産地は新田邑樂の兩郡なり。茨城縣は東茨城多賀新治の諸郡より産し、埼玉千葉栃木は皆各地より産せり。其の額皆多からず。

革

革類

東京府に於ける主産地は東京市北豊島郡荏原郡等にして、牛革は殆ど數に於て馬革に倍せり。これに次くは千葉縣にして、茨城縣亦これに次く。群馬縣にては、前橋市碓氷郡吾妻郡に産し、馬革極めて多し。神奈川栃木の二縣は云ふに足らず。東京市に於ける製造所は櫻組製革所(本所區須崎町)最も大にして、その創立は明治三年十月にあり。その他、靴工場田中製革所合名會社大倉組革工場等あり。

酒

酒及び醬油

酒は關西の本場に比すべくもあらざれども、醬油は千葉縣に於ては實に大なる發達を爲せり。卅五年酒醸造高地方別は左の如し。

地方	製造場	造石高	地方	製造場	造石高	地方	製造場	造石高
東京	一五三	一八、五三、六五	群馬	三四	七、四四、六〇	茨城	四三	一、八七、〇六
埼玉	三三九	七、六三、五七	神奈川	二〇〇	三、三三、六〇			
千葉	五七	六、〇八、四四	栃木	九九	八、二六、五六			

千葉縣の多額に達せるは、流山味淋の大産地を有せるが爲めにして、茨城縣の一億一千八百餘石を有せるは石岡及び其の附近の醸造地を含めばなり。その他、各地いづれも地酒問屋を有せざるはなく、埼玉縣千葉縣栃木縣皆多額の産出あり。されど未だ著名なるところあるを聞かず。其の他、埼玉縣に二石、栃木縣に三百七十三石、群馬縣に十三石、神奈川縣に三十石の葡萄酒の醸造あり。麥酒は東京府澁谷村に日本惠比壽麥酒會社あり。神奈川縣程ヶ谷町に東京麥酒會社あり。横濱南山手にキリン麥酒會社あり。東京本所に札

醬油

幌麥酒會社工場あり。いづれも多額の産出あり。
 醬油は關東尤も盛大にして、殊に千葉縣は産額に於て、性質に於て本邦第一位を占む。蓋し利根川の沿岸に専ら醸造地多きは、この水質の醬油醸造に適すればなるべし。而して下總に於ける野田、銚子等その魁たり。
 今その地方別を示せば、(明治卅四年)

地方	製造戸數	造	石	高	地方	製造戸數	造	石	高
東京	一三八		五三、三七四、六〇八		埼玉	一六七		三七、六三二、六八八	
神奈川	一九六		三六、三七九、四七七		群馬	一〇九		三三、三三九、九三五	
千葉	六〇一		二二、七二四、〇一三		栃馬	一七六		三一、九一六、八七六	
茨城	四二〇		七、七七九、五一〇		木				

造船

造船 本邦の造船業は舊幕府に於て既に其の事業に着手せり。而してその濫觴は肥前の飽浦及び相模の横須賀に船渠を設け、工場を立てしに始まる。然れども其の業は明治政府を以て始めて今日の大成を見るに至りしことを

横須賀造船所

待たず。而して關東に於ける横須賀造船所は九州長崎の飽浦造船所と共に本邦第一たり。横須賀造船所の歴史は詳しく地方誌に述べたれば、今その縷陳を要せずとして、簡単にその現況を叙せんに、船渠は三箇ありて、第一及び第三は共はフランス人の設計にかゝれり。第一船渠を慶應三年二月舊幕府の起工せしものを維新後政府に於て工事を繼續し四年に於て始めて竣工したるもの、第三船渠は四年六月に起工し、七年十一月に竣工せしもの、第二船渠は最も新しく、十三年七月起工し十七年六月を以て竣工せしものなりといふ。いづれも本邦有数の大船渠にして、工場の盛大なる、職工の技に熟せる、此地に於て大船の製造せられたる者極めて多し。石川島造船所は東京市京橋區石川島にあり、舊徳川幕府の末、水戸藩の創建せし所のものにして、烈公の命してかの旭日丸を製造せしめし此の所なり。維新後、驛遞局に屬し、續きて海軍省に轉屬し、一時主船局を此の地に置きて、専らその事を直轄せしが、其の後民業に歸せり。廿二年に至り、會社組織に更めて、石川島造船所と稱し、廿六年、更に株式會社と爲せり。製造船舶亦少なからず、工場の組

石川島造船所

浦賀船渠株式會社

機械製造

芝浦製作所

織亦甚だ整頓せり。廿九年政府は造船獎勵法を發布し、鐵製又は銅製の船舶にして總噸數七百噸以上のものに對し、十五年間獎勵金を下附せらるゝ事となりたれば、近年民業の各地に起るもの頗る多く、關東地方に於て、既に二箇の有望なる船渠會社を起しぬ。一は横濱船渠株式會社にして、廿九年三月二箇の船渠の築造に着手し、現今は全く竣工して、既に八千噸以上の船舶を修繕するを得ると聞く。他は明治廿九年十月を以て起りたる浦賀船渠株式會社則ち是れなり。第一船渠は既に全く竣工して、アメリカ政府よりヒリッピン警備の爲めに委嘱せられたる砲艦數隻は今その製造中なりといふ。其の他品川沖第四砲臺に緒明造船所あり。

機械製造 西洋式機械の製造は東京市に於て近年非常に勃興し、現に廿二の小工場を顯出し、更に駁々として進歩の域にあり。始めは、工務省の三田製作所に於て種々の機械を製造するにとゞまりしが、今は芝浦製作所の如きありて、徃々官設の諸工場を凌かんとするに至れり。芝浦製作所(第六十圖の甲)は東京市芝區金杉新濱町にありて、明治二十年田中某の創設せるところ

平岡工場

工場名	所在地	所有主	製産物	職工
芝浦製作所	芝區金杉新濱町	三井鑛山合名會社	蒸汽電氣諸機械	四二〇
富岡機械製造所	芝區田町二丁目	富岡米藏	汽機橋蒸溜機精米機械	三二〇
日本鋳工株式會社	本所區徳右衛門町	其社	汽機汽關其他	一八四
東京機械製造會社工場	芝區三田四國町	其社	諸機械	一〇三
桑原鐵工場	小石川區表町	桑原謹三	西洋形鐵鋼鉄鑄造等	一四七
平岡工場	本所區錦糸町	平岡熙	鐵道用車輛諸器械	一一四

にかゝり、始めは海軍造兵廠の保護を受けて、専ら同廠の機械を製作せしも、廿六年三井家に屬してより、更に一万坪の海面を埋築し、蒸汽機械・蒸汽・鑛・電氣機械・紡績機械・礦山機械等の類を盛に製造せり。平岡工場は鐵道事業の勃興に従ひて起りたるもの、重に鐵道の貨車客車を製造せり。初めは小石川區陸軍砲兵工廠内の工場を借用して、専らその事業に従事せしも、今は本所區錦糸町に移りて、益々その事業を擴張せり。今、その重なる工場を示せば、左の如し。

東京車輛製作所	深川區富川町	田中久重	全上	一五〇
精工舎	本所區柳島町	服部金太郎	時計類	二四九
沖商會電氣製造所	京橋區新富町一丁目	沖牙太郎	電氣諸機械	一六一
中島工場	本所區外手町	中島成道	汽罐・機械等	一五四
古河鋳鑛所	本所區柳原町三丁目	古河市兵衛	精銅銅線	一二八

五 鑛業

鑛業の概況

關東地方の中央部は、概ね第四紀の平原より成り、有用鑛物の見るべきもの多からずと雖も、其の周縁に當れる常陸の北部及び武藏秩父等の如き古代岩層を以て成れる地方と、兩毛の山地の如き火成岩を以て成れる地方とは、多少の鑛産物なきにあらずして、殊に下野は、頗る鑛産に富み、彼の有名な足尾銅山の如きは、其の鑛脈の豊富なる、其の事業の隆盛なる、本邦の鑛業中、之れに比肩するもの少なく、鑛産乏しき本地方に在りて、嶄然頭角を露はし、異彩を放てるを見る。故に關東の鑛業を記載せんと欲せば、勢ひ

金及び銀

足尾に關する記事に、最も重きを置かざるべからざるを以て、特に之れを詳述せんとす。

(イ) 金屬鑛類

金及び銀

金の産地は、下野常陸武藏秩父地方等諸所に散在し、就中常陸久慈郡下津原下野上都賀郡西澤等は、稍著名の産金地なりと雖も、其の産額は、甚だ多からずとす。又銀の産地は、特に擧ぐるに足るものなく、僅かに副産鑛として、二三の個所より、少額を出だすに過ぎず。亦常陸久慈郡町屋村武藏秩父郡大瀧村より砂金を出だし、殊に町屋村及び其附近の地は、近來頗る鑛業者の注目する所となり、既に採集に着手されたる所尠からず。次ぎに下津原金山の産額を擧ぐ。(明治三十四年)

國	郡	村	産地	券數	坪數	採鑛高	製煉元鑛高	製出高
常陸	久慈	袋田	下津原	—	二二〇,五四〇	一二七,〇〇〇	一八,〇〇〇	銀金 一,一三〇 二六三

足尾銅山の概況

銅 足尾銅山の名は天下に高し。足尾銅山(第六十二圖)は、下野國上都賀郡足尾町宇銅山外八字に連亘し、日光火山麓の南方に隣接せる所謂足尾山脈中の雄峰庚中山の南側に位し、南北凡そ四料、東西凡そ二料に亘れる畧、楕圓形之地積を占め、南東西の三面は、渡良瀬庚中山澤の二溪谷に依りて削られ、山勢蜿蜒北より南に走り、一様に稜々たる岩骨を裸出せる礫礫の山域にして、其の最高點を備前橋と稱し、海面を抜くこと千三百三十三米、古河鑛業所は其の直下にあり、嶮崖に據り、危潭に臨みて、層々棟莖を連ね、其の中央事務所は、海面上七百八十二米の高さにあり。鑛車の響は、機器の音と相和して、晝夜間斷なく、轟々たる煙突と脱硫塔より、絶えず昇騰する黒煙白霧は、濛々として山腹に綴びき、規模宏大、業務旺盛、斯かる山間に介在して、一種の別天地を開ける足尾町の小繁華地と、其の附近の諸村落とは、實に直接間接本山に據て、命脈を維持し、生計を營まざるはなく、人煙漸く稠密に赴き、足尾町のみにも、現今二萬一千有餘の人口を有し、本山に隸屬する役員及び勞働者は、實に萬を以て數ふるに至れりといふ。爰に關東の鑛業を記

沿革

載するに當り、特に此の項を設けて、本山業務の一斑を説かんとす。

沿革 舊記に徴するに、本山は、慶長十五庚戌年(西曆千六百十年)、備前より移寓したる農民某々なる者始めて發見し、(備前橋の名、これに原由す)日光座禪院の座主を経て、江戸幕府に上申して、其の直轄となり、翌年より銅吹を開始し、爾來代官の差圖の下に、其の製銅は、悉く之れを幕府に買上げ來りたりといふ。彼の江戸城を始めとし、日光上野芝等の諸廟の普請に使用せる銅及び其の合金は、多く本山所産の者を以て充て、殊に延寶の頃よりは、吹床を増加して三十座となし、一個年の産出高凡そ四十貫目に及び、餘裕は是を長崎に輸送して、蘭船との交易品となしたる事、并びに寛保二壬戌年、本山の銅を以て、所謂足字錢を鑄たる事等は、最も著名の事實なりとす。然れども、幕末以來、事業萎靡して振はず。明治の初年、一時日光縣の所轄となりしが、同四年民業に移り、同十年に至り、遂に現鑛業者古河氏の借區に歸し、爾來銳意改善進歩を加へ、漸く現今の盛況を呈するに至れるものなり。

交通 本山は、栃木縣廳を距る十六里、東京を距る凡そ四十里にして、近

交通

鐵索

傍著名の驛邑を擧ぐれば、北東七里を隔て、日光鉢石町(停車場所在地)、南西十里を隔て、上野國大間々町(停車場所在地)あり。其の通路は三條ありて、第一は東道と稱し、日光より細尾峠を越え、神子内川に沿ふて行くもの。第二は西道と稱し、上野國澤入より、渡良瀬川の上流に入りて行くもの。第三は日光より、大谷川の河谷を溯りて中禪寺に出で、合湯峠を越えて達するものとす。此の内東京よりの旅客は、普通東道を取り、又西道を行くものも尠からず。東道は日光まで、西道は小瀧と澤入までとに達する輕便馬車鐵道を敷設し、又鑛山構内には、平均勾配十五分の一の電氣鐵道を敷設しあるを以て、連山障壁に圍まるゝに拘はらず、交通上大なる困難を感ずるなし。細尾峠の兩麓より山頂に向つて架設せられたる鐵索は、貨物運搬の用に供するものにして、到る所に樹てられたるA字形の臺柱の上を通過せる二條の繩鐵線は、水力電氣を應用して、絶えず之れを回轉せしむ。布包菰包穀俵其の他種々の貨物は、中天に舞ひ、雲際に運び、始めて此の地に遊ぶ者をして、頗る奇觀を覺えしむ。左に本山交通機關の一斑を記す。

地質及び鑛脈

一、輕便馬車鐵道 總延長十一萬三千六百八十餘尺
 一、鐵索 同 六萬三千四百八十餘尺
 一、構内電氣鐵道 同 二千六百四十餘尺
 一、電話線 同 五十九萬七千三百餘尺
 一、電話機 七十三個

地質及び鑛脈の概略 本山の基底を構成せるは、主として古生代の粘板岩、角岩及び砂岩等にして、第三紀以前、花崗岩先づ是を貫きて、地表近くに迸發し、地盤に破綻を生ぜしめ、後に其弱所に沿ひ、石英粗面岩英閃安山岩及び輝石富士岩等の新火成岩交噴出して、附近に數多の火山を囀起したり。故に地質頗る錯綜し、岩脉に龜裂多く、地殼撼搖する毎に、硫化金屬と溶解せる所の金屬分を行々沈積填充して、此處に此の豊富なる鑛脈を完成するに至れるものなり。されば、現今既に採掘し、或は將來採掘するに足るべき鑛床は、其の數實に三十の多きに及び、大抵石英粗面岩中に包含せられ、而も其

鑛脈の種類

の種類皆同一なるを以て見れば、各鑛脈は、何れも其の成生の時期を同じうするものなるべく、走向亦た一樣ならずして、頗る錯雜を極む。然れどもよく之れを探究するときは、概ね二様の脈式を保てるを知る。即ち甲は、一般走向北六十度東内外にして、横間歩鑛を以て之れが表式となす、故に之れを横間歩鑛脈聯、或は六十度鑛脈聯と稱し、本山中最も脈質の豊富なるものとす。又乙は、一般走向南八十度東内外、即ち畧東西に走れるものにして、新盛鑛を以て之れが表式となす、故に之れを新盛鑛脈聯、或は百度鑛脈聯と稱す。而して其の鑛脈幅及び廣袤等は、精細に之れを知ること難しと雖も、既に開鑿せられたる鑛脈に就き、其の走向方位傾斜の度及び方向脈幅廣袤等を記せば次の如し。

脈名	走向	傾斜		延長	脈幅
		度	方向		
横間歩	北五十五度東	八十七度	北西	三〇	六尺
新盛	南三十度東	六十三度	南西	三六	六尺
小瀧真盛	南七十度東	七十度	北東	二八	二

鑛質

探鑛

鑛名	走向	傾斜	延長	脈幅
保北七十度東	七十三度	北西	三七	三
天北七十度東	八十五度	北西	二六	二
安兵衛北七十五度東	七十五度	南東	二八	三
判右衛門北四十度東	八十五度	南東	二六	三
小瀧永盛北六十七度東	七十五度	北西	二七	六

本山より探掘する所の主鑛は、頗る良質なる塊狀黃銅鑛にして、往々鑛脈の晶洞をなし、多少の黃鐵鑛方鉛鑛方亞鉛鑛等を混有し、又少量の銀をも含有せり。今本山より探掘したる、純粹の黃銅鑛の一塊を取り、分析に附したる結果を左に擧ぐ。

銅、三三〇七 鐵、三三二八〇 硫黃、三三三八〇 不溶解物、〇・二二 計九九七九

探鑛 本鑛區の探掘總面積は、百八十八萬二千六百三十坪にして、其の探掘法は、主として階段探掘法を用ひ、又抜き掘法をも併用す。階段探掘法とは、鑛石の富否を論ぜず、段の高さ六尺六寸、幅は鑛石脈に應じて、開鑿するものにして、受負法に依りて、坑夫を使役するものを云ひ、又た抜き掘法

とは、鑛脈中の鑛石のみを採掘するものにして、之れを天秤にて量り、各以より試鑛を採り、含有鑛分を目分量にて鑑定し、應分の賃金を支拂ふものを云ふ。又本山の鑛脈は、大抵堅硬なる石英粗面岩中に含有せらるゝを以て、支柱法の如きは、頗る容易なりとす。排水は、悉く通洞有木小瀧の三疏水道に集注し、是れ以外には、毫も坑水を流出せしめず。亦た通氣法は、別に機械力を用ひずと雖も、所々空氣の通路に、板戸(坑開)を配置して、空氣流動の速度方向等を調節し、或は風箱を坑道の上部に装置して、其の流通循環を助く。而して、坑夫の就業時間は、一晝夜を三分して、八時間毎に交代せしむ。

探掘坑 現今採掘中の主要なる横坑道は、本口坑通洞坑有木坑小瀧坑の四坑道にして、全山探掘鑛石の大部分は、主として此の四坑口より出て、各撰鑛所へ輸送せらる。左に各坑道の位置及び其の構造の概略を述べん。

本口坑は、鑛業事務所の西南、二百九十八尺の高さにあり。横間歩繩を開掘せる横坑道にして、其の延長六千二百五十餘尺。坑口を距る二千六百三十二尺の所に大堅坑あり、其の深さ二百八十尺、下部は有木坑道に通ず。

探掘坑
本口坑

有木坑は、本口坑よりも低きこと二百八十尺、其の延長七千七百四十餘尺。大堅坑は、坑口を距る四千七百六十一尺の所にありて、其の深さ三百十七尺に及び。

小瀧坑は、有木坑よりも、尙ほ四十五尺低く、其の西南に方り、峻嶺を隔て、背部に位す、延長八千八百八十四尺。坑口より二千三百三十八尺を入りて、深さ四百二十尺の大堅坑ありて、通洞坑に連絡せり。

通洞坑は、有木坑よりも低きこと四百六十九尺、渡良瀬川に臨む。其の延長實に一萬〇二百三十餘尺にして、北西に向ひ、有木大堅坑の下底に達し、上部の諸坑道と聯絡を通じ、疏水通氣運搬上に至大の便を與ふ。此の聯絡工事は、十一個年の星霜を経て、去る二十九年の末に至り、漸く竣成せり。

又有木小瀧の兩坑道は、相連絡して複線レールを敷設し、電氣機關車を以て、鑛車を撰鑛所と往復せしめ、轟々軋々の響常に絶えず。

右の外、坑外より通ぜる横坑道は、出合坑外八條あり。是れ等主要坑道間に、凡そ六十尺毎に小坑道ありて、坑井或は堅坑を以て相聯絡す。即ち横坑

有木坑
小瀧坑
通洞坑